

Civilizations

No.15 2010

Contents

iii
Preface
Yutaka Kato

1
Construction of New Society based on the philosophy of dialogue and convivence

3
Geologic Influence on Cultural Development:
Comparison from a Viewpoint of Resources Anthropology among the Islands of Iki,
Tsushima and Cheju in the Straits of Tsushima, the Sea of Japan
Kenichi Harada

13
Environmental and Cultural Controversy in Global Society:
“The Cove” and fishing dolphins
Keiko Ishihara

23
Co-constructing Conversations in English and Japanese
Yuko Iwata

35
Secularism in Kerala, South India:
Modernity, Public Space, and Religion
Misako Kawano

47
The Art at the Time of Mexican Revolution:
Some Problems of Latin American Civilization in Mural Paintings
Teruaki Yoshida

63
An Approach to the Care for Dementia Sufferers in Relation to the Domain of Design
Masato Yamazaki and Julie Shin

71
A Modern Expression of an Individual Society
The possibilities of interactive communication using GPS technology and mobile phones
Akio Ikemura

73
A Modern Expression of an Individual Society
The Possibilities in Interactive Communication using GPS Functions and Mobile Phones:
PICTORI: Instant Communication Based on Location and Time Sharing
Osamu Uchida

77
A Modern Expression of an Individual Society
The Possibilities in Interactive Communication using GPS Functions and Mobile Phones:
Considerations of systems and design for participating in the network
Makoto Tomita

81
The Possibility of Local Collaboration in Public Communication
Takayoshi Kawai

87
“Psychological Change” of the Youth in Contemporary Japan Compared with Nikkei
Young People in Latin America
Masaki Tsunokawa

93
Reclamation of Mountainous Society in Cooperation with the University:
What did we find through fieldwork to create a philosophy of dialogue and symbiotic relationship?
Yasuo Suzuki and Yasuhisa Tanaka

Institute of Civilization Research, Tokai University

文明

No.15 2010



Institute of Civilization Research, Tokai University

No.15 2010

東海大学文明研究所



iii
アーレントの文明論
加藤 泰

1
対話と共生を理念とする新しい社会の構築

3
地質と文明
—— 奄岐・対馬・済州島をめぐる資源人類学の旅 ——
原田 憲一

13
グローバル社会の環境問題と地域文化
—— 映画『ザ・コープ』のイルカ漁への問いかけ ——
石原 圭子

23
英語会話と日本語会話における協同構築
岩田 祐子

35
南インド・ケララにおけるセキュラリズム
—— 近代・公共空間・宗教 ——
川野 美砂子

47
メキシコ革命期の芸術
—— 壁画にみるラテンアメリカの文明的問題 ——
吉田 晃章

63
デザイン領域が関与する認知症介護へのアプローチ
山崎 正人, 申珠 莉

71
現代の表現における個と社会「GPS 機能および携帯電話を利用したインタラクティブ・コミュニケーションの可能性」
—— プロジェクト総論 ——
池村 明生

73
現代の表現における個と社会「GPS 機能および携帯電話を利用したインタラクティブ・コミュニケーションの可能性」
—— PICTORI : 位置と時間の共有による
ゆるやかなコミュニケーション ——
内田 理

77
現代の表現における個と社会「GPS 機能および携帯電話を利用したインタラクティブ・コミュニケーションの可能性」
—— ユーザーがネットワークに参加するための仕組みと
デザインに関する考察 ——
富田 誠

81
公共コミュニケーションにおける地域協働の可能性
河井 孝仁

87
現代日本の若者の「心理的变化」について
—— 日系人との比較から ——
角川 雅樹

93
山間地社会の再生と大学の地域連携
—— 「対話と共生」関係創生のフィールドワークから
何が見えてきたか ——
鈴木 康夫, 田中 靖久



No.15 2010

アーレントの文明論

今、ハンナ・アーレントが「ブーム」になっているという。「アーレント産業」という言葉さえあるのだそうだ。アーレントについて喋ったり書いたりすることで「商売」が成り立つということなのだろうか。「商売」ができるかどうかはさておき、「大きな物語」が失効したと感じられる現在、右にも左にも、進歩的にも保守的にも収まらないアーレントの思考は、確かに人間の生とは何か考えるうえで独自の視座を提供しているように思われる。

私にとっては、アーレントは何よりも『全体主義の起原』の著者であったが、その全体主義を生みだすことになった歴史の変容を、人間がおかれた根源的条件と人間が作り出した生活様式との関係の考察によって跡付けた『人間の条件』が彼女の主著とされている。これは一般には「政治哲学」に関する著作とされるが、内容の陰影に富んだ複雑さ、その文脈の広さと深さにおいて優れた「文明論」としても読むことができる。

『人間の条件』の構成そのものは単純である。まず最初に、古代ギリシャ人が人間の「活動的生活」（つまり「精神的生活」とは区別される）を「労働」(labor)、「仕事」(work)、「活動」(action)の3つに分類していたことが示され、残りの部分では、それらが近代社会においていかに変貌したかが詳細に議論される。ギリシャ文明では、「労働」は（食糧生産のように）生物としての必要性から行われるもので、それゆえ厭わしく私的領域に隠されるべきとされたのに対し、他の人間との間で行われる「活動」（そこに「言論」は欠かせない）が公的領域に現れるべき「真の人間の生」であったという。そしてこれこそが「政治的なもの」が意味することだった。「仕事」は、一方では、自然には存在しない永続的な人工的世界を作り出すものであるが（その点で「制作」の意味合いが大きい）、他方においてやはり生物学的必要に根差したものとされた（衣服や住居のように）。

近代において生じたのは、本来「自然の生命過程」に属し、私的領域で行われるべき「労働」が「仕事」をも飲み込んで公的領域へと「不自然に」増大したことに反比例して、「活動」の本来の領域である公的領域が失われてしまったことである。「活動」が行われない限り、複数の異なる人間がそこに現れ「人間の生」が営まれる「共通世界」は成立しない。そのかわり、生命の必要性から労働する均質な個人、いわば「労働する動物」からなる「社会」が作られたのだという。

さて、近代文明に対するアーレントの見方をどう評価することができるだろうか。古代ギリシャを理想とする「反近代主義」とみなすこともできるかもしれない。近代社会ではそもそも「仕事」と「労働」を区別することはできないし、「言論」が「仕事」であってもおかしくはない。「仕事」や「労働」なしに「人間の生」を考えられるだろうか、という疑問もありうるだろう。しかし、それが世界を理解するための「正確な」概念化かどうかというより、むしろアーレントがあたかも人類学者がそうするように、ギリシャ人が世界を見る概念を用いて近代世界あるいは現代文明を見ているのだと考えることもできるのではないか。マリノフスキーがトロブリアド島民の概念化を用いて、レヴィ＝ストロースがアマゾンの住民の概念化を用いて現代文明を見るように。

たとえば、トロブリアンド島民は生命を維持するための基本的食物であるヤムイモを作る労働を決して厭わしいものとは考えていなかった。しかも、そのヤムイモを他者に贈与し、また他者から受け取ることが公的領域を作り出していたのであって、自分で作ったヤムイモを「私的に」消費することこそ「恥ずかしい」ことだった。ただし、それなしには人生が無意味になってしまうような「活動」、すなわち「真の人間的生」を作り出していたのは、それ自体は生命にとって必要とはいえない貝の装飾品の贈与交換であったのだが。

「人間的生」についてのこうした異なる視座がありうることを認めたうえで、アーレントが示して見せる「ギリシャ的視座」は稀有の深みに到達していると言えないだろうか。

文明研究所所員
加 藤 泰

対話と共生を理念とする新しい社会の構築

文明研究所では、人類の顕著な特性である社会的・文化的多様性とこうした多様性を巻き込んで展開されてきた現代文明との相互作用を考察し、新しい文明への道を探求するためにコアプロジェクト「現代文明の展開と社会文化的多様性」「グローバリゼーションと生活世界の変容」を遂行してきた。

これに引き続いて推進するコアプロジェクトは「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」である。「現代文明の展開」を対話と共生という視座を軸として把握し、新しい社会がこのプロセスの中でいかに変容し再編成されているかを明らかにする総合的文明研究を目指している。知覚された環境の中において、一定の社会関係とモノを含み、文化的に意味づけられ価値を与えられ、感情によって充填された共同的時空間としての新しい世界は、どのような文明史的局面を迎えているのだろうか。

本号では、原田憲一氏の講演にもとづく講演録を掲載する。

第24回（2010年7月1日）「地質と文明——壱岐・対馬・済州島をめぐる資源人類学の旅——」 原田憲一

地質と文明

—— 壱岐・対馬・済州島をめぐる資源人類学の旅 ——

原田憲一 京都造形芸術大学芸術教養教育センター教授

1. 地質学から比較文明学へ

みなさんこんにちは。本日のテーマは「地質と文明」です。地質学は皆様には縁遠い学問でしょうから、最初に地質学がなぜ文明と結びつくのかを説明します。私は大学院で海洋地質学を学んでいました。修士課程にいた1973年に東海大学海洋学部の望星丸に乗って四国沖を航海した時、マンガン団塊が大量に採取されました。マンガンと鉄の酸化物の沈殿物で、色は真っ黒ですが、形とサイズはジャガイモそっくりです。当時から有望な海洋鉱物資源と評価されていたにもかかわらず、成因はまったくの謎でした。そこで、私は博士課程で形成機構の解明に取り組みました。

資源とは、現在の技術で経済的に利用できる天然物です。たとえば、石器の鎌や錐などに用いられる黒曜石は、マグマが急冷して生じた天然のガラスです。マグマは地下深部で岩石が溶けた高温の流体です。地層に貫入すると、周辺の地層を熱で変成させ、場合によっては金や銀、あるいは粘土や陶土などの鉱床を形成します。そして、マグマ本体は冷えて固まって硬い岩脈になります。地表に噴出すると通常は溶岩となりますが、水中に噴出して急冷するとガラスになります。黒曜石は日本列島の特産品で、旧石器時代と縄文時代には朝鮮半島や沿海州に運ばれていました。当時は大きな資源価値があったのです。しかし、青銅器が発明されると、たちまち石器は使われなくなって、黒曜石は資源価値を失いました。新たに資源となったのは銅鉱石です。しかし、青銅器よりも硬くて鋭い鉄器が実用化されると、銅の資源価値は減じました。黒曜石は今でもたくさんあります。しかし今後、工業原料として利用される可能性は少ないので、黒曜石が資源価値を取り戻すことは難しいでしょう。

マンガン団塊にはマンガンの他に銅やニッケルなどが含まれていて、潜在的な資源価値があります。しかし、深海底のマンガン団塊の採掘と海洋環境の保全をどう両立させるのか。そして、そうまでして掘りあげたマンガン団塊をどう使うのか、ということは技術に関する問題です。本来、技術は人間生活を良くするためのものです。ところが現代の科学技術は、オ

ゾン層の破壊や大気・土壌・水質の汚染など、人類の存亡にかかわる深刻な被害をもたらしています。また、エネルギー源として大量の化石燃料を消費することから、大気中に排出される二酸化炭素(CO₂)による気候の温暖化が問題になっています。しかし、CO₂は地球誕生時から大気に含まれていたものです。しかも、「恐竜の時代」と呼ばれる中生代(トリアス紀・ジュラ紀・白亜紀)は、CO₂濃度が今の10倍以上もあり、気候は今より10℃以上も温暖でした。ジュラ紀には、恐竜が巨大化しただけでなく、森林が繁茂して石炭が形成されました。巨大炭田が形成された古生代石炭紀も温暖な時代でした。ジュラ紀と白亜紀の海では、プランクトンが大繁殖し、その結果海底の堆積物に蓄積した遺骸(有機物)から石油ができました。世界の巨大油田はこの時代のものです。地球の歴史からみれば、温暖化は何ら生き物に悪影響を及ぼさない、と言えるでしょう。

多くの生き物がいっせいに絶滅する大量絶滅は、過去5億年間で5回生じています。古生代と中生代の境界では生き物の95%が絶滅しました。白亜紀末には、陸では恐竜や翼竜が、海では魚竜やアンモナイトなどが絶滅しました。全貌は未解決ですが、急激な寒冷化が一つの原因だとされています。大量絶滅は、温暖化した時にではなく、寒冷化した時に起きた。ということで、温暖化は恐れるに足らずです。

それよりも深刻な問題は、6億年前にできたオゾン層に初めて穴が開いたとか、2億年以上も前から母乳で子育てしてきた哺乳類の母乳から有害な水銀やDDTが出てきたという事態です。原因は先進国の人々の暮らし方にあると明白に分かっているのに、なぜかCO₂しか騒がれません。しかも、いつの間にかEU主導の排出権取引という話になっています。

技術は決して価値中立とはいえません。誰がどういう目的で開発した技術か、それは資源をどのように使うのか、で資源の消費速度と環境への負荷率は大きく変わります。したがって、資源の浪費を防ぎ、環境への打撃を最小限にするためには、社会のあり方や自然の見方も含めて、技術のあり方を考える必要がある。ということで、私は地質学の勉強から始めて、資源、技術そして文明へと興味を広げていきました。

ところで、この文明研究所の第三期プロジェクトは「対話と共生」だとパンフレットで謳っています。確かに「対話」は重要ですが、日本で実践することは、意外に難しいものです。専門家の多くは自分の学問範囲をできるだけ狭く限定したがるからです。そして、少しでも議論のテーマが自分の学問的枠組みからはみ出ると、「それは私の専門外ですから」と口を閉ざすので、なかなか対話が進みません。私も30年前に文明研究を始めた途端、地質学会で講演することが難しくなりました。地質と文明は無縁だと考える人が多かったからです。そうした時に、比較文明学会と出会いました。入会案内に「開かれた学会」、「総合的な学会」と書いてあったので、ここなら裏切られることはないだろうと入会しました。期待通り、さまざまな分野の研究者と対話して、自論を発展させているところです。

2. 風土条件と地質条件

図1は梅棹忠夫が定義した「文明」の図解です。文明とは大きな生産システムと都市を統治する複雑な社会システムです。生産システムのなかの食糧生産は、いわゆる風土条件(図2)が大きな制約となっています。しかし、農業の土台となる土(土壌)には地質も大きく影響しています。土の主成分である砂と泥は岩石の風化に由来しているからです。一般に、玄武岩や安山岩といった火山岩は鉄やマンガン、ナトリウムやカリウムなどのミネラル分が多いので、火山岩が風化してできた土は無機養分が豊かです。また、山で生じた砂と泥は、地すべりや洪水、火砕流や火山泥流などによって山麓や平地に運ばれるので、いわゆる災害多発地帯の生産力は高くなります。

長崎県平戸の9万年前の地層から最古級の石器が出土しています。済州島では5万年前の人間の足跡が発見されています。こうした1万年以上前の旧石器時代の遺跡の数は、中国で数百、朝鮮半島では百足らず。それに対して日本は4000以上です。韓国は日本ほど発展していないので、まだ発掘例が少ない、と言えるかもしれません。しかし、今や韓国の経済発展は目覚ましいので、発掘の空白地帯が多いとは言いきれません。やはり遺跡数の圧倒的な違いは、それぞれの地域における生産力の違いの反映です。日本列島は火山噴火や地震、洪水などが多発します。そのおかげで土地の生産力が高く、昔から多くの人々が暮らしていたので、その

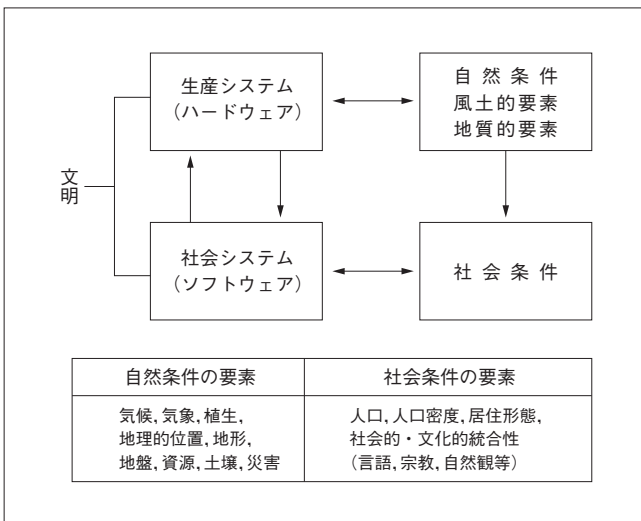


図1 梅棹忠夫説に基づく文明の構造の図解
(原田憲一「平安京の自然学—資源科学から都の工業生産を考える」鎌田東二編『平安京のコスモロジー』創元社、2010)

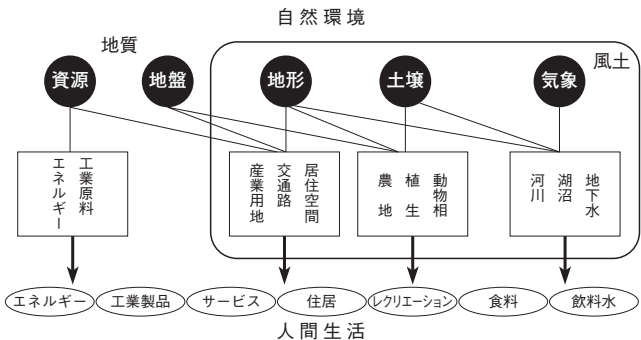


図2 自然環境の人間生活とのかかわり
海洋と自然災害は除いている。従来の比較文明論ではいわゆる風土が重視されてきたが、実際には、地質のほうがより大きくかかわっている。
(原田憲一「平安京の自然学—資源科学から都の工業生産を考える」鎌田東二編『平安京のコスモロジー』創元社、2010)

痕跡がたくさん残っているのです。

5500年前に都市革命が起こると、地質条件が生産システムの新たな制約となりました(図3)。都市に必要な建材や鉱石、陶土などの資源をどう確保するのか。また、巨大な構造物を支える良好な地盤をどこに見出すのか、ということが大きな問題になるからです。たとえば、金属器や陶器を大量に作ろうとすれば、銅鉱石や鉄鉱石、陶土など資源の有無が問題になります。それから、大きな神殿や王宮を造るとなると、大量の石材やレンガ、木材などの建材を確保しなくてはなりません。それだけでなく、地盤の良否も問題になります。西欧では、ケルンやトリアなど、ローマ時代から石積み建築で大きな町ができましたが、例外がありました。アムステルダムとハンブルクです。それぞれ、エルベ川とライン川の河口

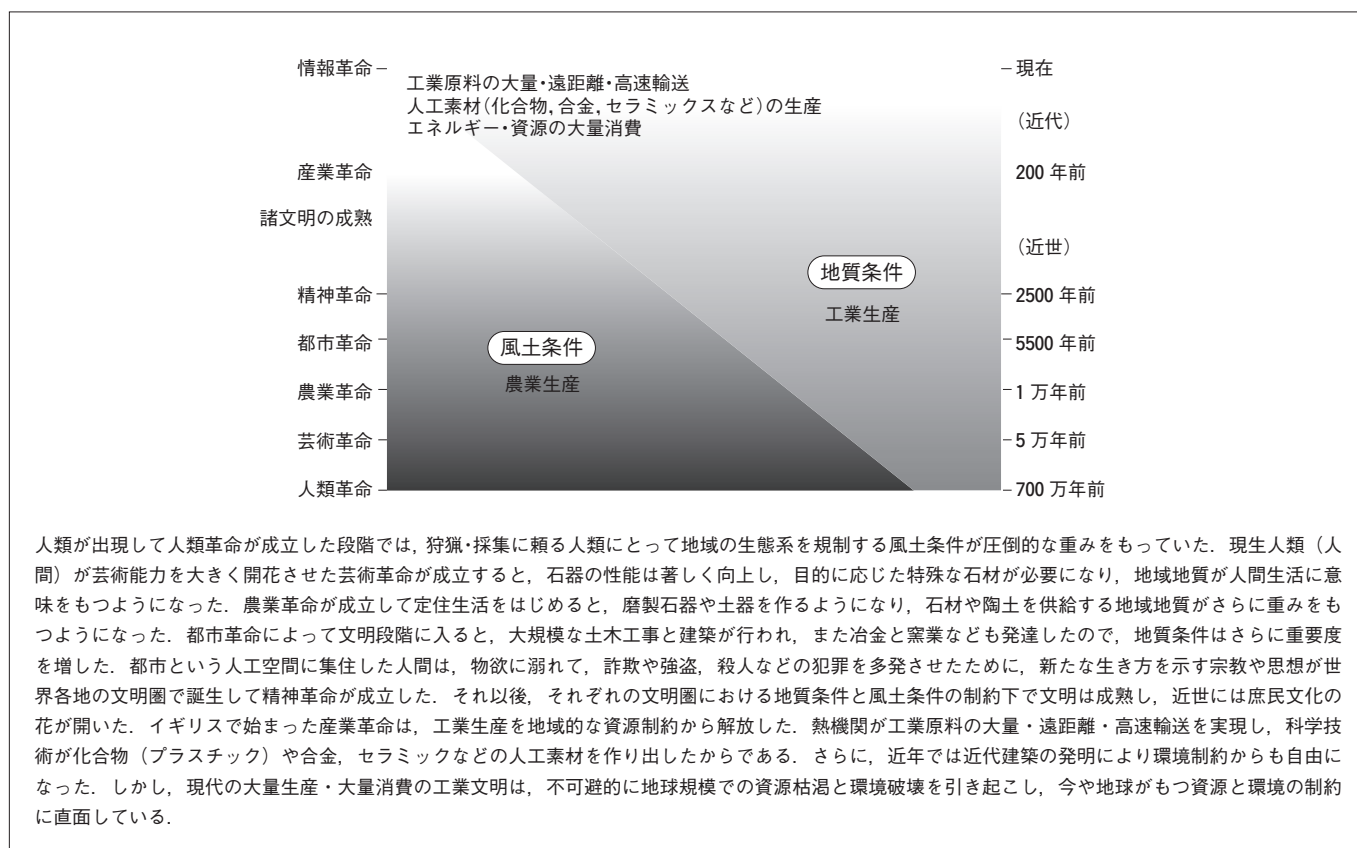


図3 人類史における風土条件と地質条件の相対的な重要度の変化
（原田憲一「平安京の自然学—資源科学から都の工業生産を考える」鎌田東二編『平安京のコスモロジー』創元社、2010）

に位置しているので、地盤は軟弱な沖積地です。軟弱地盤の上に重い石造建築を建てると、地盤が不同沈下して建物が歪み、最終的には崩壊します。したがって、土木技術が進んだ18世紀後半になって、ようやく悲願だった石造家屋が建てられるようになりました。資源の有無や地盤の良し悪しといった地質条件は、都市の形態と産業のあり方を制約する大きな要因なのです。

ところが日本では、地質学はほとんど教えられていません。その上、和辻哲郎の『風土』や梅棹忠夫の『文明の生態史観』の影響もあって、文明成立の制約として、気候や植生といった「風土条件」（図2）が重視されています。足元の地質は少し専門的な知識をもたないと理解できませんが、風土の違いは誰にでも分かるからです。たとえば、日本人がギリシャに行けば、モンスーン気候と地中海性気候の違いは肌で実感できます。植生や農業、服装や家の建て方の違いも一目瞭然です。しかし、パルテノンの丘が石灰岩でできていることには、なかなか気づくことはできません。そのため、バブル景気に沸いた1980年代には、風土論を下敷きにした日本人論・日本文化論が流行りました。

たとえば、西欧人は狩猟民で日本人は農耕民だ、という説です。しかし、日本には弥生時代まで本格的な農業はなかったのに対して、西欧は6000年以上前から農耕段階に入っていました。だから、彼らに「お前たちは狩猟民だ」といえば猛反発を食らうことは必至です。しかし、日本語なら誰も読まないだろうと平気で書いたのでしょう。これと似た説は、西欧は肉食文化で日本は米食文化だというもの。ところが西欧でも、庶民が肉を日常的に食べることができるようになったのは産業革命以降です。それ以前は、みんな食うや食わずでした。また、韓国と聞けば「焼肉」を思い浮かべるように、韓国では昔から牛肉を食べていました。肉食は西欧人の専売特許ではないのです。それから、日本人どん百姓論です。日本人は百姓ばかりで、田植えも稲刈りも、何をするにも隣を見ながら横並び。だから何事も自分で決断できない、と。しかし、韓国も中国南部も水田稲作です。しかも、産業革命以前の世界は、遊牧民以外は、大部分が農民でした。日本人の「横並び主義」を水田稲作と結び付けるのは強引すぎます。

このように、文明比較の際に風土条件だけを取り上げると、観察範囲が狭くなり、誤った結論に陥ります。手工業につい

ては、比較することもできません。産業革命以前は、各文明圏に特徴的な風土条件と地質条件を活かして生産システムを向上させていたので(図3)、二つの条件を考慮すべきです。

たとえば、中国は古代から強い火力を使いこなして窯業や冶金を高度に発達させました。しかし、産業革命以前の長距離輸送の手段は牛馬やラクダ、帆船などに限られていたので、遠隔地に輸出されたものは、最高級の陶磁器や絹織物など、軽くてかさばらずに価値のあるものだけでした。そして、輸入者は渡来品を参考にして、焼き物や織物の技術を改良しました。ところが西欧人は、18世紀後半に石炭を焚いて物を動かす蒸気機関を発明して、文明構造を大きく転換しました。すなわち、19世紀初頭に汽車と汽船を発明して大量・長距離・高速輸送を実現し、世界各地から必要な物を必要なだけ運んで、西欧の風土と地質の制約を乗り越えました。コンクリートと鉄とガラスで作られ、エアコンとエレベーターを備えた近代ビルは、その象徴です。

現在は、石炭に代わって石油が燃料に用いられていますが、今のように安い石油は50年以内に無くなるでしょう。石炭は、量的にはあと百年はもつでしょう。しかし、石油に比べると不純物が多くて重金属も含まれています。燃やすと有害なガスと煤と石炭がらが出るので、環境汚染が加速されます。日本付近の深海底の下にはメタンハイドレートという、メタンガスと水とが結合した一種の氷が大量に分布しています。メタンは一つの炭素に四つの水素が結合したガスです。燃やすと水とCO₂が出ますが、同じ熱量を得るには、石油を燃やすよりはるかにCO₂が少なくてすむので、有望なエネルギー資源と考えられています。しかし、今年起きたメキシコ湾の海底油田事故のように、深海底からメタンハイドレートを取り出す際に漏出事故が起こると、気候に大きな影響を与えます。メタンガスはCO₂の20倍もの温室効果をもつからです。したがって、メタンハイドレートが本当に実用化できるかどうかは分かりません。もしできたとしても、資源と環境から考えると、「地球の裏からでも必要なものを必要なだけ運んでくる」という生き方を、今後50年も続けることは難しいでしょう。

こうした事態に直面した場合、経験を積んで成熟した大人なら、できるだけ視野を広げて先を見通して対策を立てるものです。一方、未熟な人は、今さえ良ければと、目先のことしか考えません。文明を一種のシステムと見なすと、システムを動かす人々の未来に対する態度が見過ごされる危険性

があります。文明というシステムを動かす人間の民度の問題には、後ほど戻ります。

3. 壱岐・対馬・済州島の地質と暮らし

文明を比較するには、風土条件を考慮するだけでは不十分である、という実例を対馬海峡に浮かぶ3つの島で示しましょう。長崎県の壱岐・対馬と韓国の済州島は、風土論的にいうと、すべてモンスーン地帯にあって、気温も降水量もほとんど変わりません。文化的には、漢字、儒教、仏教の影響下にあります。しかし、現地調査すると地質条件はそれぞれに異なり、その違いを反映した生活様式が顕著に認められます。

壱岐と対馬の宇宙映像を見ると、壱岐は平坦に見える一方、対馬はなんとなくギザギザしています。実際、『魏志』倭人伝には、対馬は山が険しくて禽獣も通れないと書いてあります。当時の対馬の人口は約「千余戸」でした。一方、壱岐の面積(134平方キロ)は対馬の5分の1しかないのに、人口は「三千許家」、と対馬の約3倍です。『魏志』倭人伝の時代から高い生産力を誇っていた壱岐は、今でも米を博多や長崎に移出しています。

壱岐の生産性が対馬よりもはるかに高い理由は、地質の違いにあります。壱岐は、第四紀に噴出した流動性に富んだ玄武岩が作った溶岩台地で、西海岸の勝本町には湯ノ本温泉が湧出しています。標高100〜20メートルの間に何段かの台地があり、台地上に約20万年前に噴火した小火山が点在しています。溶岩台地が風化してできた豊かな土は、開けた谷筋に分厚く溜まっています。そして、川の流れが緩やかなので、谷間の平地は水田となっています。里山の裾に家がならび、その前面に水田が広がる。まさに、弥生時代の原風景がそのまま残っている、といえるでしょう。

対馬の土台は、古第三紀(3000万年前)の日本海に溜まった泥岩と砂岩(砂岩泥岩互層)を主体にした対州層群です。地層が激しく褶曲して隆起してできた島なので、地形は険しく、海岸線も非常に複雑です。その上、何度もマグマが貫入して、地表に露出した岩脈が直線的な峰を作っています。南部には大きな花崗岩質マグマが貫入して、地下で銀鉱床や亜鉛鉱床などを形成しました。また、地層を熱変成して陶土や硯石(若田硯)を形成しました。地表に露出した花崗岩は風化しやすいので、花崗岩体そのものは浸食されて平坦地

(盆地)となり、そこに水田が広がっています。そして、熱変成で硬くなった周辺の地層が、標高 500 メートルを越す高い峰となって、盆地を取り囲んでいます。他の地域は地形が急峻で川も少なく、畑となる平坦地は 4 パーセント足らずです。しかも、堆積岩は火山岩が風化してできた粒子からできているので、砂岩や泥岩から生じる土はミネラル分に乏しく、狭い畑からは僅かな量の野菜しか収穫できません。いくら海産物に恵まれていても、人間は動物性たんぱく質だけでは生きていけません。必ず米や麦(でんぷん質)と野菜が要ります。したがって、『魏志』倭人伝が伝えるように、当時から「南北に市糴」していた島民は、今でも壱岐や九州本土から米や野菜を移入しています。

壱岐と対馬には古墳がたくさん残っています。たとえば、掛木古墳は直径 30 メートル高さ 7 メートルほどの円墳で、6 世紀末から 7 世紀初めに韓国から伝わったものです。韓国慶州の古墳公園にある大小の円墳のシルエットは背景にある山々と見事に重なっています。おそらく初期のものは慶州の山を模して造ったのでしょう。

壱岐の円墳の羨道と前室、玄室は大きな自然石で組まれています。火山岩の硬い部分が風化されずに残ってできた岩なので大変硬く、当時の技術では加工できなかったからです。私が巡ってみた幾つかの古墳はすべて、大きな自然石が使われていて、全体がこんもりと土で盛られた円墳でした。有名な「鬼の岩屋」は封土が流されて玄室が露出したものです。それに対して、対馬の古墳は、小さくて貧弱です。封土用の土がないからです。玄室などはブロック状の石材をきっちりと積み上げて作っています。石材は対州層群から切り出した砂岩です。海岸の崖に露出した砂岩泥岩互層の泥岩が激しく風化した所では、砂岩が板状に切り出せるのです。

対馬の古墳は海岸の砂岩を利用し、壱岐では山中の自然石を利用しているので、両島の代表的な古墳の分布を見ると、壱岐では内陸部にあり、対馬では海岸と海岸に面した小高い峰の上にあります。今でも海に面した神社の鳥居が、地元の漁師が漁に出た時の目印になっている例があるので、完成当時の古墳は、島民が帰港する時にだけでなく、韓国や中国からの使者が対馬と壱岐に来た時にもよい目印になったことでしょう。

対馬には石屋根小屋という独特の木造倉庫があります。明治維新まで、島民は瓦屋根を禁じられていたので、母屋はす

べて板屋根でした。石屋根小屋は、対州層群から切り出した板状の砂岩で葺いています。厚さ 5~10 センチメートル、サイズは大きいものでは畳ほどもあります。屋根は非常に重いので、側柱で軒を支えています。石屋根小屋は対馬名物の一つで、昔は島中にあったといわれています。しかし、現地調査してみると、分布は主に島の中央部から南部に限られています。島の北部では、同じ砂岩泥岩互層でも、砂岩と泥岩の層がともに厚くなって、砂岩が板状に切り出せません。ところが、中央部から南部にかけては、砂岩と泥岩の厚さが薄くて均一になるので、条件のよい崖では、畳状の砂岩を切り出すことができます。明治時代に、浅茅湾の島山島から石材を汽船で運んだことが知られています。しかし、汽船やトラックが無い時代はできるだけ近い所から石材を採取したので、石屋根小屋の分布は良好な石材が切り出せる地域に限られているのです。

もう一つの特徴的な建物は、海岸に建てられた藻小屋です。海岸に無尽蔵に転がっているレンガ状の砂岩を積み上げて壁を作り、木造の屋根で覆っています。冬の日本海は風が強いので、ここに漁船を保管しました。春になると、岸辺に打ち寄せられた海藻を集めて小屋の中で発酵させ、肥料として畑に入れました。同じことは、アイルランドのアラン島でも行われています。この島は何度も氷河で削られたために、硬い変成岩がむき出しになっていて、表土がありません。畑の土は島に住み着いた漁民が年月をかけて育てたものです。すなわち、荒波が海岸に打ち上げた海藻を集めて堆肥にし、岩を砕いて作った岩粉を混ぜて畑に撒いたのです。そして、大切な土が風に飛ばされないように、石堀を畑の周りにめぐらせています。

済州島は、おそらく花崗岩を土台にして、活火山である漢拏山が作った東西 73 キロ、南北 42 キロの楕円形の島です。ハワイ島と同じく、玄武岩の溶岩が積み重なってできた楕状火山です。標高 1950 メートルの山頂では、冬に雪が積もってスキーができます。多孔質な溶岩は透水性が高いので、雪解け水や雨水はすぐ地下に浸透します。大雨の時を除けば、谷はいつも枯川になっているので、広大な裾野に水はありません。地下に浸み込んだ水は緻密な地層に遮られて、地下水となって横方向に流れ、海岸付近で湧き出しています。南海岸では、いくつかの見事な滝を作っています。

済州島民俗自然史博物館には、昔の生活がジオラマで復

元されています。村の女性の日課は近所の井戸や泉、滝まで行ってかめ（ムルホボク）で水を汲んでくることでした。家の横にある大きな水がめを満杯にして、料理や洗面に使いました。現在は地下水をポンプで汲み上げて水田稲作を行っていますが、それ以前は畑作が主体で、小型の牛に犁を牽かせていました。水田の泥なら、硬い木で作った犁で代掻きができますが、畑の土には小石や砂が混じっているので、木製の犁は使えません。それで、農民たちは簡単な溶鉱炉に足踏み式の鞆（ふいご）を付け、炭を燃やして鉄を溶かし、鋳型に入れて鋤や犁の先に付ける刃を作っていました。

『魏志』倭人伝には、倭人が頻繁に朝鮮半島の南海岸に鉄を採りに来たと書いてあります。また、明治維新の頃に朝鮮王国に潜入した宣教師が、朝鮮半島南部では農民が簡単な炉で製鉄している、と報告しています。「日本のたたら製鉄は専門の職人集団が独占していたのに、なぜ韓国では簡単に製鉄できたのか」は長らく謎でしたが、1998年に氷解しました。訪問した釜山大学附属博物館で手にした鉄鉱石の塊は、純粋な鉄だったのです。ではなぜ釜山付近では、純粋な鉄が地下から掘り出せるのでしょうか。

白亜紀末（7000 万年前）、釜山の近くに巨大な火山があり、地下には大きなマグマ溜りがありました。マグマ溜りは、地下深部から上昇してきたマグマが一時的に溜るところで、火山の地下 5 キロ前後の所にあります。このマグマ溜りからマグマが地表まで上昇すると、火山噴火が起こります。マグマ溜りの中では、岩石に含まれていた重い鉄は底に沈み、冷え固まると純度の高い鉄となります。その後、7000 万年の間に火山体とマグマ溜りの大部分が浸食されました。そして、地表に露出した高品位の鉄鉱石を農民が掘り出して、簡易な溶鉱炉で溶かして鋳型に流し込んでいたのです。

済州島には固有の小型馬（ヂョランマル）がいます。これに木製のローラーを引かせて、鋤で起こした畑の土を砕いて軟らかくします。そして、貴重な土が風で飛ばされないように、アラン島と同様に、石塀で畑を取り囲んでいます。

収穫した小麦や大麦は脱穀して製粉します。家庭では、女性が杵と木臼で麦を搗いて脱穀しました。棒状の杵は、月面で餅を搗く兎が持っているようもので、私がインドネシアのジャワ島中部で見たものとよく似ています。村には共同製粉場があって、大きな石臼の上に石のローラーを置いて、ヂョランマルに引かせていました。中世の西欧では、封建領主

表 1 壹岐・対馬・済州島の地質条件と生業の関係

	地質	地形	資源	生業
壹岐	第四紀の玄武岩	溶岩台地	肥沃な土壌と地下水	漁業・稲作
対馬	古第三紀層（対州層群と貫入岩類）	急峻な地壘山地	各種の鉱床（金属・陶土・陶石）	漁業・鉱業
済州島	第四紀の玄武岩	楯状火山	伏流水と泉・滝、礫	畑作・畜産・漁業

が小麦の製粉用の水車を独占して、農民に使用料を払わせた。これを経済外強制という、と社会の時間に習いました。「西欧の中世とはそんな社会か」と思ったのですが、すぐ隣では馬を使って製粉していたことは習いませんでした。

済州島には大地震はありません。漢拏山が噴火する前にマグマが動いて小さな地震を起こしますが、地盤が締まっているので、大きくは揺れません。したがって、庶民の家は長方形で、壁は石造りです。石材は人頭大の礫で、おそらく海岸や谷底で拾い集めたものでしょう。隙間は泥で埋めています。屋根は藁葺きです。そして、屋根が風で飛ばないように、屋根全体に網を被せています。家の外には水汲み用のムルホボクが石の台に載せてあって、立ったまま背負えるようになっています。家は石塀で囲まれていて、門には穴の開いた石柱が対で立っています。そこに棒が 2 本かけてあると「外出中」、1 本だと「すぐ戻る」、何にもかけていないと「在宅」を示します。昔は泥棒がいなかったので、こうして在・不在を訪問者に知らせたのだそうです。

このように、同じ風土条件の下にあるように思われる 3 島ですが、地質の違いを反映した島のサイズ、地形（起伏量）、土の生産力、農業用水の有無、といった要素で生業が大きく違うということが分かります（表 1）。

4. 平安京の資源学

3 年前に、比較文明学会員である京都大学教授の鎌田東二さんが「なぜ平安京は千年間持続したのか」をテーマにして「平安京研究会」を組織しました。研究会に参画するにあたって、私は逆に「なぜ平城京は 70 年しかもたなかったのか」と考えました。桓武天皇が平城京を捨てた原因は、一般的には皇族の怨念や政治的な対立にあったとされています。しかし、平安京は政治的な怨念と崇りが積み重なった都なのに、千年間、動かなかった。そこで私は、地質学の観点から原因を以下のように考えました。

第一の理由は水です。奈良盆地は京都盆地より広いのに、

水に乏しい（表 2）。大和盆地（大和川）からは年間 5.16 億トンの水が流出しているのに対して京都盆地からは 90 億トンも流出しています。盆地の地下には、琵琶湖の水量（270 億トン）に匹敵する、211 億トンもの地下水があります。平安時代に弘法大師が何度も雨乞いの儀式を行ったことが知られています。しかし、それは農業用の灌漑用水が干上がったのであって、日常生活とは関係がなかったはずです。庶民は地面を 1〜2 メートルも掘れば井戸水が利用できたからです。

二番目は資源の賦存量です。奈良盆地と比べて、京都盆地は水資源と森林資源だけでなく、石材や陶土などの資源にも恵まれています。また、水が豊富なので淡水性の魚介類も豊富です（表 3）。平安京では、こうした地場資源を活かして、寺院建築や料理を含めた手工業が発達しました。そして、天皇や公家そして寺社、のちには大名や商人などがパトロンとなって、職人を育てました。

第三是水運です（表 2）。京都盆地には桂川、鴨川、宇治川、木津川が流れていて、大山崎付近で合流して淀川となって大阪湾に流れ込んでいます。したがって、平安京へは、淀川を使えば大阪湾から、琵琶湖を使えば日本海から、木津川を使えば伊賀盆地から、そして桂川を使えば亀岡盆地から、物資を運ぶことができました。そして、実際、日本全国からさまざまな物資が平安京に運び込まれて、先端的な手工業を支えました。一方、奈良盆地内部には大きな川がなく、盆地の外側を流れる木津川しか水運として使えません。

飛鳥時代に都と寺院を建て始めた時、一番身近な木から切り出しました。その結果、奈良盆地を取り囲む山が次々と荒れて、山崩れや洪水が頻発するようになりました。それで仕方なく、木津川流域の山から木を切り出して、平城京に運び込むようになると、木津川に流入する土砂が増えました。そして、下流に運ばれた土砂が淀付近で堆積し、鴨川と宇治川の出口を塞ぎ止めたので、京都盆地の南部に巨椋池ができました。日本で最も古い環境破壊の産物ですが、平安京の水運には大きく貢献しました。これに対して平安京では、桂川を利用して北山の木材を筏で運ぶことができたので、京都盆地を囲む山々は荒廃を免れました。

余談になりますが、近江盆地を流れる愛知川や草津川は典型的な天井川です。原因は、江戸時代に鈴鹿山地の西から琵琶湖に広がる丘陵を乱伐したからです。山が荒れると、川は暴れ川になって、洪水の度に大量の土砂を運びます。流

表 2 京都盆地と奈良盆地の資源的特徴の比較

	京都盆地	奈良盆地
水資源（河川＋地下水）	◎	×
森林資源	◎	△
物流網（陸路）	○	○
物流網（水路）	◎	×
後背地の広がり	◎	○
後背地の資源量（種類と量）	◎	○
後背地へのアクセス	◎	×

（原田憲一「平安京の自然学―資源科学から都の工業生産を考える」鎌田東二編『平安京のコスモロジー』創元社、2010）

表 3 京都盆地に賦存する資源

水資源
河川水：灌漑用水、染織、水運 地下水：生活用水、食品製造・加工、醸造
食糧・生物資源
川魚、淡水貝類 京野菜、果物（柿・桃・林檎・葡萄）、松茸、筍 太秦・嵯峨・山科・醍醐の竹 八瀬・大原・鞍馬の黒木、薪炭 梅ヶ畑の杉
粘土資源
深草粘土：陶土（陶器、瓦、伏見人形）、壁土、硫黄（付木） 風化残存土：赭土（弁柄）、黄土、砥の粉
石材資源
白川石・鞍馬石：石材、庭石（庭砂）、石臼、重石 加茂石・貴船石：水石、盆石 鳴滝石：砥石（砥の粉） 鞍馬の火打石

（原田憲一「平安京の自然学―資源科学から都の工業生産を考える」鎌田東二編『平安京のコスモロジー』創元社、2010）

域の住民が洪水を防ぐために堤防を築くと、次の洪水で河床が埋まり、更なる堤防の嵩上げが必要になります。それを繰り返した結果、川底が天井よりも高くなったのです。農民が乱伐と氾濫の因果関係に気づいて植林を進めたものの、古文書によれば、洪水がほぼ治まったのはおよそ 70 年後でした。

同じ事例はニュージーランドにもあります。観光客が広大な牧草地にたたずむ羊の群れを見て、「ここは自然が豊かだ」と喜ぶのですが、実は 19 世紀最大の森林破壊の痕跡を見ているのです。イギリスの移民が原生林に分け入り、カウリという造船に適した巨木を切り倒し、残りは木材や薪として切り出しました。そして、跡地を牧草地にして羊を飼い、肉と毛をイギリスに輸出して繁栄しました。国土改造の見本のような成果でしたが、入植後百年経った今、牧草地が激しく浸食されています。大量の泥が川に流れ込み、川底が浅くなって、洪水の規模が年々大きくなっています。下流に運ばれた泥は、河口で沈殿して港を埋めています。ニュージーランド政府は困っていますが、400 万の人口では、今さら牧草地を

段々畑に直すことは不可能です。しかし、対策を講じないと、国土の荒廃がさらに進むことは明かです。

人間は、積極的に自然を利用しないと生きていけません。しかし、現生世代が「最大多数の最大幸福」を求めて森林を破壊すると、被害が顕在化するのは百年後つまり孫の時代です。それから対策を講じて、植生が復旧するのはやはり百年後です。そうした自然の反応を経験的に学んだ昔の人は、身の回りの自然をできるだけ傷つけないように、できるだけ反作用が無いような形で生きていく工夫をしていました。現に、アメリカ先住民のホピ族や琉球王国の漁民は「7世代先の子孫を考えて、物事を決めた」といわれています。1世代30年とすると、約200年先を考えていたわけです。現世利益にこだわる現代人よりも、はるかに文明度の高い思慮ではないでしょうか。

5. 地球規模での地質と文明

地質と文明の関係を地球儀のスケールで見してみましょう。日本列島には太平洋プレートとフィリピン海プレートが沈み込んでいます。1960年代の末まで、なぜ日本列島に地震が多いのか、誰も説明できませんでした。しかし、今ではプレートテクトニクス理論のお蔭で、理由は明かです。プレート運動が常に日本列島全体を圧縮しているの、「いつどこで大地震が起きてもおかしくない」ことが分かっています。その意味で、すでに地震予知はできています。とは言え、フィリピン海プレートが沈み込む東海沖で、近々発生すると予測されている巨大地震に備えることは重要です。フィリピン海プレートは固い一枚板で、日本列島だけでなくフィリピンや台湾の下にも沈み込んでいます。したがって、フィリピンや台湾の地震にも気を配り、フィリピン海周辺で同時多発的に地震が起これば、日本も危ないと考えた方がよいでしょう。

ところで、ドイツは20年前に地震予知の研究を止めました。予知の精度が高くなればなるほど、社会的混乱が激しくなると予測したからです。たとえば、建設資材や薬品の買占め、建設株や製薬株の買占めといった投機です。したがって、これ以上地震予知に資金を費やすよりは、むしろ震災軽減と復興に力を入れるべきだ、という判断です。大胆な政策の背景には、地震はライン川沿いにしか起きないことが分かった、という事実があります。日本でも、地震予知の精度が上がれば、そうした事態が生じることは明かです。投機の防止策

も研究すべきでしょう。

太平洋プレートとフィリピン海プレートは海溝付近でユーラシアプレートの下に沈み込んでいます。その際の摩擦でプレート境界に歪みが溜り、百年単位で巨大地震が生じます。海溝から大陸側に遠く離れた所では、プレートは柔らかいマントル内部に沈み込むために歪みが溜らず、ほとんど巨大地震は起こりません。したがって、対馬や済州島にも韓国本土にも大地震はありません。しかし、釜山から慶州にかけて大きな活断層が走っていて、千年に一回という割合で動いているようです。韓国といえども決して地震から自由ではないのですが、日本ほど頻繁でないことは明かです。

済州島のウォンダン寺跡には、島で一番古い玄武岩製の五重塔が残っています。高さは4メートル弱で、1階の基壇と5階の屋根石がとても小さく、アンバランスな塔ですが、地震がないので崩れません。慶州の仏国寺には、石造の多宝塔が2つ立っています。ソウルの昌徳宮と景福宮にも花崗岩製の優美な石塔が立っています。日本に仏教が伝えられて伽藍を建立し始めた時、韓国から大勢の技術者が来たので、当然、石造層塔も建てたはずですが、今は残っていません。

理由は、日本人が石の文化を知らなかったからだ、とはいえないでしょう。縄文時代の巨石遺跡が残っているからです。たとえば、大湯のストーンサークル（環状列石）です。川原から巨礫を大量に運び、日時計のように中央に一本大きな石を立て、周囲に石を同心円状にびっしり並べています。こうした技術的伝統があったからこそ、韓国の石積みの技法をたくみに取り入れることができたのです。対馬の金田城には、1300年前の石垣が今も綺麗に残っています。戦国時代に山城から平城に移ると、石垣の角には算木積みを用いました。つまり、整形した大きな石材を、稜線が曲線を描くように積み上げました。そして、上に櫓を建てて、重しをかけて石組みを安定させる、という工夫を加えています。ところが、天守閣はあくまでも木造です。韓国のように石壁で城を作ることはしていません。

農村における石組みの代表例は、伊豆半島の段々畑の石垣です。伊豆石という火山岩の礫を、畑一段につき2〜3メートルも積み上げて、法面を固めています。畑は下から上まで十数段あるので、石垣は全体で30メートル以上になります。このような、段々畑や棚田の法面を石垣で固める先人の努力

がなかったら、農地は瞬間に流失したはずで、事例はインカ帝国のアンデネスという、アンデスの急斜面に石垣を積んで作った段々畑です。スペイン人による征服後、たちまちアンデネスは放棄されて、食糧生産が激減しました。

ではなぜ技術的にも可能で、直接的に取り込むことができたはずの石造層塔が日本に残っていないのでしょうか。その理由は、最初は建てたものの、地震の度に倒れたので、最後はあきらめたのだ、と私は考えています。その証拠に、白川石という良好な石材を産する京都盆地に都が移っても、本格的な石塔は立てられていません。韓国伝来の最先端技術といえども、石材や地盤そして災害の面から、どうしても受け入れられないものがあったのです。

日本列島と朝鮮半島に似た関係は、インドネシアとマレー半島です。地理的に近くてモンスーン地帯に属し、ヒンズー教、仏教、イスラム教の影響を等しく受けていますが、地質条件は全く違います。インドネシアは地震と火山の国です。先年のスマトラ巨大地震やメラピ火山の噴火は記憶に新しいところです。一方、マレー半島には地震も火山もありません。そして、人口は圧倒的にインドネシアの方が多いため、やはり地質災害が多いからです。すなわち、火山岩が風化してできた豊かな土砂が、地すべりや洪水、火砕流や火山泥流などで山麓や平地に運ばれるからです。

東アフリカもそうです。ここは、マントルの動きによってアフリカ大陸が分裂している所です。南北に走る大きな地溝帯の内部には、玄武岩が噴出しており、生産力の高い大草原は野生動物の天国になっています。初期の人類はここで発生して、最終的に全世界に広がりました。それから、中南米の太平洋岸も火山地帯です。この文明研究所の横山玲子先生が研究されているように、アマゾン川流域に比べると生産力が高く、さまざまな古代文明が発展した所です。

6. 文明のシステムと文明度

最近考えている問題は、文明圏の文明度、つまり民度です。梅棹流の「文明システム論」は使いやすい概念ですが、文明度は問題にしています。おそらく、西欧文明がシステム面でも民度の点でも、もっとも高い段階にある、ということを大前提にしていたからではないでしょうか。

西洋史は古代・中世・近代に三区区分する、と学校で教わりました。「輝ける古代」はローマ帝国に蹂躪されていた時代で

すが、土木技術をはじめ多くの先進技術が西欧に伝わりました。ローマ帝国滅亡後が「暗黒の中世」で、人々はローマ伝来の土木技術を忘れてしまいました。しかし、十字軍によるエルサレム侵略で古代ギリシャ文明を再発見し、イタリアのルネッサンを経て、「理性の近代」に到った、という流れです。

ちなみに、中世にはローマ帝国の後継者だと自認していた西欧人は、近代以降はギリシャ文明の継承者を自称しています。しかし、古代ギリシャは、キリスト教とは相容れない多神教の世界でした。しかも、ローマ帝国崩壊後、ギリシャ本土はビザンツ帝国とトルコ帝国に支配されたので、中世の西欧人は容易には行けなかったはずです。そして、古代ギリシャを持ち上げるためか、「ローマ人は土木工事には天才を発揮したが、科学的には何も生み出さなかった」と酷評しています。しかし、西欧にキリスト教を伝えたのはローマ人です。ガラスとブドウ酒の作り方も伝えています。ローマ法もゲルマン法に影響しています。この評価は納得できないので、専門家に教えを請いたいものです。

私たちは「近代」と聞くと、つい「自由・平等・博愛」、「基本的人権」、「民主主義」と口ずさんでしまいます。しかし、非西欧世界にとっての「近代」は、西欧列強によって植民地化された時代にほかなりません。その間、人権は蹂躪され、富が一方的に収奪され、伝統文化は破壊されました。しかも、植民地支配をめぐる、世界大戦が2度も起こりました。第二次世界大戦後は、欧米を舞台にした戦争は消えたものの、旧植民地における戦争は一向に止みません。欧米諸国が、現地の権益を確保するために、代理戦争を続けているからです。それに加えて、最近ではグローバリズムを通じて、金融面でも非西欧世界を収奪しようと企んでいるようです。

ところで、比較文明学会初代会長の伊東俊太郎先生は、非西欧世界には庶民文化が花開いた「近世」という時代がある、と指摘しています。日本なら室町から江戸にかけて、中国なら明以降、そしてインドではムガル帝国以降でしょうか。今日の日本文化は、近世の庶民文化が代表しています。たとえば、歌舞伎は庶民の娯楽であり、侍は能・狂言を鑑賞すべし、とされていました。しかし、現実には多くの侍が禁を犯して芝居小屋に通いました。大奥でも女歌舞伎を楽しみました。逆に、能・狂言は庶民にはご法度でした。しかし、歌舞伎役者が能舞台を覗き見して、ストーリーや所作を歌舞伎に取り込んで出し物にし、それが当たりをとり、大勢の侍が芝

居小屋に詰め掛けました。浮世絵や盆栽や根付なども江戸の庶民文化です。中国雑技団や京劇などは中国近世の産物です。こうした庶民文化が花開く時代が西欧になかったのであれば、西欧文化は相対的に未成熟ではないか。つまり、人間理解が浅いのではないか、というのが私の仮説です。

3年前、国際日本文化研究センターの井波律子教授が、京都新聞で1年かけて中国の名言を一日一句紹介しました。366のうち60近くが『論語』からの引用で、著者もこんなに多いと思わなかったと述懐していました。孔子が活躍したのは紀元前500年頃、弥生時代の前半です。にもかかわらず、その深い人間理解と高い倫理観は時代を超えています。だからこそ、清朝末期にアヘン密輸を取り締まった林則徐（1785～1850年）は、大英帝国が対中貿易の赤字解消のために大量のアヘンを密輸していることに対して、中国の庶民を苦しめることは、大国の王としての徳に反する、と抗議したのです。

「西欧文明は未成熟だ」と言えるかどうかは今後の私の研究課題ですが、環境と資源を無限に収奪する西欧文明は、もはや文明のモデルとすることができないことは明かです。地球の環境と資源が有限であるにもかかわらず、「自然は無尽蔵」を前提にした大量生産・大量消費という生産システムと「最大多数の最大幸福」を目指す社会システムは、人類全体を滅亡の縁に追いやるものです。

私たちの子孫は、大量輸送や大量生産ができない世界で、生きていかねばなりません。世界人口が激増した今日、どのように地域の自然と調和的に生きていくかは難問です。だからこそ、まず産業革命以前の先人の知恵を見直すことが重要です。すなわち、物流が限られていた低成長時代に、各文明圏でどのような生産システムが営まれていたのか。どのような人間理解に立って社会システムが構築されていたのか。そして、どのように民度を上げて社会の平和を保っていたのか、などを理解することです。そしてその際、地質学の観点を導入することが大切だ、というのが私の主張です。

ご清聴ありがとうございました。

参考文献

- 井波律子（2008）『中国名言集』岩波書店
梅棹忠夫（1974）『文明の生態史観』中公文庫
鎌田東二編（2010）『平安京のコスモロジー』創元社
日本地質学会監修（2009）『地学は何ができるか』愛智出版
比較文明学会関西支部編（2010）『地球時代の文明学』京都通

信社
和辻哲郎（1979）『風土』岩波文庫

グローバル社会の環境問題と地域文化

—— 映画『ザ・コーヴ』のイルカ漁への問いかけ ——

石原圭子 東海大学総合教育センター教授

Environmental and Cultural Controversy in Global Society : "The Cove" and fishing dolphins

Keiko ISHIHARA

Professor, Liberal Arts Education Center, Tokai University

"The Cove," an American documentary film, received an Academy Award for Best Documentary Feature at the 82nd Academy Awards in 2009. This film focusses on Taiji Town in Japan where hunting dolphins is a part of the local culture and lives of the people. Because of its receiving such a famous award, the film got noticed and sparked many people's concern all over the world. It received the high praise of many critics, but it was also criticized in various ways, especially in Japan. The film was sneakily taken in spite of non-cooperation by Taiji fishermen. Taiji people were denied the chance to talk about their position placing the fishing in their own cultural and social context. The film was tactically edited by the montage method to ignore the Taiji side. Not taking an interest in the ordinary life of Taiji Town, the film tries to convey global messages, including both environmental and cultural perspectives, and expresses them often emotionally and sometimes scientifically. It is therefore very persuasive to many global audiences, even to general Japanese. The film conveys these global messages as important for keeping the ecological system, preventing cruelty to animals, and highlighting the dangers of eating mercury-poisoned meat of dolphins. In spite of the persuasiveness to many, these messages in fact include many controversial points. In a global era, we, the people, must share common values to keep the environment of the earth, but we often have conflicting interests and there are no common and fair rules for everyone on the earth yet. We must share global values with regard to environmental issues but, nowadays, keeping the diversity of global culture is given greater importance and the culture of indigenous people has also become highly respected. In addition, we must face the fact that in modern society, cruelty to animals is actually totally concealed inside our modern system. Taiji Town is targeted in the film, but it is not important to make a small town a scapegoat, but we must think about priorities among inconsistent objectives, to figure out persistently the way to make common and fair rules in a global society where various values exist.

Accepted, Dec. 2, 2010

I. はじめに：環境問題の現在

環境問題について地球規模で関心の高まっている現在、人間活動の様々な局面において環境に配慮することが求められるようになってきている。グローバル化の進む社会の中で、地球規模で解決が模索されている「環境問題」であるが、地球環境を保全するといった一般論には賛成をしても、個別具体的な問題には利害対立が生じることも少なくない。また、多層的なグローバル社会の構造の中で、グローバルな社会共通のルールが求められる一方で、地域社会における豊かな文化の多様性を維持することも必要とされており、こうした相矛盾する点について、どのように両立をはかることができ

るのかという、新たな問題点も生じている。「環境」に関連する問題は、利害対立とともに価値観、世界観に係る錯綜した文脈の中で多様な論理が駆使されて議論されているため、共通の理解に達することが困難な状況が存在する。また、「環境」という言葉自体の意味する内容は多義的で曖昧さを含んでいるだけでなく、時代により変化し、さらには社会の様々な立場によって異なって捉えられることもある。この論文では、話題になった映画『ザ・コーヴ』を手掛かりに、イルカ漁に反対するという行動が、どのような複雑な文脈の中に置かれているのか、そして、グローバル社会と地域文化との関係にいかなる問題を投げかけているのかを考察する。それは、グローバルな社会、国家、地域の共同体といった多層的な社会構造の中で多様な活動主体が活動する現代の状況において、環境問題を解決することについて、どのような問題を投げかけているのかを考察する。またその問題提起の作法や正当

本論文は、『文明』投稿規定に基づき、複数レフェリーの査読を受けたものである。原稿受理日：2010年12月2日

性も含め、映画の提起した様々な論点に注目し、21世紀における「環境問題」について、文化の境界線を越えた共通理解の可能性とこれからの課題について検討する¹。

ところで、人間活動と環境との相互関係は今に始まったことではなく、これまでも変化しながら、常に存在し続けてきた問題である。例えば、鉱山開発にともなう鉱毒事件は江戸時代に既に発生していた。この頃は、農業が重視されていた時代であり、農業に被害が出ることを嫌い、鉱山が閉鎖されたこともあった。殖産興業の時代である明治期になると、教科書に活況の工場街の挿絵が掲載されたことがあった。そこでは、工場からたなびく煙は産業の発展と活況を示すシンボルだった。1970年代日本の高度経済成長期に企業活動による公害が発生し、水俣病、四日市ぜんそく、イタイイタイ病、光化学スモッグなどの被害が顕在化するようになると、環境問題に社会が大きな関心を向けられるようになった²。

こうした状況の変化と環境問題への関心の高まりは、国外においても同時に進行していた。既に20世紀後半から、「持続可能な発展」、「宇宙船地球号」といった問題意識が生まれていた。地球規模での人口爆発とそれにとまなう食糧確保の必要性により、あるいは、産業革命以来の人間の経済活動に、さらに中国、インドをはじめとする国々の経済発展が加わったことにより、資源開発や自然破壊が急速に進んだ。オゾン層破壊や地球温暖化への懸念など地球環境への認識は一層高まってきた。地球規模の環境問題は一国単位で解決は不能であり、グローバル社会全体での取り組みが求められている。しかし、国際的な環境対策は、これまで環境を利用してきた先進国とこれから発展しようとしている途上国との間に利害対立が顕在化するなど、地球環境の保全という共通の目標のためであっても、実際に国際的に意見をまとめることは容易ではない。

新たな兆しも生まれている。これまで対立するものとして考えられていた環境と経済であるが、近年の新しい傾向として、「環境と経済の好循環」というように両立の可能性が模索されている。エコカー、太陽光や風車発電をはじめとする自然エネルギーなど、「低炭素化社会」をめざす研究・技術開発が進められている。また、排出権取引、エコポイント、さらには環境減税など、環境の要素が金融・財政、様々な経済活動に多面的に取り込まれている状況である³。

人間中心的な環境論から、人間と自然との調和を重視する

考え方も広がっている。人間の農地や生活を含む形で、人の手を使って生態系のバランスを維持させている里山の存在が再認識されている。このような自然との調和、自然との共生は日本の文化において共感されやすい考え方である。生態系、生物多様性の保全は、さらに地球規模においても注目されている。自然は、人間が「利用する対象」であるばかりでなく、人間もその自然の一部であるという考え方である。地球の自然は、人間にとっての利用価値の有無に関わらず価値があり、特に、生命はそれ自体が神秘であり、人間の存在に関わりなく、豊かな多様性を保ちつつ存在することに意味があるという自然へのまなざしである⁴。さらに、こうした議論の延長線上に、「動物権」、「動物解放論」といった議論までも登場するに至っている⁵。

II. 環境への関心と多様な作品

社会において環境に関連する出来事が発生し問題関心が高まると、それに影響を受けて、関連する著作物や作品が登場する。過去を振り返ってみると、日本に公害病が発生し甚大な被害が発生した頃、水俣病について、石牟礼道子が被害者の心に沿った『苦海浄土—わが水俣病』を発表し多くの人に被害の実態を伝え感銘を与えた。アメリカにおいては、レイチェル・カーソンが『沈黙の春』を発表し、DDTなどの農薬に使われる化学薬品の生物界への影響を訴えた。こうした作品は社会への啓発書として時代に影響を与える役割を果たした⁶。環境問題への関心が一層高まりをみせている近年になると映像作品も多数登場している。2006年アメリカ元副大統領アル・ゴアは地球温暖化に警鐘を鳴らす活動を行い、その講演を映画化した『不都合な真実』は、第79回アカデミー賞、長編ドキュメンタリー映画賞を受賞した。内容についてはセンセーショナルで誇張されているとの批判もあるが、世界の多くの人たちが映画館やDVDで作品を見ることになり、その影響力はきわめて大きい。このように環境問題に関するメッセージを直接的に盛り込んだ作品ではなくとも、BBCを始めとする放送局による大自然の雄大さや神秘を記録した映像作品が続々と紹介され、さらには商品化されており、生命の神秘、地球の不思議さを訴え、環境問題について多くの人に関心をもたせることになっている。水俣病の被害者の心を訴えた石牟礼道子の問題関心と、地球規模の生命連鎖や生物の多様性を、時にダイナミックな映像で、時

に繊細で美しい映像で見る人たちに訴えるコマーシャライズされた作品との隔たりは大きい。だが、どちらも環境についての人々の問題意識を高める表現となっている⁷。

III. 長編ドキュメンタリー『ザ・コーヴ』

『不都合な真実』が受賞してから3年後、2009年度第82回アカデミー賞長編ドキュメンタリー映画賞を受賞した『ザ・コーヴ (The Cove)』は、和歌山県太地町のイルカ漁を批判したものである。この映画については賛否両論激しい議論を呼び起こした。日本において2010年7月に公開が予定されると公開阻止の声が上がるなど、上映すら危ぶまれる事態が生じた⁸。

このドキュメンタリー映画は、特定の町のイルカ漁をターゲットにした映画であり、センセーショナルな議論を巻き起こしたが、賞を獲得したことからも推察できるように、批判されるべき点とともに、映像作品として優れている点も存在している。映画が伝えようとしているのは、今日多くの人が関心を持ち共感を覚えている、生態系の維持、動物愛護といった明快なメッセージである。映画が目にするのは、「わんぱくフリッパー」といったアメリカの人気のテレビドラマを通じて茶の間に身近で可愛らしいというイメージが根付いているイルカである。そのイルカの群れを日本のある町の漁民が罾に紛れて入江に追い込み、棒で叩き殺し、入り江を血の色に染めるという視覚的にもわかりやすい刺激的な映像表現を用いて、編集その他においても、見るものを飽きさせない映像作品に仕上げたことが評価されたと言えるだろう。太地町の人々やイルカ漁の映像は、制作者側の世界観・価値観の支配するストーリーの中に組み込まれ、この映画の世界の中では絶対的な負を象徴する存在として位置づけられている。単純明快な価値観の支配する映画の構図の中に、太地町という具体的な地域の人々の行為を組み込んだのである以上、当事者を筆頭に反発を招くのは必定であったと言える。

IV. 映像表現の妥当性

この映画の制作手法には問題がある。まず問題にすべき点は、当事者太地町民の許可を得ない隠し撮りという撮影手法についてである。

イルカ漁は入江の奥で行われていた。その情景は様々な気配によって外部からも或程度は想像がつくものの、通常

「入り江」の影に隠されているものであり、漁民が強く立ち入りを拒絶している場所で行われているものであった。映画の中で明らかにされているように、イルカ漁の撮影は町民の拒絶にも拘らず、夜間に立ち入り禁止区域に侵入して入江の中へと入りこみ隠しカメラを設置して顕在化された。隠されていたものが、外部からの闖入者によって暴露されたという構図である。和歌山県太地町のイルカ漁は、はからずも制作者たちが求めていた刺激的な映像を提供することになった。

マグロが並べられた魚市場の情景にぼかしを入れて、あたかもイルカが並んでいると錯覚させるような表現手法についても批判がある⁹。

撮影者に対する漁民の怒りのシーンなど、太地町をはじめとする人々の姿についての恣意的な編集手法も、対象者に対しての公正さという点では問題があるだろう。このドキュメンタリー映画においては、太地町漁民、太地町役場関係者、入り江の殺戮、国際捕鯨委員会 IWC での日本代表の発言、都会の日本人のインタビュー、など、多様なシーンが登場し、それらがコマ切れにつながっている。コマ切れのシーンを多用して、自己の設定した文脈に再構成するのは、いわゆる「モンタージュ手法」である。この手法は、対象者の主張に耳を傾けて、対象者の立場に身を寄せて共感する方法ではなく、特定のイメージ、ステレオタイプが先にあって、それを創造するために、数々の「部分」を用いて「全体」を作り上げる方法である。これは、第二次世界大戦の折、対戦国である国の住民について、敵としてのステレオタイプを強めるために戦時中に制作されたプロパガンダ映画が用いた手法でもある。敵対する相手自身の制作した多種多様な映像シーンを細分化して、たとえば時代劇の乱闘シーンだけを複数取り上げて、日本人について「暴力的」な集団のイメージを作りあげるといった手法である。「他者」の映像を「他者」の文脈に沿ってではなく、「他者」自身が作った映像を細分化し、真実らしさは保ちながら自分の文脈に編集し直すという手法である¹⁰。映像は制作者が撮影したものであるが、太地町の人々の日常生活に沿うことなく、イルカ漁のシーンだけを象徴的に取り上げることは、やはり太地町の名誉を著しく損なうものではないだろうか。

この映画のメッセージの主たるものとして伝わってくるのは、生態系の維持というよりも動物愛護のメッセージである。映画の前半、イルカ漁の行われている入江近くで追いつめら

れたイルカを見て涙をするアメリカ人女性の姿があり、この映画のクライマックスは、入江での漁民による「残酷な」行為と赤く染まった入江という印象的な映像である。映画の導入部も終焉部もこういった動物愛護の観点を強調するシーンを用いることで、見る人を感情的に引き込んでいく。しかし、だからこそ、これは同時に太地町の漁民たちについて「残酷」であるというレッテルを貼るシーンでもあり、この映画に対して最も強い反発を呼び起こす部分でもある。実際、この映画で最も印象に残ってしまうのは、生態系維持ではなく、動物愛護ですらなく、「残酷さ」なのである。愛らしいイルカは、環境活動家にとって自分たちの活動の象徴的な動物となっている。世界的にみてイルカを捕獲する人々は少数派でもあり、その行為を「残酷」、「野蛮」であると批判することは、身近に大きな矛盾を引き起こさずに「環境アリバイ」を比較的容易に満たすものであるとの指摘もある¹¹。

映画の中では、入江で捕獲されたイルカの一部は水族館へ送られる場合があることが指摘されている。『ザ・コーヴ』の中心的出演者であるリック・オバリーは、かつて「わんぱくフリッパー」に俳優として出演していたが、その時イルカがストレスで死んだことをきっかけに、イルカ解放運動に携わっている。こうした体験をもつオバリーからすれば、イルカをビジネスの対象として捕獲しているという点で、水族館へやることも批判の対象となっている。今日、動物園や水族館は生物の種の保存の役割、環境教育の啓蒙的役割を果たすことも期待されていることからすると、環境問題における動物園や水族館の立場は実は多義的である。だが、オバリーは、水族館でイルカ・ショーなどに使われるという理由で反対している¹²。

この映画の中には、生態系の維持、動物愛護とは別の追加的なメッセージとして、食品安全という観点が取り上げられている。生態系の上部にいるイルカは海洋の水銀を高濃度に蓄積しており、食品として危険であるという主張である。もし食品として摂取するならば、日本の他の地域の人たちも被害を受ける可能性があるものであり、この映画は「日本人の健康のため」に注意を喚起をしているというメッセージも伝えられる。食品安全のメッセージは、イルカ漁に反対する映画の論理を補強的に支えている。この観点を加えることで、文化的対立の構図において、太地町をさらに孤立させる効果を生み出している。ただし、「食品安全」は、いささか取

ってつけた観点が否めない。この映画の動物愛護的なシーンが強調されていることからしても、制作の主要動機が、「日本人の健康のため」であったとは考えにくいからである。

食品安全に関しては、イルカの肉に含有される水銀量のデータを示し「科学的」な根拠があるという表現が取られている。計測部位が肉のいかなる部分であるのか、筋肉の部分なのか、蓄積されやすい内臓部分であるのかによって数値は異なるといった批判があり、ドキュメンタリーの中での「科学性」には限界があるのだが、見る人への説得力を増す効果は生まれている。ここにおける映画制作者の立場は「科学」を駆使する側であり、「啓蒙する」側である。ちなみに、この問題については、国立水俣病総合研究センターが太地町の住民の毛髪水銀濃度測定の実施している。2010年5月9日に発表された報告書によると、「太地町住民の毛髪水銀濃度は、国内14地域と比べると顕著に高く、それがクジラやイルカの摂取と関連することが示唆された。しかし、今回の健康調査の範囲内では、メチル水銀中毒の可能性を疑わせる者は認められなかった。」「メチル水銀によると思われる健康影響は認められなかったが、毛髪水銀濃度が非常に高い住民を認めるため、調査の継続が必要である。」との報告がなされている¹³。

動物愛護、生態系維持といった、この映画が伝えようとしたメッセージの重要性を否定するものではないが、そのメッセージを象徴的に伝える手段として、問題のある手法で撮影、編集し、太地町の名誉を傷つけるほどに残酷さを誇張して表現したという点は、やはり批判されるべきではないだろうか。健康問題については、センセーショナルに扱うのではなく科学的に取り組まれるべきだと考える。

V. グローバルな価値観と地域文化

この映画作品の全体の構図の中に否定的に位置づけられた太地町であるが、この映画作品の構図は、現実社会における「グローバルな」価値観と「伝統的」価値観との対立関係に対応している。生態系の維持、動物愛護といった「グローバルな」説得力をもつ価値観が登場し、その圧倒的な影響力に飲み込まれるように、「伝統的」なクジラやイルカ漁を継続することの自明性が問われ否定されている。映画では、現実の対立的状況が表現されている。もちろん、こうした新旧の価値観の対立、不均等な影響力、といった問題は昨今始

まったことではない。地域特有の文化が、外部からの影響力によって、文化的に「同化」、「標準化」、「共通化」が進められることは、これまでも起きていたし、そして現在も起こり続けている問題である。例えば、18～19世紀の西欧や日本における国民国家の成立時においても、近代国家は、その成立とともに国内の文化を中央集権的に標準化、画一化してゆき、領土内にあった先行する諸文化を消滅させてゆく傾向があった。歴史家ホブズボームは、「ナショナリズムは、時に先にある諸文化を、新たなネイションに取り込んでゆく。また、先にある文化を抹殺することがある。」と指摘した¹⁴。近代国家の枠内、あるいは、さらには、その帝国主義的な拡大の際にも、文化の画一化を進める現象は起きた。それは、政策的に上から進められるとともに、民衆の側からも進められてきた。

それでは、国境を越えた活動が活発化している「グローバル化」が進む現在、そして環境問題について国境を越えて解決が模索されている現在、環境に関する価値観は、広く標準化、画一化して、多くの文化的背景をもった人たちに受け入れられているのだろうか。構造的には多層的といわれる「グローバル」社会においても、文化的価値観は国境を越えて画一化が進むことが可能なのだろうか。おそらく単純な画一化には限界があるだろうが、それならば、どの程度、地域の多様性が認められるべきなのか、また、どのように多様性が維持されるべきなのか考えてゆく必要がある。

『ザ・コーヴ』は、アメリカ人によって制作された作品であり、アメリカで権威あるアカデミー賞を受賞し、世界に向けて発表されたものである。その内容は、日本の太地町の伝統的イルカ漁を批判したものである以上、日本人は映画を鑑賞する際に、日本対アメリカといった文化的対立構図も意識に浮かんでくる。しかし、グローバルな時代の文化的対立構図は多層的で、もう少し複雑な状況にある。何故なら、生態系の維持、動物愛護、食品安全といったメッセージは、現在の日本の多くの人たちにとっても共感するメッセージだからである。そのことが、この映画を鑑賞する一般の日本人の立ち位置を動揺させる点になっている。この映画によって伝統的なイルカ漁と、現代のグローバル社会の価値観との齟齬といった問題性が顕在化されたが、この問題について、一般の日本人はグローバルな観点とナショナルな観点の間で揺れている状況にあるのではないだろうか。文化の多層性、地域文化の境界とその変化といった観点からも考察する必要がある。

VI. 太地町が象徴するものと「日本人」

太地町は、生態系維持、動物愛護、食品安全に対抗して、今日においても外部の人々に対してイルカ漁の存続を正当化しうる説得力のある論理的根拠を提示できるだろうか。第一に挙げるとするならば、それが生活を支える「経済活動」であるという点、第二に太地町において、イルカ漁は長年行われてきた「伝統」であるという点を挙げることができるだろう。太地町の漁民はイルカ漁を通じて、イルカを食肉としてのみならず、生きたまま水族館へ売ることを通じても経済的な利益を得ている。イルカ漁が漁民にとって収益を上げ生活を支える手段であることについては撮影者側も認識しているが、だからといって理解を示しているわけではない。彼らは、漁の中止と引き換えに経済的な補償を申し出たものの断られたとされている。映画では詳細に触れられていないが、補償の程度といった問題である以前に、ここには、漁民が長年行ってきた行為が、地域の「外部」から突然現れた人々の価値観によって否定されることについての驚きと憤りという価値観の対立があったことが推測される。

しかし、現在の日本人の多数が、太地町の「伝統」に好意的とは限らない。そもそも、イルカ漁はあまり知られていなかった。映画の中で、インタビューを受けた都会の日本人は「日本でイルカ漁が行われている実態を知らなかった」と発言している。この点で、日本人の多数が、この問題について、むしろ「外部」の価値観に共感する可能性も高い。先に、食品安全の問題では、「日本人の健康のため」と指摘することで、映画の中での太地町は一層孤立する立場に置かれる構図となっている点を指摘したが、動物愛護、生態系維持といった価値観も、地球規模の環境問題への関心の高まりとともに、今日的な世界観、価値観として多くの日本人によって共有されている価値観となっている。また、筆者がゼミで学生に意見を聞いた時に、「今の一般の日本人はクジラやイルカを必ずしも重要な食品と考えておらず、食べなくてもかまわないものではないか」と答えている。実際、農林水産省の資料によると、2000年に牛肉の1人あたりの年間消費量が7.6kg、同じく豚肉が10.6kgであり、1955年からの調査記録によると、牛・豚肉ともに増加傾向にあるのに対して、鯨肉については、1955年に0.9kg、1965年には2.1kgであったが、1990年以降、調査上は0.0kgとなっており、消費量は著しく減少

傾向にある。こうしたことから推察すると、日本の食文化であると主張することは、少なくとも鯨肉の消費量に関して言えば、現実に即しているとは言い難くなってきている。日本人の食文化は、外部からの影響を受けながら変化しているのであり、外部からの強い圧力に抗してまで「伝統的」イルカ漁を支持することに興味を失い、日本人自身が批判的な見解へと変化してしまう可能性もあるだろう¹⁵。

この映画の結果、投げかけられることになった太地町のイルカ漁への厳しいメッセージは、映画自体に非合理で無遠慮な部分があるが、外部からの価値観の攻勢、食文化の変化等、変化する時代の潮流の中で生みだされ、説得力を増してきたことも否定できない。映画の出来栄の巧みさとともに、現実社会に変化がみられるからこそ、映画を鑑賞する者も、制作者のメッセージに他人事と安穩としているばかりではいられなくなるのである。

VII. 現代社会の隠蔽^{べい}と露呈

イルカ漁のあり方について将来的には考察の余地があるとしても、太地町のように地方の地域で行われている伝統漁を、生態系維持、動物愛護といった別の価値観から批判するありかたに不公正な問題点は含まれていないだろうか。現在のように環境問題についての意識が高まり、グローバルに人々の交流や関心が広がっている新しい状況においては、突然に異なる価値観が出会い集中的に批判されるといった事態が生じる。またグローバルな社会は網羅的な実態把握が難しく、その批判対象は公正であるよりも、政治的関心に左右されるなど、恣意的になりがちである。こうした現状をふまえて、環境問題について、まず批判する側だけでなく、批判される側も納得できる共通の価値観やルールが共有されることをめざしてゆくことが求められる。そして、環境問題の解決は、人間にとって、あるいは地球にとって切迫しているとはいえ、だからこそ、価値観やルールが納得され共有されるように努力することが必要である。そのルールに従って偏った感情的な批判ではなく、公正かつ科学的に判断されるべきである。何が正しいことなのかルールが共有されていない状況においては、悪のレッテル貼りや批判よりも前に、順序としてまず対話や説得がなされなくてはならない。理性的な対話が行われる以前に、映画が、生態系保全、動物愛護、食品安全の負を象徴する存在として、太地町を決めつけてしまったことは公正

ではない。

入江の陰で行われていたイルカ漁は、漁民の拒絶にも関わらず、禁止区域に撮影者が侵入し隠しカメラで撮影された。映画では、太地町のイルカ漁は、そこに訪れた女性がイルカの運命を思って涙を流す「残酷」なものと解釈されており、太地町に特異な伝統として表現されている。だが、この映像によって露呈されたものは、実は太地町だけに特異なものではなく、現代社会全体が太地町と共犯関係にあるのではないだろうか。つまり、現代社会全体が隠蔽しているものを露呈しているだけではないのだろうか。それは、現代社会が「死」を隠蔽しているということである。さらに具体的に言えば、大量の家畜を食肉として処理する場合は消費者の視線から隠蔽され、人の目から閉ざされているということである。生物多様性や動物愛護についての関心は高まっているが、人間が食物連鎖の頂上にいて消費しているという現実については直視することを避け、隔離する傾向にある。

人間が生きるために動物を処分するということは、都市化する以前には目に見えていた。そのことは、数々の子供向けの文学にも表れていた。アメリカの童話ローリングズの『子鹿物語』では、開拓地で、少年が可愛がっていた子鹿が生活の支えである畑を荒らすので、親から諭された少年自らが鹿を処分することを決断することが描かれている。このことで少年は生活の厳しさを学ぶとともに大人に成長してゆく物語である。日本でもドラマが放映されたワイルダーの『大草原の小さな家』の原作では、冒頭から豚を処分するシーンが登場する。子供たちは耳をふさぐが、その後は内臓を用いて遊んだり、尻尾を味わったりと、そこに生活が存在していることが描かれている。こうした生命と人間の生存との関係は、都市化され衛生的な無菌室にあるような現代社会の日常では、一般の人たちの目に触れない場へと隠蔽されてしまっている¹⁶。

映画では、生態系、動物愛護、食品安全に対する問題関心として太地町に批判的な視線を向け、そこで行われていたイルカ漁を消滅させるべき文化として提示しているが、そこで行われていた漁は本来、入江の奥に隠されて行われていたものである。センセーショナルに見る者の眼前に提示した映像は、イルカ漁という太地町の特殊性だけでなく、現代社会が共通に背負っていることがら、すなわち、普段は隠蔽されているが、「人間は食糧を他の生命に依存している」という、

自分たちも背負っていることについても露呈されているのだということを忘れてはならないだろう。

このように考えてくると、この映画に関連して巻き起こった議論は、太地町だけをターゲットにするような単純な構図にはおさまらず、グローバル社会、国家、地域文化、現代社会といった、より多面的、多層的な構図の中で考えてみる余地がある。

VIII. 日本の捕鯨とイルカ漁

イルカは生物学的にはクジラ的一种であり、イルカ漁に対する批判は、近年のクジラ漁への批判の高まりと重なるものである。そしてクジラ漁についても、国際捕鯨委員会（International Whaling Commission: IWC）をはじめ、国際的な議論が紛糾している。日本の官庁において、この問題を扱っているのは環境省ではなく農林水産省である。管轄している省が示しているように、捕鯨国として日本は、当然ながらクジラを食用となる漁業資源として扱っている。生態系の維持、動物愛護の対象として議論されているのではない。

ところで、夏休みの子供向けに省庁連携の「霞が関見学デー」というイベントが行われている。平成22年度、農林水産省が企画したイベント内容は多彩であるが、15用意された企画の一つはクジラに関するものであった。「クジラのことをもっと知りたい！ クジラはどんな生きものかな？」というタイトルの企画である。「クジラってどんな生きものなんだろう？ 標本やパネル、パンフレットで分かりやすく紹介しているよ。クジラと人間の深いつながりについても、パネルや資料で学んでね。」という内容に並んで、「食堂では、クジラを使った料理も食べられるよ。」と、クジラ竜田揚げ、クジラカレーが省内のカフェテリアや軽食喫茶で食べられることが紹介されている。クジラは食べ物である。この公式見解に当面揺らぎはなさそうである¹⁷。

農林水産省の外局である水産庁のホームページ上に、捕鯨を取り巻く状況や国際捕鯨委員会の年次会合の結果について情報が載せられている。捕鯨を取り巻く状況の中の、「我が国のいるか漁業について」の欄によると、「小型鯨類（いるか類）については、IWCの管轄外であり、我が国では、イルカ資源も他の水産資源と同様に持続的な利用を達成すべきとの観点から、関連道県の許可制度を通じてイルカ漁業管理を行っています。捕獲枠については（独）水産総合研究セ

ンター遠洋水産研究所が実施する調査結果に基づき、種別に資源量推定を行い、種別の捕獲可能量を算出し、漁業実態に合わせてイルカ漁業を行っている道県に配分しています。」とある。この見解は国家が太地町民の行為を支持するものになっていると言える。映画の構図の中では入江の奥に隠され、外の世界から隔絶されているかのように描かれていたイルカ漁であるが、実は国家によって管理され承認されているものであることは歴然としている¹⁸。

IX. 「先住民」と文化

商業捕鯨が停止されている状況においても、「先住民」には捕鯨が認められている。1981年IWCは、「捕鯨と鯨の利用に継続的かつ伝統的に依存していることで、コミュニティ、家族、社会、文化における強い紐帯を保っている先住民のための、先住民自身による地域的、原初的な消費目的の捕鯨」については「先住民生存捕鯨（Aboriginal Subsistence Whaling: ASW）」として特別に承認している¹⁹。近年、国際的にも先住民の権利の尊重への意識や関心が高まっていることが捕鯨問題にも影響している。2007年には国連が「国連先住民権利宣言」を出している²⁰。

水産庁は、先住民生存捕鯨についての日本の立場を以下のように説明している。

「商業捕鯨のモラトリアム下にあっても、IWCは先住民生存捕鯨を認めており、我が国もこの捕鯨に賛成しています。ただし、先住民の定義が確立されておらず、人種差別的な適用が懸念されること、そもそもクジラの資源管理は科学的根拠に基づき行うべきであること、が原則であり、操業者が先住民であるか否かは、資源管理上は大きな問題ではないことから、会議の場においてこれらの点について指摘をおこなっているところです。」²¹

クジラ漁に生態系の観点から反対するのであるならば、科学的根拠に基づいて捕鯨の捕獲可能量が算定された上で、その範囲内である限りは、捕鯨は認められてしかるべきである。動物愛護の観点から反対するのであるならば、全面禁止に向かわなくてはならない。こうした点では、水産庁が指摘しているとおり、漁をする主体が誰であるかは本来、関係ない。反捕鯨の論理と捕鯨を含む先住民文化の尊重の論理とは相矛盾しているが、この場合、例外として反捕鯨側が妥協をしている²²。「先住民生存捕鯨」として先住民に捕鯨が認められ

るのは、先住民が捕鯨への文化的依存度が高く、捕獲量が比較的少ない等の理由からであるが、水産庁が主張するように、「先住民」aborigine の示す概念は曖昧であり恣意的である。「先住民」の意味が、近代国家から排除、差別されている集団のみを指し、近代国家の内部において地域文化を維持している住民を除外することになるのであるならば、『ザ・コーヴ』の中で注目された太地町は含まれない。IWC は、「先住民生存捕鯨」として特別な捕獲枠を認めている集団の基準を明確にしているわけではないが、当然、論議の対象になるだろう²³。

Arne Kalland は、「先住民」の語が示すおおよその意味として以下の4つを挙げている。それは、1) 地域で最初に知られている住民であること、2) 非白人であること、3) 長期間にわたって侵略者によって政治的・文化的に虐げられてきたマイノリティ、4) テクノロジーにおいて原初的狀態にあり、市場経済に関与していない、といった特徴をもつ集団である²⁴。IWC の念頭にある「先住民」集団と、ここで挙げられた特徴をもつ「先住民」集団とは、必ずしも厳密に一致しているわけではない。「先住民」の語には、「人種的」な観点も含まれることから、この差別化には「差別」的な部分があるという批判もある。また、「先住民」の文化の状況を静態的に捉えており、文化の変容の可能性について限定的に考えている。先住民の捕獲したものを地域の店に売買した場合等、「先住民捕鯨」と「商業捕鯨」の境界線も明白ではない。むしろ、このような特別枠の「恩恵」が認められることによって先住民たちは、この権限をもつ IWC に対して自分たちが商業的に売買していないことを示すことを余儀なくされてしまうというように、経済活動に携わらない状態に留まることを求められており、そこに「帝国主義的」権力構造が築かれてしまうということが指摘されている。

「先住民生存捕鯨」の名称の、「生存 Subsistence」の意味も曖昧である。伝統的なものとして生活に捕鯨が根付いていても、豊かな生活をしている集団である場合には、捕鯨は集団の「生存」に関わらないから特別枠が認められないというのであるならば、捕鯨の文化を維持し捕鯨が承認されるためには貧しさが要件になってしまう。さらに、貧しさの基準まで必要になってしまうだろう。Kalland は、地域の集団が商業的で有る無しに関係なく海洋資源を継続的に維持することのできる管理のありかたを作らなくてはならないし、また文化の

価値は商業的で有る無しに左右されるものではないと述べている。

X. グローバル社会の環境問題と地域文化

環境問題がグローバルに論じられるようになった現在、地球環境保全の象徴と位置付けられたくじらやイルカを捕獲する立場であることは、少数派でもあり、正当性を自明なこととして主張し続けることが容易なことではなくなっている。一方で、捕鯨が認められる要件とされているのが「先住民」であることにより、捕鯨が「貧しさ」、「非近代」といったイメージに結び付けられたり、また、捕獲および処理が管理された近代的な建造物の施設の中ではなく、ことさら披露しているわけではないにせよ、カメラを拒絶できない海洋で行われていることにより、「残酷」、「野蛮」といったイメージとも結び付けられたりするがゆえに、豊かな先進国日本でありながら捕鯨を続けるということについては、より一層、厳しく批判の対象とされるという政治的・文化的背景がある。

グローバル社会においては、多くの人が支持すると思われる理念であっても、各論においては、様々な利害対立や価値観の対立が存在している。『ザ・コーヴ』にアカデミー賞を授賞したアメリカであるが、民間レベルでは環境運動が活発で意識が高いとしても、国家レベルにおいては別である。グローバルなルールに拘束されることを嫌って孤立主義的で多国間協調に与しない傾向がみられ、極めて国益重視の現実的な態度をとり続けている。国際刑事裁判所に不参加であった場合と同様に、環境問題においても、グローバルな環境規制にアメリカは積極的とはいえない。例えば、1992 年の「生物多様性条約」に日本は参加しているが、自国の産業活動が規制されることを嫌うアメリカは参加するに至っていない。また、2007 年の「国連先住民権利宣言」に、日本は賛成したが、アメリカは、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドとともに反対した。この4か国はいずれも先住民族人口が多く、保留地を多く抱えている国々である。グローバル社会において、理念に共感できても、各国に異なる事情があり、国際的な共通ルールを制定するための合意形成は容易ではない。罰則付きの規制は有効であるとしても制定はなかなか難しい²⁵。グローバルな社会は利害や価値観のぶつかり合いが存在する場であり、そこは、現実的かつ戦略的な対応と自己の利益を主張する場でもある。こうしたグローバルな状況の中で、

公正性を確保しつつ、価値観や利害において矛盾の存在する問題について優先順位を考慮することの困難さは言うまでもない。それでもなお、地球環境を維持するためには、多層的なグローバル社会の中にある多様な価値観と利害、様々な集団の伝統を尊重し、合意形成に向けて誠実な対話を積み重ねてゆくことが求められる。その際、きわめて多様な論理が錯綜するグローバル社会における議論であるからこそ、文化面においては、様々なレベルでの大衆へ向けての広報活動、文化的表現やシンボル操作が、今後とも絶えず行われ続けると考えられる。それを読み解く戦略性、など、多面的に思考する必要が求められている。環境問題は、国際問題であり経済問題であると同時に、また、情報やイメージをめぐる「文化戦争」といった側面があることも十分に理解しておく必要があるだろう。しかしながら、互いの合意形成のためには、論点を明確にし、科学的根拠に基づいて検討し、公正かつ普遍的なルールにのっとって自己の立場を論理的に主張してゆくことが基本的な姿勢として重要なことであろうと考える。

注

- 田中明彦『新しい中世—相互依存深まる世界システム』日本経済新聞社 1996 年。花井等、岡部達味編『現代国際関係論』東洋経済新報社、2005 年。
- 飯島伸子『環境問題の社会史』有斐閣 2000 年。
- 「環境と経済の好循環ビジョン—健やかで美しく豊かな環境先進国へ向けて（平成 16 年 5 月 中央環境審議会答申）」環境省 HP より。2004 年。
- 国連地球生きもの会議 2010 年 10 月 11-15 日；生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）2010 年 10 月 18 日、193 カ国参加。
- 加藤尚武編『環境と倫理—自然と人間の共生を求めて』有斐閣 1998 年。
- 石牟礼道子『苦海浄土—わが水俣病』講談社文庫（新装版）2004 年。（1970 年発表）。；レイチェル・カーソン『沈黙の春』新潮社（改版版）1974 年。（1962 年発表。）
- 『アース』（2011 年 BBC 制作映画化）、『ディープ・ブルー』（2003 年 BBC 制作）など。
- 映画「THE COVE」第 82 回アカデミー賞長編ドキュメンタリー賞受賞作品。製作 OPS、監督ルイ・シホヨス；パンフレット『THE COVE [ザ・コーヴ]』2010 年 6 月 25 日；『ザ・コーヴ』オフィシャルサイト <http://thecove-2010.com/>（2010/12/03）
- 「アカデミー賞『ザ・コーヴ』受賞で地元の和歌山・太地町が猛反発」産経新聞（2010 年 3 月 8 日）；『ザ・コーヴ』シンポ 映画館支配人ら『まず上映を』産経新聞（2010 年 6 月 26 日）；『ザ・コーヴ』上映に『残念』と太地町長否定的イメージを懸念 産経新聞（2010 年 7 月 3 日）；「初の意見交換、議論平行線＝和歌山・太地町と反捕鯨団体—町長やシーシェパード幹部」アサヒ・コム（2010 年 11 月 2 日）
- John Dower, *War Without Mercy: Pacific War*, (Pantheon, 1987). ジョン・W. ダワー著、斎藤元一訳『容赦なき戦争—太平洋戦争における人種差別』平凡社 2001（『人種偏見—太平洋戦争に見る日米摩擦の底流』TBS ブリタニカ 1987. の改題）
- Arne Kalland, “Super Whale,” *11 Essays on Whales and Man*, second edition, 26 Spt. 1994. The High North Alliance.
- パンフレット『THE COVE [ザ・コーヴ]』STORY およびリック・オバリー・インタビューより。
- 国立水俣病総合研究センター「太地町における水銀と住民の健康影響に関する調査結果について」2010 年 5 月 9 日。
- E.J. ホップズボーム『ナショナリズムの歴史と現在』大月書店 2001
E.J. Hobsbawm, *Nations and Nationalism since 1780: Programme, Myth, Reality*, 1990.
E.J. ホップズボーム・R. テレンス編『創られた伝統』紀伊國屋書店 1992
E.J. Hobsbawm & R. Terence, eds. *The Invention of Tradition*, Cambridge, 1983
- 農林水産省資料「食肉受給の推移と食肉行政の経緯（その 1）」
- マージョリー＝キンナン＝ローリングズ（1896-1953）『子鹿物語』（講談社 1983）；Laura Ingalls Wilder, *Little House Collection*, (Harper Collins 2004), ローラ・インガルス・ワイルダー著、恩地三保子訳『大きな森の小さな家—インガルス一家の物語〈1〉』（福音館文庫 2002）。
- 農林水産省ホームページ
http://www.maff.go.jp/j/kis/k_d/index.html（2010/09/10）
平成 22 年度子供霞が関見学デー開催日時：平成 22 年 8 月 18 日、19 日開催。
- 水産庁ホームページ、捕鯨を取り巻く状況
http://www.jfa.maff.go.jp/j/whale/w_thinking/（2010/09/10）；「第 62 回国際捕鯨委員会（IWC）年次会合」の結果について
<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/enyou/100626.html>
映画『コーヴ』においては、IWC の会議で日本代表がきわめて陳腐な発言をしているかのように描かれている。また、アフリカ諸国の票を買収していると批判的に描かれている。
- Aboriginal Subsistence Whaling: ASW “whaling for purposes of local aboriginal consumption carried out by or on behalf of aboriginal, indigenous or native peoples who share strong community, familial, social and cultural ties related to a continuing traditional dependence on whaling and the use of whales” (IWC 1981).
“aboriginal”, “indigenous”, “native” の各語の意味について曖昧さが問われている。
- United Nations Declaration on the Rights of Indigenous Peoples*. Adopted by General Assembly Resolution 61/295 on 13 September 2007. 『先住民の権利に関する国際連合宣言』
- 水産庁 HP, 「捕鯨を取り巻く状況」（先住民生存捕鯨について、我が国のいるか漁業について）
http://www.jfa.maff.go.jp/j/whale/w_thinking/index.html#7（2010 年 9 月 28 日）。
- “One Blow for the Whales,” *The Economist*, July 14, 1979; “Rough Waters Ahead for Those Urging Full-Scale Ban on

Whaling,” Christian Science Monitor, July 22, 1980;

- 23 先住民のアイデンティティ自身が変動するものである。
Jace Weaver, “The Pendulum Swings of Indian Policy,”
E-Journal, USA, Indigenous People, U.S. Department of State/
Bureau of International Information Programs. 2009.16-18.
- 24 Arne Kalland, “A Concept in the Service of Imperialism:
Aboriginal Subsistence Whaling,” *11 Essays on Whales and
Man*, second edition, 26 Spt. 1994. The High North Alliance.
- 25 「ポスト京都へ新体制—米中に温暖化対策迫る決議—法的
拘束力は示せず」朝日新聞（2010 年 12 月 12 日）

英語会話と日本語会話における協同構築¹⁾

岩田祐子 東海大学外国語教育センター教授

Co-constructing Conversations in English and Japanese

Yuko IWATA

Professor, Foreign Language Center, Tokai University

The purposes of this study are twofold. First, I would like to investigate how conversation participants co-construct conversations in English and Japanese respectively, using various strategies such as giving lexical and non-lexical backchannels and positive comments, showing an interest and involvement, asking questions and repeating what speakers say. Second, I will make a comparison about how conversations are jointly co-constructed in English and Japanese, focusing on non-primary speakers' roles.

The data analysis of the video-taped conversations indicates that turns are interchangeable among primary and non-primary speakers. The non-primary speakers are not mere listeners. Rather, they actively participate in conversations using various strategies. As a result, conversations are joint activities of primary and non-primary speakers. On the other hand, the data analysis shows that primary speakers in Japanese conversations tend to keep their turns for a relatively long period of time while non-primary speakers provide backchannels very frequently throughout the primary speakers' talk. Non-primary speakers in Japanese conversations seem to be mere listeners. However, the detailed analysis reveals that giving a lot of backchannels are appropriate means of providing and receiving interactional support in conversation. A non-primary speaker is expected to show concern for the primary speaker's sense of security in holding the floor. An empathetic conversational partner provides this sense of security by giving backchannels during the primary speaker's turn. In this sense, a non-primary speaker is a co-author and a primary speaker is also a co-listener. The primary and non-primary speakers co-construct conversations.

Accepted, Dec. 2, 2010

I. はじめに

会話とは話し手だけで成り立つものであろうか。Keating & Egbert (2004: p171)によれば、普通の会話とは、参与者間の多大な努力によって協同で達成されるものである (“‘Ordinary’ conversation is a collaborative achievement of extraordinary proportions”). 話し手だけが、一方的に話し続けるだけでは会話は成り立たない。聞き手もまた、あいづちやコメント・質問など様々な言語手段を使って会話に協同的に参加している。会話は、話し手と聞き手が作り上げる協同作業なのである。ただ、この会話を協同で作り上げる方法が文化によって異なることがあり、自分の文化のやり方を双方が持ちこむと、異文化コミュニケーションを難しくしている一因となっている。

本論文では、日本語と英語における初対面会話を題材に、

初対面からの関係構築という日常的相互行為がいかに緻密に構築されているかを探るエスノメソドロジーの観点を援用しつつ、会話参与者の相互行為に交わされるやり取りが、どのように成立しているのかを分析する。

本論文の目的は二つある。第一に、英語もしくは日本語の会話において、初対面の人々がラポールを築きながら会話を行うとき、会話参加者がどのように会話を協同で作り上げていくか、特に会話参加者が使用する言語ストラテジーに焦点を当てて分析することである。分析したのは、日本語・英語の初対面会話をビデオ録画したデータである。ストラテジーというと何か意識的に行うという意味合いが入ることもあるが、ここでは言語を使用する際のシステムティックな方法と定義する。

第二の目的は、会話がどのように参加者の協同作業で構築されているか、そのやり方を日本語と英語で比較を行うことである。すなわち、日本語と英語それぞれで会話参加者がどのようなコミュニケーション・ストラテジーを使用しているのかについて対照分析を行う。特に、聞き手側がどれくらい

本論文は、『文明』投稿規定に基づき、複数レフェリーの査読を受けたものである。原稿受理日：2010年12月2日

会話に参加するかということにおいて文化固有の特徴があり、英語と日本語では相違があるだろうということが予測される。

II. 先行研究

1. 協同作業としての会話

会話が話し手だけでなく、聞き手も参加した協同作業 (a joint production) であることがこれまでの研究で明らかになっている。多くの研究が、話し手の談話を解釈し、方向づける際の聞き手の活発な役割に着目している。たとえば、Duranti (1986) は、“The audience as co-author” という表現で、聞き手が話し手とともに談話を形成していくのだと述べている。Tannen (1989) によれば、Duranti よりずっと早く Kristeva が、1974 年に “Not only is the audience a co-author, but the speaker is also a co-listener” すなわち聞き手が話し手とともに談話を形成するだけでなく、話し手は同時に聞き手なのだと述べたことを指している。

2. 会話における長いターン保持

会話分析の研究者たちは、一人の話し手が長いターン (turn, 発話の順番) を保持しているとき、他の話し手たちは、長いターンが主な話し手によって保持されていることをわかっていることを示すために、小さな声を出す応答をすることもあるということを指摘している (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974; Schegloff, 1982)。

3. 会話における聞き手の役割

Clancy, Thompson & Suzuki (1996) は、聞き手が発する短い言語行動を reactive turns と呼び、長いターンを保持している話し手を primary speaker, それ以外の話し手を non-primary speaker と定義した。そして、聞き手すなわち non-primary speaker がどのくらい会話にインプットするか、またどのような言語手段を使ってするかは文化固有のものであると論じた。

4. 聞き手による応答の種類

聞き手すなわち non-primary speaker が発するあいづち (backchannels) には 2 種類ある。第一は、非言語的あいづち (non-lexical backchannels), すなわち言語を使わず、声だけのあいづちである。例としては、uh-huh, mhm, oh, hm

などがある。これらの非言語的あいづちを Schegloff (1982) は、continuers と呼んでいる。

もう一つのあいづちは、言語的あいづち (lexical backchannels) であり、フロア (floor, 発話権) を取らない短い単語や語句である。例としては、yeah, all right, okay, sure などがある。

特に日本語においては、聞き手があいづちを、英語会話のあいづちと比べてかなり頻繁にうつことはこれまでの研究でも明らかになっている (Maynard, 1989; White, 1989)。

5. 会話への関与を示すストラテジー

会話参加者が会話で使う言語ストラテジーに注目したのが、Tannen (1989) である。Tannen は、話し手・聞き手を問わず、会話参加者がよく使うストラテジーを総称して関与ストラテジー (involvement strategy) と呼んだ。このストラテジーに含まれるのは、単語や表現の繰り返し (repetition), 構築された会話 (constructed dialogue), 比喩的表現 (imagery) である。Tannen によれば、繰り返しはリズムを生み、会話への関与を示すストラテジーの中心となるものである。構築された会話とは、話し手以外の人物の声 (voice) として構築された会話の再現であり、直接話法や直接引用で表現される。比喩的表現では、言葉で物体・人・場面を生き生きと目に見えるように再現する。

III. 方法

1. データ

本研究で使用したデータは、筆者が参加する大学英語教育学会中部支部待遇表現研究会が 2009 年から収集している日本語と英語の初対面会話の一部である。いずれも初対面の参加者 2 名ないしは 3 名に 30 分自由に話をしてもらったものをビデオ録画し、書き起こしたものを分析した。²⁾

英語のデータ

3つの初対面会話 (30分×3)

(英語会話 No. 10, 11 & 20)

日本語のデータ

3つの初対面会話 (30分×3)

(日本語会話 No. 15, 17 & 19)

2. データ分析方法

本研究では、「話し手」・「聞き手」という用語は使用しない。Clancy et al. (1996) に倣い、「主な話し手 (primary speaker)」と「主でない話し手 (non-primary speakers)」という用語を使用する。主な話し手とは、長いターンを維持している話し手のことである。主な話し手と主でない話し手がそれぞれのターンごとに何をしているのか、すなわち、会話を協同で構築していくためにどのような役割を果たしているかという観点から、英語・日本語の会話をそれぞれ分析する。次に日本語と英語会話における主な話し手と主でない話し手の役割を比較し、類似点・相違点を明らかにする。

IV. 分析結果

1. 英語会話における会話の協同構築の特徴

(1) 主な話し手の役割

英語の会話の協同構築における主な話し手の役割としては以下の4つが特徴としてあげられた。第一に、主でない話し手からの質問に対し、Yes・Noだけでなく、自己開示を含む追加情報をつけて答えている。第二に、トピックを自己開示することによって発展させている。自分の個人的体験談を語ることで、その語りには過去の出来事に対する個人的な感情の説明を含むものである。ここでは、話を語ることが、会話への関与を示すストラテジー (involvement strategy) となっている。第三に、直接話法 (direct speech)・直接引用 (direct quotations) や代名詞 you をその場にはいない第三者に対して使うことにより、会話を生き生きとしたものになっている。その場にはいない人たちの声 (voice) を創りあげている。話し手たちとその場とは違う、遠く離れた、もしかしたら親しみのある世界を想像させる。それが談話における感情の重要な源となる。談話がより生き生きとし、より効果的になるのである (Tannen 1989)。第四に、主でない話し手に質問をすることによりターンを渡す。話し手交替を促している。以下の英語会話からの抜粋には、主たる話し手の言語ストラテジーの特徴が見られる。

まず最初の抜粋では、主たる話し手 A8 が、第 122 ターンの最後でトピックを自己開示によって発展させる言語ストラテジーを取っている (elaborating topics)。

英語会話 No. 11 からの抜粋³⁾

116 A8: many years ago. And at first it was different, but I got accustomed to it. ▽

117 A7: ▽ Uh-huh.

118 A8: and then you go through it again.

You go through these cycles, you try not to be too judgmental. ▽

119 A9: ▽ Uh-huh.

120 A8: Right? ↑ And say what were you like when you are 18, ▽

121 A7: ▽ Uh-huh.

122 A8: or 19, and I would say, oh, gosh. I was not the most dedicated student either, so it's okay. I think I know what to expect and yeah. I think where I teach is probably better than most places. It seems as far as behavior and attitude. ▽ ←

123 A9: ▽ Uh-huh.

同じ英語会話からの抜粋である次の会話では、主たる話し手 A8 が、第 421 ターンで、直接話法で自分の学生のことは “hey I had an English speaker, I panicked at first but then I remember what you told me, do not panic.” を引用している。この会話の場にはいない学生のことは直接引用し、学生が A8 に語った内容を再現している。続いて第 423 ターンでも、学生に自分が話しかけた言葉 “Okay yeah then what did you do?” をそのまま引用し、学生の言葉 “I forgot everything, but I did remember this.” を引用している。この会話において主たる話し手 A8 は、学生や自分の言葉を直接引用することで、会話を生き生きとしたものになっている。また同時に、学生の物語を語ることで、会話への関与を強く示している。これらのストラテジーは Tannen (1989) が分析した関与ストラテジーである。

421 A8: Or that's important. And I have had that situation where students came back to me and said, hey I had an English speaker, I panicked at first but then I remember what you told me, do not panic. ▽ ←

422 A7: ▽ Yeah.

- 423 A8: Okay yeah then what did you do? I forgot everything, but I did remember ←
this. That's great. ▽
- 424 A9: ▽ Yeah, yeah.
- 425 A8: And they are able to communicate some way.
I think it became more of a positive experience.
I wish students could make perfect conversation
but ▽
- 426 A7: ▽ Yeah.

以上、見てきたように、英語会話において主な話し手が使う様々な言語ストラテジーは、すべて意味を作り出し、その意味を相手に伝え、会話への関与を創造している。主たる話し手は、言語ストラテジーを使って、自分が話している内容を方向づけていると同時に、主でない話し手がその内容をどう理解するかをも方向づけている。

(2) 主でない話し手の役割

英語会話において、初対面会話を協同で構築していくとき、主でない話し手は実に様々な言語ストラテジーを使用し、役割を果たしていることがデータ分析より明らかになった。第一ストラテジーとして、主でない話し手は、言語的あいづちを使用している（例、That's great. It's nice. Wonderful.）。これにより、相手（主な話し手）の話への関心を示し、相手への理解を示している。結果として会話への関与を示している。第二ストラテジーとして、非言語的あいづちを行っている（例、Yeah. Right. OK.）。非言語的あいづちを発することにより、話を受け止めている、理解している、同意している、話がある効果を挙げているということを主な話し手に伝えている（Clancy et al. 1996）。

第三ストラテジーは、肯定的なコメント（positive comments）を発言することである。肯定的なコメントは、会話への関与を示し、またそれはプラスの評価をくださることでもある。

第四ストラテジーは、主な話し手に対して、話し手の気持ちを理解しているということを示すコメントを行っており、これによって関与を示している。

第五ストラテジーとしては、主な話し手の話を促進するようなコメントを行っており、これも主な話し手への関与を示し

ている。

第六ストラテジーとして、主な話し手がことばに詰まってしまったときは、単語や語句を与えており、これも関与を表している。主でない話し手が与えた語句がぴたりとはまったときは、これをもらった主な話し手は、もらった語句を自分の発言の中で繰り返して使っている。この繰り返しが Tannen (1989) が述べているように、リズムを生み出している。

第七ストラテジーとして、主でない話し手が自分の感情や考えを述べる自己開示を行っている。自分自身の経験に基づいた話を語ったりして、自分の感情の説明を行っている。これも Tannen (1989) が指摘するように関与を示す働きをしている。

第八ストラテジーは、主な話し手が次に何を話すのかを予測して先取りしたコメントをすることである。これも会話への関与を示し、予測が正しい場合は、主な話し手がもう一度同じことを繰り返して話すので、繰り返しがリズムを生んでいる。

第九ストラテジーとして、主な話し手が言ったことを繰り返して言うことがある。繰り返しは、第八の言語ストラテジーと同様にリズムを生み出す。第八、第九で見られる「繰り返し」は、Tannen (1989) によれば、会話への関与を示すストラテジー（involvement strategy）であり、主な話し手は、相手が発する繰り返しによってリズムカルに会話に関与していくことになる。

第十ストラテジーは、主な話し手に質問をすることである。相手が話している内容をより明らかにするために質問をすることは、主な話し手が話している内容についての関心を示すことになる。

第十一ストラテジーは、3人会話の場合に自分以外のもう一人の主でない話し手に質問をすることである。これは主でない話し手を会話に巻きこもうとすると同時に、話し手交替（speaker change）を促すことになる。

第十二ストラテジーは、ターンを取って自分が主な話し手になることである。

最後のストラテジーは、主な話し手をからかうことである。からかい（teasing）は、笑いを生み出し、会話参加者間の距離を縮める働きをする。からかいの言葉が的を得たものだと、その言葉は主な話し手によって繰り返され、繰り返しがまた笑いを生み出し、リズムを作り出す効果がある。

たとえば、以下の会話では、日本の大学で教えている英語

母語話者 3 人が話しているが、主でない話し手の言語行動の特徴が見られる。

英語会話 No.11 からの抜粋

- 30 A8: Are you full time there?
31 A9: Full time, yeah.
32 A8: Okay. (pause) ←
It's a nice place. It's in Yagoto? ↑
33 A9: Yeah, in Yagoto. Yeah it's a
really nice place.
34 A7: Great campus. ←
35 A9: Yeah, small, but you know, ▽
36 A8: ▽ It's okay.
37 A9: the park is close by, so it's really nice. Yeah.
38 A7: Uh, the park which is part of that –
temple? ↑ ←
39 A9: That's right.
40 A7: It is kind of behind ▽ that, is that right? ←
41 A9: ▽ It's right next door.
42 A7: That's nice. ←
43 A9: Slip out of the library and go into the park, it's
really nice.
44 A8: Especially in the summer I suppose, huh? ↑ ←
45 A9: Uh-huh (laugh) and feed the cats you know
everywhere. ←
46 A7: Or do not (laugh)

第 32 ターンでは、主でない話し手 A8 は相手の大学の場所を素晴らしい場所だ (It's a nice place.) とほめる肯定的なコメントをしている。そのコメントがぴたりとはまり、第 33 ターンで主な話し手である A9 が、“Yeah it's a really nice place.” と繰り返している。すると第 34 ターンで、もう一人の主でない話し手 A7 も同様に肯定的なコメント (“Great campus”) をしている。第 42 ターンでは、A7 がまたもや肯定的なコメントをしている。

第 38・40 ターンでは、主でない話し手 A7 が、第 44 ターンではもう一人の主でない話し手 A8 が、主な話し手 A9 に質問をし、相手の話題 (A9 が勤務する大学) に関心を示

している。これらの主でない話し手 A7, A8 の関与を受けて、第 45 ターンでは、主な話し手 A9 が自己開示をし、話題を発展させている。

- 76 A8: Yeah, it has become even more upscale. There
is a new shopping center, our little Rodeo drive
(laugh).
77 A9: yeah, yeah.
78 A7: Lot of tourists.
79 A8: Yeah, there are tourists, yeah. When I went in
there, a lot of high-end fashion shops.

上記の会話では、主でない話し手 A7 が、第 78 ターンで、主な話し手 A8 の話を促すようなコメントをしている。

- 192 A8: and thought my wife and I would stay in Gifu for
2 or 3 years, and that ▽
193 A7: ▽ you're stuck. ←
194 A8: was 14 years ago.
195 A7: Now you are stuck.
196 A8: (laugh) Pleasantly stuck. Pleasantly stuck. I enjoy
it. So we bought a house few years ago ▽
197 A7: ▽ Uh-huh.

上記会話では、岐阜県にほんの 2, 3 年住むつもりだったと告白した主な話し手 A8 に対し、主でない話し手 A7 が、第 193 ターンで、泥沼にはまっちゃったんだ (you're stuck) とからかい (teasing) をしている。第 195 ターンでもう一度、からかっている。それを受けて主な話し手 A8 が、喜んでしまっているんだ (Pleasantly stuck) と切り返している。主でない話し手の言葉が的を得ているので、主な話し手がそれを繰り返し、リズムが生まれている。

- 330 A8: and then you try to remember names and it is
really tough.
331 A7: Impossible really. ←
332 A8: I could not do it now.
333 A9: Right.

この会話では、大人数の授業では学生の名前を覚えること

表 1 「主でない話し手」の役割とその頻度（英語会話 No. 11）

	あ 言 語 的 あ い づ ち	あ 非 言 語 的 あ い づ ち	コ メ ン ト 肯 定 的	コ メ ン ト 同 情 的	話 相 手 の 発 言	コ メ ン ト 間 を 繋 ぐ	コ メ ン ト 自 己 開 示	コ メ ン ト 予 測	の 繰 り 返 し の 表 現	質 問 主 た る 話 し 手 に 対 し	質 問 主 で な い 話 し 手 に 対 し	取 る タ ー ン を	か し 手 を 主 た る 話 し 手 に 対 し
A7	18	37	10	3	14	5	3	2	13	30	8	5	2
A8	14	15	7	3	4	3	0	0	0	20	1	3	0
A9	25	50	2	1	0	1	0	0	0	5	0	0	0

がとても大変だったと過去のクラスについて振り返っている A8（主な話し手）に対し、主でない話し手 A7 が同情を表すコメントを第 331 ターンで行い、A8 が話を発展させている。

379 A7 : And this textbook is just all over the place and it does not provide any grammar learning really. I mean there are just a few scattered grammar exercises but basically it does not really teach them the skills they need.

380 A9 : Right.

381 A7 : Very frustrating for me.

382 A8 : You are forced to use it. ㄱ ←

383 A7 : ㄴ Forced to use it.

上記会話では、主な話し手 A7 が自分の大学で使用しているテキストについて不満を述べている。第 382 ターンで、主でない話し手 A8 が同情を表すコメント（You are forced to use it）を行い、それが状況にぴったり合うので、その表現を A7 がもう一度使っている（Forced to use it）。ここでも繰り返しが起こり、リズムが生まれている。

429 A8 : where they want to come up with a university-wide program ㄱ

430 A7 : ㄴ Right.

431 A8 : that will hold us accountable? (↑) .

That is what it is supposed to be.

432 A7 : Accountability, ㄱ perhaps. ←

433 A8 : ㄴ Accountability, and to show that the students will be at this level ↑ and I am not so sure that having a high TOEIC score is the answer.

この会話では、ことばに詰まった主な話し手 A8 に対し、主

でない話し手 A7 が、Accountability ということばを第 432 ターンで与えている。そのことばをそのまま A8 も使い、繰り返しが生まれている。

(3) 英語会話における主な話し手と主でない話し手との役割分担

上記データ分析が示すことは、英語会話においては、ターンは主な話し手と主でない話し手との間で相互に行きかうものである。主でない話し手は、単なる聞き手ではない。むしろ、(2) で分析したような様々な言語ストラテジーを使って積極的に会話に参加している。その結果、会話は主な話し手と主でない話し手との協同作業となっている。英語会話における主たる話し手と主でない話し手の役割分担は、平等であると言えるだろう。表 1 は、A7、A8、A9 の 3 人が参加した英語会話 No. 11 における「主でない話し手」の役割とその頻度を示したものである。この 3 人は話者交代を繰り返しながら、初対面会話を 30 分続けたが、その間、3 人とも主でない話し手のとき、実に様々なストラテジーを使用し、話者交代を可能にし、主な話し手の話に積極的に参加しているのが表 1 でわかる。

英語会話において、主でない話し手が使う言語ストラテジーは、意味を創造し、相手に伝え、関与を創造しているのである。それでは、日本語会話は会話参加者たちによってどのように作り上げられているのだろうか。

2. 日本語会話における会話の協同構築の特徴

(1) 主な話し手の役割

日本語会話の分析により、主な話し手の役割には以下の 4 つの特徴があることがわかった。第一に、話題を始めて、その話題についてターンを維持したまま話し続ける。第二に、主でない話し手からの質問に答える、またこれまでの分析で見た英語会話における主な話し手とは異なり、ターンを自分から主でない話し手に渡すことは少なく、また自分の考えや

感情を表現する自己開示は少ないことがわかった。

次に主でない話し手の役割だが、日本語と英語会話の談話展開パターンを比較分析した Otani (2010)によると、日本語会話には二つのスタイルがあるという。一つは、主な話し手がほとんどターンを保持し、一方的に話し、主でない話し手は短いあいづちを打ちながら、もっぱら聞き手にまわるモノローグスタイルの会話である。もう一つは、主な話し手と主でない話し手の間でターンが行き来し、主たる話し手が頻繁に交代するスタイルで、Otani (2010)は、インタラクティブスタイルと呼んだ。この二つの会話スタイルにおいては、主でない話し手を使用する言語ストラテジーが異なり、会話において果たす役割も異なるので、分けて分析する。

(2) モノローグスタイルの会話における主でない話し手の役割

モノローグスタイルの会話においては、主な話し手がターンを長い間保持し、話し続ける。この会話スタイルにおける主でない話し手の役割は、第一に、非言語的・言語的あいづちをうち、会話への関与を示すことである。第二に、主な話し手が述べたことを繰り返すことであり、このことにより、会話への関与を示す。第三に、主な話し手が述べたことに対して笑いを発することであり、このことによって関与を表している。第四に、主な話し手に対し、話題に関することについて何か質問をすることであり、このことによって会話への関与を示している。

以下の日本語会話は、40代の日本人ビジネスマン J7, J8 の初対面会話である。

日本語会話 No. 19 からの抜粋

635 J7: でも寿司屋はもう二極化して

636 J8: えー

637 J7: 高級店は

638 J8: 高級店は日本の

639 J7: 直営っていう形なんですか?
日本人のやってる、いやいや、日本人の板さんがこっち来てや

640 J8: ええ

641 J7: ってる店ってのが、高いらしいですよ、一人 7,80 ドルとか

642 J8: うん

643 J7: で、ニューヨークでその寿司屋に聞いた時には、店にアナゴが置いてある店っていうのは、

644 J8: 本物
ほんまもんだと

645 J7: っていうのは、アナゴってのはアメリカでは取れないのか取らないのか知らないけども

646 J8: あー

647 J7: 全部日本から輸入なんですって。

648 J8: だから
あー、(●)ものとかで、ウナギとかも

649 J7: そうですね?
ウナギは嫌ほどあります、だからどこでもウナギ出てくるんですけども、アナゴっていうのは、だから日本から取り寄せないといないんで

650 J8: なるほどなるほど、それ
651 J7: だから

アナゴ置いてる店って言うのは本物だと

652 J8: なるほどなるほど

653 J7: 分かりやすい見方。他の魚なんか、まぐろま

654 J8: ●、ま、アナゴだけはもうごま
うん

655 J7: かしようがないって

656 J8: うーん

657 J7: で日本から輸入しなきゃいけないんで、アナゴ置いてある店っていうのは

658 J8: 本物なん

659 J7: でしょうね
あの、ちゃんとしたお店です。その板さんによると、ちゃんとしたお店です

660 J8: うーん

661 J7: でもまだトロントでアナゴが置いてある店行ったことないです

662 J8: んあ(笑)、そうですね、うーん

663 J7: もちろん、あの、さっき言った高い店が一軒あるんですけども

664 J8: うん

665 J7: 高すぎて行ったことない、そこには多分あると思いますけどね。だからマンハッタンだったらやっぱり一人でお一人様、えー、300ドルとかね

表2 モノローグスタイル会話における主でない話し手 (J8) の役割 (日本語会話 No. 19, N=444)

	あいづち 言語的	あいづち 非言語的	肯定的 コメント	同情的 コメント	自己開示 コメント	予測 コメント	繰り返し コメント	質問する 主たる	質問する 第三者に	取る ターンを	からかう 主たる	得後の ターン取 コメント	笑い	話題関連 コメント	完結 コメント
頻度	30	207	0	3	0	24	34	37	/	3	0	15	28	53	10
%	6.8%	46.6%	0%	0.7%	0%	5.4%	7.7%	8.3%	/	0.7%	0%	3.4%	6.3%	11.9%	2.2%

表3 インタラクティブな会話における主でない話し手 (J3) の役割 (日本語会話 No. 15, N=289)

	あいづち 言語的	あいづち 非言語的	肯定的 コメント	同情的 コメント	自己開示 コメント	予測 コメント	繰り返し コメント	質問する 主たる	質問する 第三者に	取る ターンを	からかう 主たる	得後の ターン取 コメント	笑い	話題関連 コメント	完結 コメント
No.	19	101	0	8	0	6	3	15	/	11	0	61	20	42	3
%	6.6%	35.0%	0%	2.8%	0%	2.1%	1.0%	5.2%	/	3.8%	0%	21.1%	6.9%	14.5%	1.0%

666 J8：うーん

上記会話を見るとわかるように、主な話し手 J7 は、終始ターンを保持し、ずっと話し続けている。典型的なモノローグスタイルの会話である。主でない話し手 J8 は表 2 が示すように、短いあいづち（言語的・非言語的あいづち）を打つか、笑うか、せいぜい短いコメントを言うことしか行っていない。英語会話の主でない話し手が行う様々な言語戦略は全くと言っていいほど使っていない。ひたすらあいづちを打ちながら、聞き役に徹している。

(3) インタラクティブな日本語会話における主でない話し手の役割

インタラクティブな日本語会話の分析により、主でない話し手の役割には以下の六つの特徴があることがわかった。第一に、非言語的・言語的あいづちをうち、関与を示す。第二に、主たる話し手が述べたことを繰り返す。繰り返して関与を示す。第三に、主たる話し手が話したことに対して笑う。笑いは関与を表す。第四に、主たる話し手が話している話題に関する何をか質問する。質問も会話への関与を示す。ここまでの四つの言語戦略は、モノローグスタイルの日本語会話で使用されている戦略と同じものである。ただし、インタラクティブな日本語会話には、モノローグスタイルの会話には見られない言語戦略が二つ見られた。一つは、主でない話し手が自分の体験に基づいて話題に関連したことについてコメントを言うことである。主でない話し手が自己開示することによって、会話への関与を示している。もう一つは、主でない話し手がターンを取り、主たる話し手になることである。言い換えれば、話者交代 (speaker

change) を促している。インタラクティブな日本語会話では、主でない話し手が、英語会話の主でない話し手が使っているストラテジーの一部を使っていることがわかる (表 3 参照)。逆にいえば、主でない話し手が自分から話題に関連したことで自己開示しコメントし、話を発展させていくことや、自分からターンを取るということをしてはじめて、会話はインタラクティブなものになるということである。主でない話し手が短いあいづちを打ちながら相手の話を聞いているだけでは、会話はインタラクティブなものにはならないのである。

以下の会話も 40 代ビジネスマン J3, J7 の初対面会話である。日本語会話データの中では例外的にインタラクティブなスタイルがところどころ現れる会話である。

日本語会話 No. 15 からの抜粋

- 344 J7：いや、もう中国は。
345 J3：そうですね。
346 J7：もう行こうとは思わないんです。
347 J3：うん。
348 J7：台湾はそうでなくてよかったと。
349 J3：うん。
350 J7：「台湾ならもう 1 回行ってもいい」言っていましたね。
351 J3：中国のね、上海も私も (笑)、結構何回か行っているんですけども。一番覚えているのは、あの、ちょうど、こう、日中の関係がすごい悪くなった。←
352 J7：ああ。
353 J3：まあ、最中に行って。そのときはもう、本当に、あの、「まず日本人であることを隠せ」って言われて。
354 J7：ああ……。

355 J3: で, そんなん, ばれちゃうじゃないですか.
 356 J7: まあ, ばれますよね.
 357 J3: だから, 中国の地図をこうやって読みながら. で, タクシーは乗らないほうがいいと言われたんで, 現地のバスに乗って.
 358 J7: ああ.
 359 J3: で, 空港からの間ですか.
 360 J7: 現地のバスのほうが怖いですよ, むしろ.
 361 J3: いや.
 362 J7: バスは何の問題が.
 363 J3: 中国語でいっぱい話し掛けられました.
 363 J7: ああ. ですね.
 364 J3: ああ. 何か分からない. ちょっと汚いかっこうして日本人とばれないようにしようって思ったら, 何かいろいろ話しかけられてきた. うん. 何よくわからないけれども (笑). こういうやつなんですけれども (笑)
 365 J7: この, 僕あるとき, 出張だったが, そんなん教えてもらわん. ずっとスーツで行っていて. ←
 366 J3: うん.
 367 J7: やっぱり, うちの上海の事務所のやつが, もう, スーツじゃないんですよ.
 368 J3: うん.
 369 J7: もうお客さん所に行く時以外は.
 370 J3: うんうん. うん.

上記会話では, 主な話し手 J7 がずっとターンを保持して話し続けていたが, 主でない話し手 J3 が第 351 ターンで自分からターンを取りに行っている. ここで話し手交替が起こり, J3 が主な話し手となって, 自分の経験を展開していている. 今度は J7 は主でない話し手となって, あいづちを打ちながら, J3 の話を聞く聞き手となっている. そして第 365 ターンで再び, J7 がターンを取り, 主な話し手となり話を始めている. ここでは二人の話者 J3, J7 が交互にターンを取り, 話者交代が起こり, インタラクティブな会話スタイルとなっている.

このように主でない話し手が, ターンを取ってこそ, 会話はインタラクティブなものになるのである. ただ, この会話も 30 分全体を見ると J7 がかなり長い間ターンを取り, モノローグスタイルの会話になっている部分が多く見られる.

(4) 日本語会話における主でない話し手に期待される言語行動

以上の分析から, 日本語会話における主でない話し手の役割として期待されるものは, 非言語的・言語的あいづちを打ち, 主な話し手の話に笑い, 話題に関連した質問を行い, 主な話し手から譲られない限り, ターンは取らないというものである. モノローグスタイルとインタラクティブスタイルの会話で, 主でない話し手を使用する言語ストラテジーに少し違いはあるが, 全体として日本語会話における主でない話し手は共通した言語行動を取っており, 英語会話の主でない話し手とはかなり異なる. 日本語会話においては, 主でない話し手は, 主な話し手が話し続けられるようにすることが一番重要な役割である. 従って, 主でない話し手は良い聞き手 (good listener) になることが大切である. 会話において従属的な役割を果たし, 主な話し手に対して感情のこもったサポートを送ることが期待されている.

しかし細かくデータを分析していくと少し違った像が見えてくる. モノローグスタイルの会話において主な話し手はかなり長い間ターンを維持して話し続けるわけだが, 長い間ターンを維持し続けると言うのは自分一人のできることでない. 主でない話し手たちが, 支えてこそ可能なのである. すなわち, 主でない話し手たちは, 頻繁にあいづちを打ちながらただ聞き役をしているわけではない. 言語的・非言語的あいづちをかなりの頻度で打つことで, どうぞそのまま話し続けてください, 私は聞いていますよといった一種の安心感を主な話し手に与え続けているのである.

主な話し手がずっと話し続けていいのかという不安を抱えながら, 聞き手である主でない話し手にあいづちを打つように暗黙に要請し, それを察した聞き手である主でない話し手があいづちを頻繁にうち, どうぞ話を続けてくださいということを示し, あいづちという関与を受け止めて主な話し手は話し続けるのである. あいづちを通して主な話し手と主でない話し手とは, 協同で会話を構築している. 英語のような双方がターンを頻繁にやり取りし, 活発に意見を述べ合い. 質問をし合い, 協同で会話を作り上げていくようなダイナミックさはないが, 日本語の会話においても会話参加者が協同で会話を作り上げている.

3. 日本語会話と英語会話における協同作業の相違点

英語会話と日本語会話の分析により、浮かび上がった相違点がいくつかある。主な話し手に関しての第一の相違点は、英語会話の会話参加者の方が日本語会話の参加者より、自己開示を圧倒的にたくさん行っている。第二に、日本語会話においては英語会話に比べて、主な話し手が会話のフロア（発言権）を圧倒的に長く維持する傾向がある。

主でない話し手の比較では、日本語会話においては、主でない話し手は非言語的あいづちを好む傾向が強い。それに対し、英語会話においては、主でない話し手は、言語的あいづちを多用し、また他の言語ストラテジーも多用している。

V. 終わりに

日本語会話と英語会話では特に、主でない話し手に期待されている役割がかなり違うことがわかった。英語会話においては、主でない話し手も積極的に会話に参加し、コメントを発言し、自分も自己開示し、時には主な話し手をからかい笑いを誘っている。一方、日本語会話では、主でない話し手は、聞き役に徹し、ひたすらあいづちを多用している。Wierzbicka (1985)によれば、会話において丁寧な (polite) もしくは思いやりのある (considerate) 会話参加者とはどういう人であるかということは、文化固有のものである。文化が違えば、丁寧もしくは思いやりのある会話参加者として必要な言語行動が違うのである。

もし日本人が英語で話をするとき、日本語での会話参加者のルールをそのまま英語に持ち込んだらどうなるだろうか。相手の話を熱心に聞いているということを示すためにあいづちを頻繁に打ち、相手の話しに笑い、話題にそった質問をすることで相手の話に関心があることを示そうとするだろう。相手がずっと話し続けてもターンを取ろうとはせず、聞き役に徹するだろう。自分の体験談や考えを積極的に述べる自己開示もありしないだろう。しかし、英語会話のルールに慣れ親しんでいる英語母語話者には、日本人のそうした言語行動は、「積極的に自己開示せず、自分の意見を言うこともせず、あいづちばかり打っているつまらない日本人」と不満をいだくかもしれない。

筆者は、日本人が英語母語話者と初対面で行った英語会話を分析したが、仕事で海外出張を頻繁に行っているビジネスマンや英語で学会発表をしている日本人教員や院生が、

英語母語話者と英語で会話をするとき、自分から発言することはほとんどせず、もっぱらあいづちばかり打つ聞き役になっていることを明らかにした (岩田 2010a; Iwata 2010b)。そういう日本人の言語行動に相手のアメリカ人が非常に不満を持ち、会話収録後のフォローアップインタビューでも強い不満を表明し、中には二度と話をしたくないとまで言ったアメリカ人もいたほどである。

収集した会話の中には、日本人が英語母語話者とうまく対人関係構築ができ、ラポールが築け、うまくいった会話もある。それらの会話においては、日本人も自分から積極的に自己開示し、話題提供をしている。英語母語話者の質問にただ答えるだけではなく、また単なる聞き手になっているだけでもない。自分から積極的に会話に参加している。

そこまで積極的に自己開示できなかった日本人の場合でも、少なくとも英語母語話者の質問に対する単なる答えではなく、自分の意見や考えを述べている。すなわち「答え+ α 」で答えている。この「 α 」に自分の意見や考えを入れている。ただし、自分から相手の英語母語話者に質問をするというのはなかなか難しかったようである。

英語で仕事をする機会が増えている日本人にとって、英語を使って人間関係を構築し、互いの意思疎通を図りながら、互いの意見や考えを述べあい、交渉することのできる英語力は必須である。そのような英語力を習得するためには、発音や文法や表現方法の習得だけでは不十分である。英語の会話ルールやその背後にある英語文化の価値観に気づくこと (本稿の場合であれば自己開示は率直さ・正直さを示すので好まれるということ)、そしてある程度英語の会話ルールに則った話し方を心がけることが大切である。

日本の英語教育には、本稿で分析したような英語の会話ルールの教育がまだまだ不十分であると思われる。英語教育において、自己開示を通して対人関係を構築する価値や手段を積極的に教える必要があるだろう。自己開示することで率直さや正直さを示し、対人距離が縮まることを教えなければならないだろう。具体的なストラテジーとしては、いきなり自己開示が無理であれば、まずは「答え+ α 」の返答を心がけ、 α に自分の意見や考えを入れること、自分で話を終結させて自分から新しいトピックを導入することなどを教えていく必要がある。

会話データをこれからも収集し、分析を深めていきたいと

考えている。

注

- 1) 本稿は、2010年9月2日にイギリスのサウスハンプトン大学にて開催された Sociolinguistics Symposium 18 (第18回社会言語学シンポジウム) にて、筆者が発表した Co-constructing conversations in English and Japanese: Are we the same or different in elaborating topics and disclosing ourselves? を加筆修正したものである。
- 2) 本研究のデータ収集・文字起こしは、2009年度文明研究所個別研究プロジェクト研究費により可能となった。ここに記し、謝辞を申し上げる。
- 3) 会話の文字化のルールは以下のとおりである。

┐

└ 二人の発話の間にポーズがない

[二人の発話がオーバーラップ

(●) 聞きとり不可能な部分

↑ 上昇イントネーション

← 分析のポイント

参考文献

- Clancy, P.A., Thompson, S.A. & Suzuki, R. (1996), "The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin," *Journal of Pragmatics*, Vol. 26, No. 3, pp. 355-388.
- Duranti, A. (1986), "The audience as co-author: An introduction," *The audience as co-author*, special issue of *Text* (ed. Duranti, A. & Brenneis, D.) Vol. 6, No. 3, pp. 239-247.
- 岩田祐子 (2010a) 「トピックの深め方と自己開示」 シンポジウム『英語によるインタラクションに不可欠な異文化適応能力の養成—グローバル化時代の英語教育』における発表。大学英語教育学会関東支部研究大会 (東洋学園大学)。
- Iwata, Y. (2010b), "Pragmatic Failure in Topic Choice, Topic Development and Self-disclosure," *Intercultural Communication Studies*, Vol. XIX: 2, pp.145-158.
- Keating, E. & Egbert, M. (2004), "Conversation as a cultural activity." In Duranti, A. (ed.) *A Comparison to Linguistic Anthropology*. pp. 169-196. Oxford, U.K.: Blackwell.
- Sacks, H., Schegloff, E.A. & Jefferson, G. (1974), "A simplest systematic for the organization of turn-taking in conversation," *Language*, Vol. 50, pp.696-735.
- Maynard, S. (1989), *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*, Norwood, NJ: Ablex.
- Otani, M. (2010), "A contrastive study of topic development style in Japanese and American English," paper presented at Sociolinguistics Symposium 18 held in Southampton, U. K.
- Schegloff, E. A. (1982), "Discourse as an interactional achievement: Some uses of 'uh huh' and other things that come between sentences. In Tannen, D. (ed.) *Analyzing discourse: Text and talk. (Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics 1981)*, Washington, D.C. : Georgetown University Press.
- Tannen, D. (1989), *Talking voices: repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*. Cambridge, U.K.: Cambridge

University Press.

White, S. (1989), "Backchannels across cultures: A study of Americans and Japanese," *Language and Society*, Vol. 18, pp.59-76.

Wierzbicka, A. (1985), "Different cultures, different languages, different speech acts," *Journal of Pragmatics*, Vol. 9, pp. 145-178.

南インド・ケララにおけるセキュラリズム

—— 近代・公共空間・宗教 ——

川野美砂子 東海大学海洋学部海洋文明学科准教授

Secularism in Kerala, South India: Modernity, Public Space, and Religion

Misako KAWANO

Associate Professor, Department of Maritime Civilizations, School of Marine Science and Technology, Tokai University

The purpose of this paper is to show, firstly, that one of the elements which contributes to religious pluralism in Kerala is the tradition of secularism. It must have space for a continuous dialogue among religious traditions and between the religious and the secular, as remarked by Ashis Nandy concerning India. Secondly, I would like to show that it can be understood in the context of a realization of social justice and formation of modernity in Kerala.

While modernity in the West, which consists of values of social justice and human rights, is built on the grounds of secularism which excludes religion from public spaces, it can be said that modernity in Kerala was opened by lower caste movements, which demanded social justice and fundamental human rights. The movements were developed with claims to open the public spaces from which lower caste people had been excluded by caste rules.

It has been questioned whether there was a notion of 'public' in south Asia. However, I maintain this 'public space' appeared in Kerala in the political movements for social justice and human rights in the form of a 'protest against exclusion'. Public space can be determined as a space, exclusion from which means depriving people of the 'things essential to a truly human life' (Hannah Arendt). In Kerala, as in many other areas in India, it was temples which lower caste people demanded most strongly to have access to. In that sense, temples were the most important public spaces in Kerala. Public space in the context of modernity in Kerala was, and still is, not one which should be non-religious as in the context of Western modernity but one, access to whose religious value was claimed.

Accepted, Dec. 2, 2010

序

この論文の目的は、第一に、ケララにおいて宗教的多元性を実現している要素の一つがケララのセキュラリズムの伝統であることを明らかにし、第二に、これは一方で西欧近代とも共通する世俗化の中で形成され、他方においてそれとは異なる文脈の中で実現されてきたインドのセキュラリズムに連なるものではあるが、ケララにおける社会的公正の実現と近代の成立という歴史的な文脈の中で理解されるものであることを示すことである。

セキュラリズム及び世俗化、そしてそれらと宗教の関係についてはこれまで多くの議論が行われ、現在においてもいわば「進行形」の議論であり続けている。しかし、セキュラリズムが現代の立憲民主制社会の基盤として広く認められ、支持されていることは間違いない。たとえば、憲法学者の長谷部

恭男は、立憲民主制社会の共通理解としての「政治的」観念は、宗教や哲学といった「人の生き方や人生全体に関する考え方」を含む「包括的」観念から区別される必要があると述べている。政治的領域にはそうした包括的世界観を持ち込んでではなく、そのような領域として成立する公共空間において、人は自由かつ平等な市民として公正に協働しうるのである（長谷部 2000：59）。現在広く承認を受けているセキュラリズムとは、このような公共空間（政治的領域）に包括的世界観、とりわけ宗教を持ち込んでではないという考えだといつてよいだろう。したがって公共空間から排除された宗教は私的空間においてのみ許容される。言いかえるなら、宗教は「私事化」されることになる。これが「政教分離」を正当化する考えである。

一方、世俗化は歴史的にさまざまな意味を帯びてきたので、極めて複雑で多義的な概念である。アメリカの宗教学者ホセ・カサノヴァは、この概念を「処分」してしまった方がいいとさえ思われるといいながら、「世俗的領域——主として国家、経済、科学——が宗教的領域から機能的に分化して解放され、

本論文は、『文明』投稿規定に基づき、複数レフェリーの査読を受けたものである。原稿受理日：2010年12月2日

同時に宗教の方は新たに見出した宗教的領域の内部で分化して特殊化する」プロセスを中心的命題として取り出している。この命題には、世俗化のプロセスとともに宗教が衰退するという下位命題と、宗教の「私事化」という下位命題が結びつけられてきたという(カサノヴァ 1997: 30-31)。

政教分離を正当化するセキュラリズムと世俗化の命題はほぼ対応しており、これらは西欧社会がたどった「近代」とりわけ宗教対立とその克服の歴史の重要な側面であると考えられてきた。このことは、近年ヨーロッパで大きな課題となっている「ムスリム問題」についても前提とされる共通理解であるように思われる。つまり、公共空間に宗教をもちこまないという原理によって「近代」が達成されたのであるから、イスラムにも同じ原理が適用されなければならない、公共空間にイスラムを持ち込もうとするのは「前近代性」の表れだということになる。インドにおけるヒンドゥーとムスリムの宗教対立についても、これらの宗教的アイデンティティの主張をコミュニナリズムと捉え、同様のセキュラリズムと世俗化による克服を目指すのがリベラリズムの立場である。

だが、このようなセキュラリズムと世俗化の議論に異を唱える立場もある。たとえば、関根康正はコミュニナリズムとセキュラリズムを対比させる構図を西欧的図式として批判し、セキュラリズムもコミュニナリズムを生んだのと同じ近代的宗教概念を前提とするものであって、コミュニナリズムに対する解決にはならないと主張している(関根 2006: 41-43)。またカサノヴァは、そもそもこのような世俗化の命題が変更を迫られていると指摘する。「われわれは今まさに、近代世界における宗教の「脱私事化」を目撃しつつある、ということである。私が「脱私事化」というのは、世界中の宗教的諸伝統が、近代化論や世俗化論によって当てがわれてきた周縁的で私的な役割を受け入れることを拒否しつつづけている、ということを示していることである」(カサノヴァ 1997: 13)。カサノヴァは、この「近代化の逆転」と見える事態を、宗教が「公共的領域」に入り、「公共性」を獲得したと捉えるのである。

本稿の立場は関根やカサノヴァと重なる部分もあるが、ここで示そうとするのは次のことである。すなわち、「ケララの近代」における「公共空間」は、西欧近代とは異なって非宗教化されるべきだとされた場ではなく、その宗教的価値へのアクセスの開放こそが求められた場であった。つまり近代は「宗教の私事化」という道を通らなかったのである。したがって

「脱私事化」という見方もとらない。社会的公正と基本的人権を求めるケララ近代への政治運動は、同時に宗教改革運動の形を取らざるをえなかった。なぜなら政治的領域の根幹にある人間の価値と社会的秩序、そして社会・経済構造に関わる問題は、まさに宗教的問題でもあったからである。関根の指摘する通り、インドにおいて政治的領域と宗教的領域は分離できないのであるが、本稿ではこの問題をケララの「セキュラリズム」として、ケララ近代の実現の過程で現れた公共空間と「排除への抵抗」、そしてそこで形成された対抗的公共空間を通して議論を行うことができると考える。そしてこのケララのセキュラリズムを、インドの他地域で激化している形のコミュニナリズムがケララで顕在化しない理由の一つと見る立場をとる。以下、まずこれまで行ってきた宗教的多元性についての議論を簡単に振り返りながら、ケララのセキュラリズムとは何を指しているか明らかにしていきたい。

I. 宗教的多元性・アソシエーション・セキュラリズム

前稿では、南アジアのイスラム聖者廟ダルガにおける「生活宗教の有する融合的性格」に、コミュニナリズムを溶解させる原理を見出す関根康正の主張(関根 2006: 119)に対し、ケララのイスラム聖廟ジャーラムにはコミュニナリズムに関して相反するベクトルをもつ両方の側面があり、個々のジャーラムの伝える物語、地域、時代背景などの諸条件によって、宗教的共存の場ともなればコミュニナリズムの原動力ともなりうることを指摘した(川野 2010)。そのうちの関根の主張とも重なる部分、すなわちジャーラムをめぐる宗教実践の持つ可能性のうちの前者については、さらにその前の稿で論じたが、そこでは、関根が「融合的性格」という言葉で表した現象について「宗教的多元性」という言葉を用い、それを①異なる宗教的要素の併存、②異なる宗教コミュニティの人々による同じ対象(ジャーラム、聖者)に対する信仰、③異なる宗教コミュニティの人々の同じ祭りへの参加、④宗教コミュニティ間の協力関係の象徴的表現の4つのレベルに分けて分析した(川野 2009)。そしてジャーラムとそこで毎年行われる祭りナーチャにおいて宗教的多元性を実現させている要因として、ドラヴィダ文化要素によるシンクレティズム、超自然力の普遍性、世俗的要素を取り出した。

ナーチャに見られる世俗的要素として、パレード(varavu)を構成する踊りや火を用いた曲芸、吹奏楽などの様々なパフ

パフォーマンス、市や露店、そして臨時遊園地などがあげられるが、注目すべき点は、宗教を異にする人々の参加のみならず、そこで見られる宗教コミュニティ間の協力関係の象徴的表現にある。たとえば、ケララ北部マラプラムにある町、コンドーティで行われる町の開祖とされるイスラム聖者のナーチャでは、ヒンドゥーのハリジャン¹たちが、聖者に由来する大砲を町の広場に運び出して「撃つ」²。またパレードは、タクシー運転手などの職業集団や地域の様々なグループによって宗教を横断して編成され、連日ジャーラム及び聖者の家に到着しては群衆の前でパフォーマンスを繰り広げる。あるいはケララ南部のコータヤムでの聖者のナーチャでは、パラソルを持った青年たちを乗せたゾウを先頭にしたパレードが、ジャーラムを出発し、教会、寺院だけでなく、新聞社、庁舎など町の重要な世俗的施設をすべて訪れる。他方教会や寺院、施設の側では、それぞれ供物を用意してパレードを迎え、イスラム聖者のバラカ（祝福）を受けるのである。

このような異なる宗教コミュニティの人々の参加と宗教コミュニティ間の協力関係の象徴的表現は、ケララではイスラムだけでなくヒンドゥーやキリスト教の祭りにも見られる。ケララ中部の町トリシュールで行われるヒンドゥーの祭りプーラムは、地域の人々が見守る中、ヒンドゥー、ムスリム、キリスト教のコミュニティの代表が、儀礼用の装飾を施されたゾウに食物を与えて、互いの協力関係を象徴する儀礼で始められる。デンプシーも指摘する通り、ケララにおいて祭りのパレードで異なる宗教コミュニティ間の協力関係が表現されることは、インドの他の地域において、パレードのときに宗教的アイデンティティとコミュニズムが最高潮に達し、敵意と危険に満ちた瞬間となるのとは対照的である（Dempsey 2001: 53）。

ケララでは「宗教を超えた」あるいは「宗教を問わない」とは「セキュラー」であるとされ、例えばケララの伝説上の王マハバリを祭る祭りオーナムや、ケララで生まれ、近年ますます盛んになっていく宗教現象で、ヒンドゥーもムスリムもキリスト教徒も参加するアイヤパ信仰などは、「セキュラー」な宗教だと言われる³。人々が「セキュラー」と呼ぶものをケララのセキュラリズムと理解するなら、イスラム、キリスト教、ヒンドゥーの祭りに見られる異なる宗教コミュニティの参加と、宗教コミュニティ間の協力関係の象徴的表現もまた、ケララのセキュラリズムとして理解することができるだろう。

ここで宗教的多元性という側面からアプローチしたセキュラリズムの問題を、アメリカの政治学者ヴァーシュニーは「市民的アソシエーション」という側面から扱っている。彼はインドの6都市でヒンドゥー-ムスリム関係に関する比較調査を行い、ケララのカリカットにおいては、宗教コミュニティを横断して組織されている無数の商業組合を初めとする各種職種の労働組合、読書クラブなどのアソシエーションが、両集団間の対立と暴力の誘発を抑制する機能を果たしているという命題を提示し、これを、社会的公正を求めて組織された下位カーストの運動、組合活動を初めとする種々の市民活動と、後のケララ共産党によって行われた1930年代の政治の再構造化に起源をもつものであるとした（Varshney 2002: 119-167）。サンドブルックらも、ケララにおける市民社会の形成と社会宗教改革運動、農業労働者階層の出現と組合運動が、戦後誕生した政権によって始められ、政権交代後も変わることのない政治体制としてのケララの社会民主主義の出発点となっていると述べている（Sandbrook et al. 2007: 74-81）⁴。

ヴァーシュニーの研究は、明示的に述べられてはいないにせよ、宗教に優越した世俗的活動がコミュニズムを抑制するという西欧のセキュラリズムの観念が前提となり、その有効性を示すものとして理解されているように思われる。そのためこの前提があらかじめ結論を導いているのではないかと疑われるが、彼が「市民的アソシエーション」として描くケララのセキュラリズムが、宗教的アイデンティティを排除するのではなく、宗教を横断したローカルな活動として人々に実践されているものを含むなら、上で宗教的多元性を実現しているセキュラリズムとして示したものと重なり合う。この意味でのセキュラリズムが、ケララのイスラム、キリスト教、ヒンドゥーの祭りに表現され、毎年行われる象徴的な確認が地域の宗教コミュニティの共存関係を更新しているのである。

このようにケララのイスラム、キリスト教、ヒンドゥーの祭りに表れる宗教的多元性の中でも最も重要なレベル、すなわち異なる宗教コミュニティ間及び宗教と世俗との間の協働関係が、ケララの「セキュラリズム」として理解しようという考えは、現代のリベラルな社会についての理念型としてのセキュラリズム、すなわち非宗教化された公共空間と宗教を許容する私的空間の分離によって信教の自由が保障され、宗教的多元性の実現されるとする考え方からは、自家撞着ともみえ

るだろう。

この西欧的セキュラリズムの概念は、二組の二分法的対立概念、すなわち公共空間と私的空間、内在的領域すなわち世俗と、超越的領域すなわちいわゆる宗教から成り、世俗を公共空間、宗教を私的空間に配置するものである。しかしこの二組の二分法は、インドでは、例えば粟屋が「われわれの言語には、「公共」のような用語がない」（粟屋 2002：160）というハリシュチャンドラの言葉を引き、関根が「政治と宗教を…分けて使える根拠は思っているほど明らかなものではない」（関根 2006：74）と述べるように、成立しない。

アシス・ナンディは、インドのセキュラリズムには、意識的にせよ無意識的にせよまったく異なる二つの観念が併存していると述べている。第一の意味では近代性とほとんど同一視され、宗教から自由な公共生活を目指す、第二の意味はインドの土着の伝統に根ざすもので、むしろ「異なる宗教伝統間および宗教と世俗との間での絶えざる対話のための空間」を見出そうとするのである（Nandy 2002：68）。ケララのイスラム聖者の祭りで毎年繰り返される、ジャーラムと教会、寺院、そして地域の世俗的施設との間の儀礼的相互行為は、まさに「異なる宗教伝統間及び宗教と世俗との間での絶えざる対話」ということができるだろう。

II. 公共性

西川長夫は 2006 年に書かれた「公共性再定義のために」という副題をもつ論考の中で、その前の 30 年間、とりわけ 10 年間、公共性に関する議論が盛んになったが、それらは多くの矛盾と曖昧さをかかえこんでいると述べ、その理由として、それまで国家の独占的な領域として自明であった公共性の概念が疑われる事態が発生し、公共性の概念と公／私の領域の変化や移動を示す社会的な現象や、公／私をめぐるさまざまな領域の解体と再編が起こったことを指摘している（西川 2006：159-60）。また斎藤純一によれば、1980 年頃までは国家の行政活動を正当化する否定的な響きをもっていた公共性という言葉が、国家が「公共性」を独占することへの批判的認識の拡がりの中で、1990 年頃から肯定的な意味で活発に用いられるようになった。そこには市民などによって自発的に形成されるアソシエーションなど、国家と市場社会の双方から区別される市民社会（civil society）の意義が目目されるようになったことなどがある。彼はこれを「市民的公共

性」と呼ぶ（斎藤 2000：1-2）。

他方、南アジア研究の分野においても、1980 年代後半以降、市民社会、市民権、公共圏などをテーマとして議論が行われたが、それらはもっぱらハーバーマスが『公共性の構造転換』の中で論じた「市民的公共圏」、すなわち私人が平等に自由に参加し、公共の問題について合理的批判的な論議を行い、公権力を監視する公論が形成される場を参照枠組としてきたように思われる（粟屋 2002：145-6）。これは斎藤が「市民的公共性」と呼ぶものに重なるだろう。そこで問われるのが、粟屋の紹介するチャクラバルティの指摘にもある、「西欧近代的な公と私の二項対立を南アジアに適用することの妥当性」（Chakrabarty 2000：117-48、粟屋 2002：154）である。西欧近代社会の分析モデルを適用することに対する懸念は、南アジア研究の場合、活発なネイティブ研究者の発言もあずかって、このテーマに関してのみならずほとんど常につきまとい、そこで必ずと言っていいほど問われるのが、相当する現地の概念が果たして存在するのかという問題である。

しかし西川の「公共性論のより根本的な問題は、公共性論の前提をなしている公／私の枠組み自体を疑い、問題の俎上に乗せることだろう」（西川 2006：161）という提言にも表れているように、これは南アジア研究だけの問題ではない。それが非西欧のみならず西欧近代にすらも妥当する問題であることは、彼が引用するアルチュセールの問いが端的に示している。すなわち「その大部分が公的な資格をもたず、私的な制度にすぎないこれらの諸制度（教会、政党、組合、家族、学校、新聞やメディア、文学、美術、スポーツ、等々）がいかなる権利によって」公的とみなされうるのかという問いである。

同じ疑問はケララに関しても生じる。ケララのネイティブ研究者によって英語で‘public temple’と書かれる寺院の多くが、ヒンドゥー・カーストのナーヤルのタラワード（母系拡大家族）寺院であったことを考えるとき（川野 2001：18-23）、当該社会の外部の人間からは、アルチュセールに倣って「公的な資格をもたず、私的な制度にすぎない寺院がいかなる権利によって公的とみなされうるのか」という問いが、当然のことながら発せられるはずである。その解答は、ケララの人々にあらゆる寺院は「公的」なのか、あるいは寺院には「公的」なものと「私的」なものがあるのか、と尋ねることによっては

得られないだろう。

西川はこの問いによって始められるアルチュセールの議論に示唆を与えられて、「こうした公／私の区分は、近代的な国民国家の法的擬制であり、国民国家のイデオロギーである」という考えに導かれたと述べるのであるが、これはケララの「公共の寺院」の謎を解く鍵にはならない。むしろ「公共性」は、西川がその論考を始めるにあたって問うたように、「私たちは今なぜ公共性の問題を考えようとしているのか、公共性の問題を考えることは何を意味しているか」（西川 2006：160）と問う問題性の中にこそ浮かび上がる概念ではないだろうか。こうした問題を解くために実践的な方向を示しているのが、斎藤が提示している考え方である。彼は「公共的空間は公私の境界をめぐる言説の政治がおこなわれる場所であり、…何が公共的なテーマかはコミュニケーションに先行して決定されているわけではない」と述べて、「公私を分ける境界線は言説に依存する流動的なものであり、言説以前のもの、政治以前のものではない」とする（斎藤 2006：12-13）。すなわち「公共性」を当該社会にあらかじめ存在する所与の観念としてではなく、そうした問題をめぐる政治的活動や言説の中に現れる観念として用いたいのである。

Ⅲ. ケララの公共空間

西欧で、社会的公正と基本的人権の観念を社会を構成する基本理念の中心に置く近代が、セキュラリズム、すなわち宗教の政治あるいは公共的領域からの追放をその必要条件としていたとするなら、ケララにおいても近代は社会的公正と基本的人権を求める下位カーストの運動によって開かれ、それはカースト規制によって排除されてきた「公共空間」の開放を求める要求という形で展開されたということができるだろう。

しかしここで言う「公共空間」は、例えば「(南アジアに) そもそも「公的なもの」がどのような形で存在したのか、しなかったのか、あるいはどのように意識されたのか」という観点からほとんど論じられてこなかった」（粟屋 2002：160）という問題設定の中で求められる、いわば当該社会に存在した所与の観念としてのそれではない。ハンナ・アーレントが述べる意味において、パリーア―すなわち集合的表象の暴力によって公共空間から「場所」を奪われ、私的空間に閉じ込められてきた人々による「排除への抵抗」という政治的価値が、

言葉や行為という形をとって筆者たちの前に現れる空間である（斎藤 2000：iii - v, 強調は筆者）。

アーレントは次のように述べる。「私的」という語が、「奪われている」(deprived) というそのもとの意味合いにおいて重要になるのは、公共的領域の多面的な意義についてである。完全に私的な生活を生きるということは、何よりもまず、真に人間的な生を生きる上で本質的な事柄が奪われていることを意味する。つまり、他者によって見られ、聞かれるという経験…から生まれるリアリティを奪われていることを意味する…他者の視点からすれば、…あたかも存在しないかのようである」（アレント 1994：87-88, 斎藤 2000：iv）。ここに私たちはユダヤ人を思い描いて書かれたアーレントの言葉が、そのままケララの不可触民に押しつけられていた「不可視」というスティグマの説明になっているのを見ることができる。

ケララのアヴァルナ (avarna) カーストは、20 世紀前半まで、不可触であるばかりでなく不可視とみなされていた (Varshney 2002：145)。人々は、サヴァルナ (savarna) カーストの人間が自分と接触するのを避けることができるように、それどころか接近することすらないように、声を上げて自分の存在を知らせなければならなかった。人々はサヴァルナ・カーストの前では、道を降りていなければならなかった。さもないとすればその場で殺されることになったのである (Franke & Chasin 1989：71)。

アヴァルナ・カーストはヒन्दウ寺院に入ることが禁じられ、寺院の池で沐浴することが許されなかった。「公共の」井戸から水を汲むことができず、「公共の」マーケットに行くことが許されなかった。サヴァルナ・カーストの成員から規定の距離以内に入ることを禁じられ、このタブーを破るとその場で殺された。男性も女性も上半身を覆う衣類も布すらも身に着けてはならなかった (ibid.：116)。

アーレントの視点をを用いて、逆に、その場からの排除が、社会で「真に人間的な生を生きる上で本質的な事柄が奪われる」ことになるような場を「公共空間」と定義することができるだろう。公共空間をそのようにそこからの排除が差別を構成しているような場と定義し直すと、下位カーストの運動は公共空間からの「排除への抵抗」という政治的価値を中心として展開されてきたということができる。本稿で用いる「社会的公正」と「基本的人権」という概念もまた、このような意味で定義された「公共空間」に関して、それが誰に対しても

開かれていること（社会的公正）、そしてそこへのアクセスが拒まれないこと（基本的人権）として、言葉や行為という形をとって私たちの前に現れる概念である。

IV. 排除への抵抗

1893 年、アヤンカリという、ケララの最下位カーストであるプラヤの男性が、「公共の」道を牛の荷車に乗って移動した (ibid.: 71)。これはカースト規制によって下位カーストに対して行われてきた、道という公共空間からの排除への抵抗であった。道は、その場からの排除が、人間の本質的価値を否定する「穢れ」という宗教的観念によって正当化され、社会で「真に人間的な生を生きる上で本質的な事柄が奪われる」ことになるような場として、「排除への抵抗」という政治的価値が言葉や行為という形をとって現れた、その意味で「公共の」空間であった。同様に井戸やマーケットもその意味で「公共の」空間だったのであり、そこからの「排除への抵抗」は、「不可触民」に対して幾世紀もの間、無数のカースト規制に従うことを要求してきた、人格的侮蔑と社会的不公正のシステム全体に対する社会的抗議だった。

下位カーストの人々が排除され、「排除への抵抗」として 19 世紀末より 20 世紀前半にかけて抗議運動が行われた「公共空間」としては道とマーケットがあったが、しかし人々がその開放を何よりも特に強く求めた「公共空間」としてヒन्दウ寺院があった。アヴァルナ・カーストはヒन्दウ寺院に入ることを拒否され、下位の神々や様々な邪鬼を信仰することしか許されなかった。無数のカースト規制の中でも人々を聖なる場所から締め出す規制は、ヒन्दウ教の穢れの観念を強烈に象徴していたため、寺院への入場を強行することが、1920 年代、30 年代のカースト運動の主要な目標になったのである。寺院での「排除への抵抗」が数多く行われ、最後のトラヴァンコール寺院入場法への闘争によって 1936 年、ついにトラヴァンコール藩王国にあった寺院はすべてのカーストに開かれることになった (ibid.: 78)。

こうしてその場からの排除が社会で「人間的な生を生きる上で本質的な事柄が奪われる」ことになるような空間、そして「排除への抵抗」という政治的価値が、言葉や行為という形をとって現れた空間を「公共空間」と定義することによって、なぜナーヤルのタラワード寺院が「公共の」寺院なのかという謎が解ける。そしてケララの近代の始まりにおいて、人間

としての尊厳を求める下位カーストの抗議運動が、「公共空間」としての道路や寺院に対する「排除への抵抗」という形で行われたことを理解し、その場をめぐって何が行われてきたのかという問題の本質を、当該社会のみならず人間社会の根源的な問題として考え、議論することが可能になるだろう⁶。

穢れの観念によって正当化されてきた公共空間からの排除への抵抗は、それまで否定されてきた人間としての価値を獲得する運動であり、社会的公正と基本的人権を実現する運動とみなすことができる。しかし人々の運動はあくまで、特に寺院に入るというヴァーナキュラーな（土地固有の）価値の獲得に向かって行われたのであることは、この論文の目的にとっては見過ごしてはならない問題である。このことに関しては、タラル・アサドが『世俗の形成』の中でアメリカの公民権運動について行っている分析が参考になる。

マルコム X の運動が結果として失敗に終わったのに対し、キング牧師の公民権運動が成功を収めたのはなぜか。しばしば問われるこの問いに対するアサドの解答は、アメリカの人種差別制度と類似性をもつカースト制度に対して、ケララの被差別カーストの人々が展開した抗議運動を理解する上で、見落とされがちな問題を提示している。アサドによれば、それはマルコム X が「基本的人権」という普遍的な観念を用いて演説を行い、運動を進めようとしたのに対して、キング牧師はアメリカ国民にとってのヴァーナキュラーな語彙を用いたからである。「キングにとっての正義は、マルコム X の場合と違って、一義的には、世俗の法的概念ではなく、宗教的な概念—救済の概念—である。…キングの深くキリスト教的な言説は、マルコム X が用いる人権の言語と鋭い対照をなしている。それは、マルコム X の言説ほど国家主権主義的でも、普遍主義的でもない、独自のものである。それでいて、まさしくそれがアメリカに向けて発せられたものであるがゆえに（その建国の父祖と支配的ユダヤ＝キリスト教的遺産に訴えかけている）、それはマルコム X がなしえなかったやり方で、アメリカ世論を動かし、変革をもたらした」（アサド 2006: 188-89）。ケララにおいてもまた、社会的公正と基本的人権を求める運動は、何より寺院に入るというヴァーナキュラーな宗教的価値を実現する行動として行われたのであった。

このように「公共空間」は、西欧近代の存立条件を構成するそれとは異なって、そこからの宗教の追放ではなく、その

中心を占める宗教的価値へのアクセスの開放が、社会的公正と基本的人権を獲得するための根源的な必要条件とみなされた。この論文で明らかにしようとする「ケララのセキュラリズム」は、以上のような「排除への抵抗」という形で行われた政治運動の中に現れた「公共空間」を前提としている。宗教実践におけるセキュラリズムという概念が、現代のリベラルな社会についての理念型としてのセキュラリズムの前提からは自己矛盾に見えるのと同じ程度に、ケララの歴史的・社会的文脈において、政治からの宗教の排除というセキュラリズムの理念は意味を成さないものと言える。

V. 公共空間と私的空間

しかしトラヴァンコール寺院入場法が制定されるとすぐに、トラヴァンコールにあった寺院が開放されたわけではなかった。寺院に入ることをすべてのカーストに認めるようにという法律は、トラヴァンコールではすでに 1936 年にトラヴァンコール・マハラジャによって制定されていたにもかかわらず、例えばナーヤルの NK タラワード（母系大家族）が NP バガヴァティ寺院を地域のすべての村人に開放したのは、ようやく 1965 年になってからのことであった。この年、NK タラワードは、すべてのカーストの村人に対して、寺院の祭りへの参加を受け入れることに同意し、祭りのための委員会を設立する決定をした。そして委員会をあらゆるカーストから成る委員によって構成することにした。しかしそれと同時に、タラワードとその 7 つの分枝すべての男性が集まって、タラワードの土地の自分の相続分を寄付し、信託基金を築いた。そしてこの基金が寺院とその財産を所有し、運営することにしたのである。信託基金の設立と運営は、この NK タラワードに限らず、ケララのナーヤルのタラワードの重要な活動の一つとなってきた（川野 2001：22-23）。

このことは、寺院が地域のアヴァルナ・カーストからは彼らを排除する「公共空間」とみなされ、同時にナーヤルのタラワードからはタラワード寺院という「私的空間」とみなされてきたこと、そしてその状態が寺院入場の、あるいは寺院開放の法的命令が出された後も続いたことを示している。いいかえるならナーヤルのタラワードは寺院をタラワードの「私的空間」として確保し、現在もなお公共空間におけるヘゲモニーを行使し続けているのだといえる。公共空間は斎藤が述べるように、まさに公私の境界をめぐる言説のポリティクスの

場であり、公私を分ける境界線は言説に依存する流動的なものであった（斎藤 2000：12-13）。さらにここには、これまでに見てきた公共空間と私的空間の関係の逆転を見ることができる。公共空間から「場所」を奪われ、「私的空間」を生きることを強制されるパーリア、あるいは宗教、身体、家事労働など多くのテーマを「私的なもの」とし、不可視のパーソナルな次元に位置づけることによって自らを定義してきた近代の「公共性」（斎藤 2000：12）、そこにある「公共空間」と「私的空間」の関係がここでは逆転し、公共空間に対する私的空間の優位、あるいは支配という関係が現れる。

アヴァルナ・カーストが社会で「清浄」とされ、「高位」とされるヒンドゥーの神々を祀ることを禁じられなければ、あるいは人々が祀ることを許されている神々あるいは精霊が「穢れた」「下位の」ものとみなされず、それに対する信仰が人間的な生を生きる上で本質的な価値と結びつくことを社会によって否定されなければ、下位カーストの人々がナーヤル・カーストのタラワード寺院の開放を求める必要は生じなかっただろう（もちろんこれではカースト制度は機能しないのであるが、まさにこのような形でカーストのシステムに楔を入れた運動については、次章で見ることにしよう）。つまりタラワード寺院はタラワードにとっても地域の他の人々にとってもタラワードの「私的空間」として合意され、それをめぐるポリティクスは起こる余地がないであろうことを考えれば、再び本稿で定義した「公共空間」の意味が浮上してくるだろう。すなわちそれを奪われていることが人々から真に人間的な生を生きる上で本質的な事柄を奪うことになるような場、それが「公共空間」であり、その意味においてタラワード寺院は公共空間なのであった。

この公共空間は排除によって、社会がパーリアに与えることのできる、そして現に与えている最大の苦しみを与えるのであった。すなわち「彼の存在のリアリティと存在意義を彼自身に疑わせ、彼を彼自身の目から見ても非実在の位置に還元することである」（Arendt 1944：114、斎藤 2000：v）。ヘゲモニーを握る集団による「公共空間」からの排除と独占は、同時に「公共空間」を「私的空間」として囲い込むことでもある。ナーヤルのタラワード寺院の例はそのことを如実に示しているといえるだろう。

VI. 世俗化とカースト運動

19世紀において、宗教的価値によって正当化された包括的な階層システムに対し、「政治的には、確信をもつ能力と行為する能力を奪われた」（アーレント 1972：280-281, 斎藤 2000：vii）パーリアからの「排除への抵抗」を可能にしたのは、西欧と同じ文脈を有する世俗化であった。

序で述べたように、世俗化という概念はさまざまな意味を包み込んでいて、カサノヴァはその内容として政治的領域と宗教的領域の分離、及びその結果生じる、宗教の衰退及び私事化を挙げている。フランスにおけるライシテ（政教分離）研究の第一人者であるジャン・ボベロはこのような多義性と拡大解釈を批判して、世俗化と脱宗教化（ライシザシオン）を区別する必要があると主張する（ボベロ 2009：20）。世俗化とは、「社会のなかで支配的な表象体系が、社会のダイナミズムの複雑なはたらきによって、宗教の支配から抜け出す」ことであり、「宗教の社会的役割の衰退」である。それに対して脱宗教化とは「社会の全体的な規則づけに関して、政治的なものが宗教に対して制度上距離を置くようになる」プロセスを指すとする。そして脱宗教化のプロセスのなかで宗教の私事化が生じる（同：20-21）。

しかし、ボベロによる世俗化と脱宗教化の区分をそのままケララに適用しても、ケララでパーリアの排除への抵抗を可能にした社会的・歴史的な文脈がよりよく理解できるわけではない。なぜなら、これまでの議論によって示されるように、ケララにおいて生じたのは、「支配的な表象体系が宗教の支配から抜け出す」ことでも「宗教の私事化」でもなかった。とはいえ、ボベロが示した議論は参考になる。彼は、ピーター・バーガーらの宗教社会学者による世俗化の議論を引用して、世俗化が最初に起こった場所は経済の領域であり、すなわち社会のなかに宗教から独立した規則によって機能する部門が出現し（つまり世俗的領域が出現した一筆者）、その結果「宗教によって張り巡らされていた社会のさまざまな表象体系の包括性が終焉を迎えた」という（同：15-16）。ケララにおいても19世紀後半、農業の商業化によって形成された、宗教的価値から自律的な世俗的領域によって、伝統的な社会・経済・宗教システムの包括性が終焉した。その世俗的領域を地盤として、下位カーストの社会宗教改革運動と農業労働者の組合活動が展開されたのである。この意味でケララの近

代は、その基盤に西欧近代と共通する世俗化をもつと言えるだろう。

サンドブルックらは19世紀後半、ケララ南部を中心として起こった経済構造と社会構造の変化について記している。それによればこの時期、農業の商業化により近代的な職業の領域が生まれ、主要なカースト・コミュニティ、主要な宗教コミュニティのすべてに裕福な階層が形成された（Tharakan 1998, Sandbrook et al. 2007：75）。彼らはコミュニティの改革と向上を目指す組織を作り、コミュニティの学校や病院に投資した。1890年代にはすでにナーヤル、イラワ、キリスト教徒のコミュニティが、伝統的にブラーミンが独占していた政府の仕事と公立学校の開放を求めて政府に請願していたが、中でももっとも早くから始められ、成功を収めたとされているのが、最大の下位カースト集団イラワから新しく形成された中間層による運動であった（Sandbrook et al. 2007：76）。イラワは伝統的には「ヤシ液採り（及び醗酵酒の製造）」に従事し、その職業も「穢れた」ものとみなされてきたが、19世紀終わりの数十年間の経済変動の中で、伝統的な職業を捨て、カリカットを含むマラバールの都市に大きな商業階層を形成した（Varshney 2002：145）。

カースト運動は、伝統的にカースト・システムの中で割り当てられ、スティグマの貼り付いた職業によって貶められた生を生きてきた人々が、宗教的価値から自律的な職業という世俗的領域の出現による世俗化によって可能になったと言える。世俗的な（あるいは近代的な）教育の獲得と職業の選択という、いわば世俗的な合理性に基づく社会経済的地位の向上によって、イラワの人々は商業階層、すなわち世俗的な集団を形成し、この世俗的領域を地盤としてカースト改革運動は展開されたのである。ここで言う「世俗的な集団」とは、集団を形成する個々の人々が「世俗的」とであるという意味ではなく、社会全体を包括するシステムに意味付けを与える宗教的価値体系から自律的な原理によって機能する集団という意味においてである。

教育と職業の獲得による社会経済的地位の向上は、カースト改革運動の柱の一つとなったが、その政治的運動を率いたのは、ケララのガンディーと呼ばれることになったイラワの聖者シュリー・ナーラーヤナ・グルであった。彼は1903年、社会的、教育的、政治的目標を掲げてシュリー・ナーラーヤナ・ダルマ・パリパラナ・ヨーガム（シュリー・ナーラ

ーヤナ真理堅持協会、略称は SNDP ヨーガム）と呼ばれる組織を設立し、「組織を通じて強く、教育によって自由に」をモットーに活動を展開して、1938 年には 20 万人のメンバーを擁し、526 の支部をもつまでになった (Desai 2002 : 633, Sandbrook et al. 2007 : 76)。

20 世紀初頭、イラワはサヴァルナ寺院から締め出されると同時に、その不浄とされた職業と野蛮で迷信的とされた宗教的行為によっても、不可触性が規定されると考えられていた。イラワは悪魔崇拝や悪魔舞踏、鉤針吊りなどを行うとサヴァルナ・カーストから考えられ、それが宣教師の報告や植民地行政資料によって再生産され、ステレオタイプ化されていた (Osella 2000 : 157)。イラワの運動はこうした「不浄な」職業の廃業、公共空間としての寺院に対する「排除への抵抗」と同時に、自らのカースト・コミュニティの宗教改革運動に向かったが、それらを成功に導いたのは、高位の神々へのアクセスを可能にした聖者の宗教的な力であった。

中でもそれまでイラワに禁じられていた、サンスクリットの神に対する信仰を可能にした、アルヴィプラム・プラティシュタ (アルヴィプラムの聖別) はよく知られている。1888 年のシヴァの祭りの日の夜中、グルはティルワナンダプラム郊外のアルヴィプラムで、大勢の人々が見守る中、川に潜り、30 分後にシヴァリンガムを手にして現われた。これはアルヴィプラムに住むイラワの人々の要請に応じて、ナーラーヤナ・グルが聖別を行い、シヴァ寺院を建立したときの物語であるが、グルの聖別の権威に対するブラーミンたちの異議によって社会に広く知られることになった。この異議に対してグルが答えた言葉は有名である。「これはブラーミンのシヴァではなくてイラワのシヴァなのだ」 (Reghu 2010 : 47, 51)。

このプラティシュタの後、新しい寺院でのグルによる聖別が次々と行われ、それはケララでほぼ 30、タミール、カルナータカ、スリランカでもいくつかの寺院で行われた (Reghu 2010 : 47)。グルはイラワが自分たちの寺院をもち、そこで高位の神々を信仰し、下位の神々への供物である動物と酒ではなく、高位の神々への供物である花と果物を供えることを実現したのである。1916 年、カリカットにイラワの商人たちの資金で、グルの聖別によりイラワのシヴァ寺院が建立され、1918 年、カリカットのイラワ会議はイラワに彼らが入ることを禁止していたすべての寺院をボイコットすることを呼びかけた (Varshney 2002 : 146)。イラワはヒンドゥー寺院での信

仰を禁じられながら、資金と労働の提供を義務づけられていたのである。

ナーラーヤナ・グルの宗教改革運動を、オセラは、インドの他地域の下位カースト運動と同じ、サンスクリット化として理解する (Osella 2000 : 154, 156)。またジャファロットはカースト支配に挑戦する下位カーストのバクティの伝統として理解し (Jaffrelot 2006 : 210)、レグはヒンドゥーのシンボルと用語を用いたヒンドゥー批判と対抗理論のパフォーマンスとして理解する (Reghu 2010 : 48)。どの解釈をとるにせよ、ナーラーヤナ・グルの聖別儀礼が、サンスクリットの神々の超自然力に対する高位カーストの独占を無効にしたことは確かである。そのことはカリカットのイラワが、グルの聖別によって自分たちのシヴァ寺院を建立した 2 年後に、サヴァルナ寺院ボイコット運動を展開したことに表れているだろう。

イラワのカースト運動を実現させたのはこのナーラーヤナ・グルのカリスマ性であったが、ただしここで注意しなければならないのは、オセラが指摘するように、彼のような聖者は、ナーラーヤナ・グルのグルであった聖者を含めてすでにその前に現われ、イラワの寺院を建て、公共の道を歩き、地域のイラワの女性たちに上半身をおおうことを禁じる王の命令を破るようにと指示し、カヤムクラム・マーケットで生地を買って配っていた (Osella 2000 : 157)。ケララにおいて、世俗的な新興勢力による政治運動が同時にカリスマによる宗教運動の形で展開したのは、ナーラーヤナ・グルという特異な人物による歴史的偶然ではなく、文化的な水路を通ったものであったといえるだろう。

それはイラワの人々が伝統的に否定されてきた人間としての尊厳を獲得する運動であり、ケララにおいて「基本的人権」は、このようにヒンドゥー・カーストに独占されてきた、高位の神々へのアクセスを求める行動と言説の中に現れる観念であった。伝統的に外から貼り付けられてきたアイデンティティを払拭し、人間としての根源的な価値を獲得することは、聖者の宗教的な力によって可能になった。しかしレグがバクティ運動の献身との違いとして強調するのは、ナーラーヤナの指導によって建てられた寺院が信仰の場であるだけでなく、組織の会合の場であり、技術学校であり、図書館であったことである (Kumaran 1999 : 148, Reghu 2010 : 48)。その意味で聖者は世俗的運動と宗教的運動の両方を率いたのである。

以上のようにカースト運動はヒンドゥー社会の世俗化によって可能になり、世俗的領域を地盤として展開した、世俗的な合理性に基づいて地位向上をめざす社会改革運動であったが、それは公共空間から宗教を排除するセキュラリズムではなく、新しく形成された領域の世俗的・多元的な価値体系の中でも、その根源的価値が宗教的な力によって獲得されるようなセキュラリズムであった。

終章：対抗的公共空間へ

シュリー・ナーラーヤナ・グルがケララ各地に建立したシュリー・ナーラーヤナ寺院は、公共空間としての寺院から排除された下位カーストの人々に宗教的価値へのアクセスを与えた。レグはグルの新しい寺院は「ヒンドゥー教内に同等の信仰体系」が生まれることにつながるのではないかと危惧したブラーミンの高等裁判所判事の言葉を引いて（Aiyyappan 1965：135）、寺院建立運動は伝統的なヒンドゥーの信仰体系に対する儀礼的批判であると述べているが（Reghu 2010：47）、この判事の言葉は、「オルタナティブな公共空間」あるいは「対抗的公共空間」としてのシュリー・ナーラーヤナ寺院を意味していると考えられるだろう。寺院建立運動が、レグが述べるように何か恐ろしいことの始まりであるとカースト・ヒンドゥーから受け止められたのは、この対抗的公共空間が、公共空間における高位カーストの下位カーストに対する排除とそれによる高位カーストの特権を無効にしたからである。シュリー・ナーラーヤナ寺院はまさに下位カーストの人々の基本的人権と社会的公正を象徴的レベルで実現したと言える。

対抗的公共空間は公共空間における排除を無効にした結果、公共空間の本来のあり方である公共空間の開放を実現した。前章で述べたようにカリカットのイラワは、シュリー・ナーラーヤナ寺院の建立によって初めて、カリカットのヒンドゥー寺院すべてのボイコットを実現した。1936年のトラヴァンコール寺院入場法は、一方で「排除への抵抗」としての寺院サティヤグラハ⁷の成果であったが、他方でグルによる寺院建立運動の成果でもあったとも言えるだろう。

この、公共空間から排除されたパーリアにとってオルタナティブな公共空間の役割を果たし、公共空間からの排除を無効にするような対抗的公共空間の概念は、斎藤純一の「対抗的公共圏」に依ったものである。それは自分たち自身の言

説の空間であり、自分がある場所では肯定されているという感情によって自尊の感情が回復され、自分たちに貼りつけられたアイデンティティなるものに対抗し、異論を提起することを可能にする（斎藤 2000：15）。

1936年、トラヴァンコールでの寺院の開放を促した要因には、シュリー・ナーラーヤナ寺院という対抗的公共空間の出現の他に、キリスト教の存在があった。下位カースト・コミュニティのキリスト教への大量改宗の可能性が、トラヴァンコールの王に寺院開放の決断を促したのである（Osella 2000：158）。ここでもオルタナティブな公共空間としてのキリスト教が、公共空間としてのヒンドゥー寺院の開放を促すのを見ることができる。このケララ南部でのキリスト教と同じ意味で、対抗的公共空間としての役割を果たしたのが、ケララ北部ではイスラム教であった。

この時期にそれまでアヴァルナ・カーストが排除されていた公共空間としての教育の場が開放されることになったのもまた、対抗的公共空間としてのキリスト教のミッション・スクールによるものである。SNDP ヨーガムの広報は次のように論じている。「イラワがカリカットの王が運営するカレッジに入学を許可されないことはよく知られた事実だ。イラワの少年に入学許可を与えたヨーロッパ人の学長は解雇された。地域のミッション・スクールがマドラス大学に格上げになったのはありがたい。ミッション・スクールの生徒の半分はイラワだから。外国人が運営している学校はそうなのだ」（Vivekodayam 7.4 1908：11-12, Reghu 2010, 46）。

そしてまた前章で述べたように近代的職業という伝統的宗教価値から自律的な世俗的領域が、「穢れている」とされる職業を外から押し付けられてきたイラワにオルタナティブな職業を与えたことを考えると、近代的職業の領域も対抗的公共空間とみなされるだろう。ケララ近代は、このようにキリスト教、イスラム教、世俗的領域により形成された対抗的公共空間による、それまで下位カーストを排除してきたヒンドゥーの支配的公共空間の開放への動きとともに始まり、それが現代のケララのセキュラリズムと宗教的多元性を形成していると言えるだろう。

ナンディは、初めに言及した文章のなかで、リベラリズムを立場とするインド人たちが、宗教的寛容で知られるアショーカ大王やアクバル皇帝が「世俗的」であったと主張することに触れてこういう。「この2千年にわたるインドの宗教的寛

容の偉大なシンボルたちは、近代的インド人によって乗っ取られているけれども、近代的ではなかったことを忘れないようにしよう」(Nandy 2002 : 80)。ナンディによれば、アショーカーもアクバルも「世俗的」支配者だったのではなく、それぞれ仏教徒そしてムスリムとして宗教的寛容を実践したのである。ナンディのこの指摘をカナダの哲学者チャールズ・テイラーは次の言葉で引き取る。「共に生きるための公式は多くの異なる宗教的伝統の中で展開してきたのであって、世俗だけが排他的にリアリティを主張するという、近代の、西洋的対概念によって見解を形成されてきた者たちの独占物ではない」(Taylor 2009 : xxi)。

ケララのセキュラリズムも、まさに「世俗だけが排他的にリアリティを主張する」のではない近代の中で現れた。しかし宗教的多元性を実現させているケララのセキュラリズムは、遙かな昔からヒンドゥー文化の中に、イスラムをも許容するものとして存在したものではなく、ケララの下位カーストがその外来のイスラム、キリスト教、そして世俗的領域を対抗的公共空間として、その最も厳しいカースト・システムの高位カーストによる公共空間の独占を破った結果であった⁸。

注

- 1 「ハリジャン」は「神の子」という意味をもつ言葉で、インド「独立の父」ガンディーが反植民地運動の中で不可触民を指す言葉として用いた。ケララでは一般に最下位カースト、プラヤを指して広く用いられる。
- 2 実際には大砲ではなく、2基の大砲の間の地面に埋め込まれた打ち上げ花火を打ち上げる。
- 3 オーナムとアイヤバ信仰の詳細については川野(2008)を参照のこと。
- 4 本稿でケララのセキュラリズムとして扱い、ヴァーシュニーが論じたカリカットのアソシエーション、サンドブルックらが「市民社会」として論じたものは、南アジア研究の分野において「公共圏」などとして論議が行われたものと重なるが、本稿の目的からはこの概念による分析の対象としては扱わない。本稿ではヴァーシュニー、サンドブルックらがその起源と位置づけているカースト運動などを対抗的公共空間として扱うことになるだろう。これが社会の中で公共空間としての位置を占める段階が、南アジア研究で議論されてきた公共圏に相当するといえる。
- 5 ヴァルナ(varna)は「色」という原義をもつ言葉で、ブラーミン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、スードラの4カーストを意味する。サヴァルナ(savarna)はこの4カースト内、アヴァルナ(avarna)はその下を意味する。ケララではブラーミンであるナンブーディリと、クシャトリヤまたはスードラであるナーヤルがサヴァルナ、その下のイラワ(南部)、ティヤ(北部)と最下位カーストのプラヤが不可触であり不可視であるとされ、アヴァルナとされた。

- 6 寺院、道、井戸などにおける排除への抵抗という形でのカースト運動は、ケララだけでなくインド各地で展開された。例えば(内藤 1994) 参照のこと。
- 7 下位カーストによる寺院への入場は、ガンディーによる非暴力闘争の一つとして位置づける意味を込めて、サティヤグラハ「真実の把握」と呼ばれる運動として展開されることになるが、これについては多くの議論がある。
- 8 公共空間と私的空間のポリティクス、対抗的公共空間については、稿を改めて民族誌的事例を提示し、議論を行いたい。

引用文献

- Aiyappan, A.(1965), *Social Revolution in a Kerala Village*, Bombay : Asia Publishing House.
- Arendt, H.(1944), 'The Jew as Pariah : A Hidden Tradition', *Jewish Social Studies*, No.6.
- アーレント・ハナ(1972)『全体主義の起源 2』(大島通義・大島かおり訳) みすず書房。
- アレント, ハンナ(1994)『人間の条件』(志水速雄訳) 筑摩書房。
- アサド, タラル(2006)『世俗の形成』(中村圭志訳) みすず書房。
- 粟屋利江(2002)「南アジアにおける「公共圏」・「市民社会」をめぐる研究動向」『南アジア研究』第14号 : 145-168.
- ボベロ, ジャン(2009)「世俗化と脱宗教化」(伊達聖伸訳)『世俗化とライシテ』東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」。
- カサノヴァ, ホセ(1997)『近代世界の公共宗教』(津城寛文訳) 玉川大学出版部。
- Chakrabarty, D.(2000), *Provincializing Europe*, Princeton : Princeton University Press.
- Dempsey, C. G.(2001), *Kerala Christian Sainthood*, Oxford : Oxford University Press.
- Desai, M.(2002), 'The Autonomy of Party Practices in India, 1934-1940', *American Journal of Sociology* 108 : 616-57.
- Franke, R. W. and B. H. Chasin(1989), *Kerala : Radical Reform as Development in an Indian State*, Monroe : The Institute for Food and Development Policy.
- 長谷部恭男(2000)『比較不能な価値の迷路』東京大学出版会。
- Jaffrelot, C.(2006), *India's Silent Revolution*, Delhi : Permanent Black.
- 川野美砂子(2001)「ケーララ州ナーヤル・カーストにおける家族の変容」文部省科学研究費・特定領域研究(A)「南アジア世界の構造変動とネットワーク」Discussion Paper No.15.
- (2009)「南インド・ケララにおける宗教的多元性」『東海大学総合教育センター紀要』第29号 : 59-86.
- (2010)「集合的記憶装置としてのjaram(1)」『東海大学紀要海洋学部』Vol.8 No.1 : 印刷中。
- Kumaran, M.(1999), *Sree Narayana Guru Swamikalude Jeevacharithram*, Varkala, Sree Narayana Dharma Sangham Trust.
- 内藤雅雄(1994)「マハーシュトラにおける不可触民解放の思想と運動」『解放の思想と運動』明石書店。
- Nandy, A. (2002), *Time Warps*, New Brunswick : Rutgers Taylor University Press.
- 西川長夫(2006)『〈新〉植民地主義論』平凡社。

- Osella, F. and C. Osella(2000), *Social Mobility in Kerala*, London : Pluto Press.
- Reghu, J.(2010), ‘‘Community’ as de-imagining nation’, Raman ed., *Development, democracy and the state*, Oxon : Routledge.
- 斎藤純一 (2000)『公共性』岩波書店.
- 関根康正 (2006)『宗教紛争と差別の人類学』世界思想社.
- Taylor, Charles (2009), ‘Foreward What is Secularism?’ , Levy and Modood ed., *Secularism, Religion and Multicultural Citizenship*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Tharakan, M. P. K.(1998), ‘Socio-religious Reform Movements, the Process of Democratization and Development’, Rudebeck, Tornquist and Rohas ed., *Democratization in the Third world*, 144-72, Houndmills : Macmillan.
- Varshney, A.(2002), *Ethnic Conflict and Civic Life*, New Haven : Yale University Press.

メキシコ革命期の芸術

—— 壁画にみるラテンアメリカの文明的問題 ——

吉田晃章 東海大学文学部アメリカ文明学科講師

The Art at the Time of Mexican Revolution: Some Problems of Latin American Civilization in Mural Paintings

Teruaki YOSHIDA

Junior Associate Professor, Department of American Civilization, School of Letters, Tokai University

The year 2010 will be the centennial of the Mexican Revolution. This event, like the Cuban Revolution, came upon the historical current of Latin America not only within the social and political contexts but also through personal identity. In the 1920's, a new artistic movement was born: Mexican mural painting. It played an important role in Mexican history. This movement was initiated with a call by the Education Minister, José Vasconcelos, who considered *mestizo* as a universal race (*raza cósmica*). The three mural painters, Diego Rivera, David Alfaro Siqueiros and José Clemente Orozco, carried out their project of the mural paintings. They had different intentions, Diego insisting on *indigenismo*, Siqueiros demanding social security for labor, and Orozco representing the ambiguity in the interpretation of history. They didn't regard the Mexican event as national subject matter, but painted them as an international theme. Although it has been thought that the mural paintings functioned as nationalist propaganda, this movement possessed a cosmopolitan character and presented the problems of civilization as related to the identity of Hispanic and Latin American peoples. Analyzing their works about the revolution, we should reconsider the purpose of the mural paintings, how the tradition of new mural paintings arose and still lives on in Hispanic culture, and what the paintings mean to modern society. To answer these questions, I give a brief outline of the independence movements of Latin American nations and the Mexican revolution in particular because these events are themes frequently depicted. Since Latin America has been positioned at the periphery of European civilization since the 16th Century, discussion of the mural paintings deals with the problem of the civilization in developing countries.

Accepted, Dec. 20, 2010

1 はじめに

2010 年は、メキシコのドローレス村で、イダルゴ神父 (Miguel Hidalgo) が、メキシコ独立運動を呼びかけてから 200 年、またマデロ (Francisco Madero) が「サン・ルイス・ポトシ計画」で 1910 年 11 月 20 日に蜂起を呼びかけ、メキシコ革命が開始されてから 100 年となる。メキシコ革命も、キューバ革命同様、後のラテンアメリカの動向を左右する重要な出来事であった。その影響は政治にとどまらず、経済や社会、文化や思想、アイデンティティの問題にまで多岐にわたっている。このため 2010 年は、ラテンアメリカの歴史を振り返るうえでも、節目の年であろう。また、日墨関係から見れば、2009 年から 2010 年にかけて交流 400 周年を迎える¹。本稿では、この革命期に現れた壁画運動に目を向けその意義を検

討してみたい。このことはまた、長い年月を経て、2008 年に渋谷駅構内で公開された岡本太郎の壁画にまで繋がる一連の確立した表現形態として壁画を再評価することにつながる。この意味でも、メキシコ壁画を捉えなおすことは重要であろう。

では、メキシコ壁画運動は、どのような意味を持ち、実際に描かれた壁画から、何が読み取れるだろうか。まずは、壁画にもしばしば描かれるラテンアメリカ諸国の独立、そして 20 世紀世界の社会革命に先駆けておきたメキシコ革命について概観する。なぜなら、ラテンアメリカの現代壁画制作の草創期は、革命期であり、意図して作られた芸術運動としてメキシコに端を発しているからである。つづいて、初期壁画制作に関係の深い四人を挙げて、上述の問題について考察していきたい。一人は、壁画制作の支援者だった当時の文部大臣バスコンセロス (José Vasconcelos) である。残る三名は壁画の三大巨匠オロスコ (José Clemente Orozco)、リベラ (Diego Rivera)、シケイロス (David Alfaro Siqueiros) である。この問題を考察することは、世界史への登場以来、常にヨー

本論文は、『文明』投稿規定に基づき、複数レフェリーの査読を受けたものである。原稿受理日：2010 年 12 月 20 日

ロツパの垂流として文化的周辺に位置づけられ、時代に翻弄されてきたラテンアメリカの人々のアイデンティティの問題に関わり、同時に現代の文明に対する強烈な問いを扱うことに繋がる。まずは、社会背景としてメキシコの独立からみていきたい。

2 ラテンアメリカ諸国の独立とメキシコ革命

スペインによる征服に始まる植民地支配からの独立は、新大陸生まれの白人クリオーリョ (criollo) を中心として達成された²。これが、ラテンアメリカ諸国の独立を特徴づけている。植民地時代、新大陸の官僚や教会機構の要職は、スペイン本国から送られてくるペニンスラール (peninsular) によって独占され、クリオーリョらは国家の政治指導者への道をほぼ閉ざされていた。このような状況に加え、本国の介入によって植民地の自由貿易が阻まれていたこと、1789 年のフランス革命後に「自由主義思想」が新大陸に浸透してきたことなどを背景に、19 世紀はじめにラテンアメリカ諸国では、独立の気運が高まっていく。独立の戦いは、官僚機構をクリオーリョに開放し、彼らの手に政治的主導権を移譲させることを目的としていたが、封建的な貴族階級に属する彼らは社会構造を根本的に変革するようなことはしなかった。ノーベル文学賞を受賞したメキシコを代表する詩人・批評家のオクタビオ・パス (Octavio Paz) は次のように記している。「彼らはスペインと決裂したが、近代的な社会を創る能力に欠けていたのである。独立運動を牛耳ったグループは、新しい社会の力とはなりえず、やむを得ぬことであったが、彼らは封建体制を延長するより他に、なすすべを知らなかったのである。新生イスマノアメリカ諸国の新しさは、偽り」³である。ラテンアメリカは、各地に存在していた少数の有力政治家によって、多くの共和国に分割された。つまり、「新しい諸共和国は、当時の政治および軍事的な必要性から捏造されたもので、真の歴史的な特色を表す必要性からの誕生ではない」⁴。独立は、国民を主体として取り込むどころか、ラテンアメリカの多くの人々の歴史的な社会格差や労働状況、さらには精神的隷属状況を自由主義や国家独立の言葉で隠蔽したのである。民衆の自立や労働状況の変革に端を発した独立運動は、国の新たな支配勢力となるクリオーリョによって体制維持のための本国からの分離独立にすり替わった。

国民の政治と社会への不満は、ポルフィリオ・ディアス

(Porfirio Díaz) 政権 (在任 1877-1880 年, 1884-1910 年) 下で爆発する。ディアス大統領は、ベニト・フアレス (Benito Juárez) の改革後⁵、自由主義の立場をとり封建的な過去を捨て、国民に近代化を推進するものとして好意的に受け入れられた⁶。当時の流行であったコント (Auguste Conte) の実証主義やスペンサー (Herbert Spencer) の社会進化論、ダーウィン (Charles Robert Darwin) の進化論的進歩思想の影響を受けて、「科学主義者 (científico)」を政治に登用し、秩序と進歩、物質的な繁栄、白人優位の風潮、ヨーロッパをモデルとした科学による産業の発展や自由貿易による世界経済での躍進を信じ、三十年以上におよぶ独裁体制を敷いた。この間、外見上政治的安定と経済発展をもたらしたが、この体制は、外国資本による経済支配 (石油、鉱物、鉄道など) を招き、特権階級による政治の独占を認め、輸出用作物を生産する大農園主を保護した。しかし、当然の帰結として国内の貧富の格差は一段と開いた⁷。つまり大衆にとってディアスは、「植民地時代の封建主義の継承者」以外の何者でもなく、彼の統治は「発展、科学、共和国の合法化という衣裳で飾りたて、仮面をつけた過去が戻ってきた」⁸にすぎなかった。

1910 年、問題の根源であるディアス独裁体制の打倒をめざして蜂起が起きる。マデロの計画に応え、北部ではビジャ (Francisco Villa) やカランサ (Venustiano Carranza)、南部ではサパタ (Emiliano Zapata) らの地方領袖 (カウディージョ Caudillo) が武装蜂起した⁹。蜂起の拡大とともに、ディアスは 1911 年 5 月パリに亡命し、11 月にはマデロが大統領に就任した。その後、領袖たちの覇権争いに勝ち残ったカランサが、1917 年に大統領に就任し、1917 年憲法が制定された¹⁰。メキシコ革命は、実証主義の「科学主義者」を行政から追い出す政治的な革命に留まらず、農奴の要求にこたえる農地改革をも目指した社会的経済的革命であり、また文化的革命でもあった。農地改革を一番重視していたサパタ派が征服以前に見られたカルプリ (calpulli)¹¹ による土地所有をメキシコの経済的、社会的基礎にしようとしたことは、先住民の過去からの再出発を試みることであった。その後、カランサに続く大統領らは、憲法上の諸改革を推進し、農地改革や社会福祉、さらには公教育に力をそそいだ。

革命後の政府は、それまで教会に委ねられていた教育を、公教育とする教育改革に着手した。「学校局」、「図書館局」、「美術局」が設置され、当時国民の 80% は読み書きが可能な

かったため、識字教育が優先された¹²。そのため人手不足から多くの国民ボランティアを含む文化普及団が僻地に送り出された。また、芸術教育も広く普及され、アトリエや大きな施設を必要としない野外美術学校などがつくられた。壁画制作は、「自国の歴史や革命の意義を伝える唯一の、また最も効果的な手段」¹³であり、多くの人々が携わった。

識字教育や芸術教育の観点から先住民が救済の対象となり、先住民文化が注目を集める中、インディヘニスム（Indigenismo）は、当時の社会に大きな影響を与えていた。壁画運動とも密接に関連するインディヘニスムとは、「先住民の存在と歴史に自国のアイデンティティを求める運動」¹⁴で、その言葉はペルーの思想家マリアテギ（José Carlos Mariátegui）によって1920年代に命名された。彼はその運動の主目的は土地の奪回であり、先住民共同体の積極的な再建であると規定した¹⁵。土地の奪回と先住民共同体の再建がからんだインディヘニスムを狭義のインディヘニスムと呼ぶが、これは、ペルー、メキシコ、ボリビアなど、先スペイン期に高度な先住民文化が発展していた地域で、活発に展開されただけであった。しかし、1940年代に入るとメキシコでインディオ固有の文化と伝統を掘り起こして見直すという広義の意味でのインディヘニスムが展開され、国民統合を目指すことが議論された。近代化とともにインディヘニスムはラテンアメリカ諸国全体で取り組まれるようになった¹⁶。このような世界史的な動きの中、壁画運動が展開されていくのである¹⁷。

3 壁画運動

壁画運動とは、メキシコ革命後、公共建造物の壁に革命やメキシコ史に関連するテーマを描き、長期にわたり大衆に歴史的事象の意義を伝える芸術活動であった¹⁸。オロスコ、リベラ、シケイロスといった画家たちが、その活動の中心的な役割を担った。その目的は、「①インディオたちのもつ伝統的な美的感性の再評価、②従来の画家個人の表現の結果である作品と対極的な民衆の共同表現となる作品の創造、③すべての社会大衆が共有できる反ブルジョア的絵画様式の確立、④新技法と新素材を開発し革命後の社会にふさわしい新しい絵画制作の方法の探究」¹⁹であった。また壁画運動など当時の芸術運動を総称し、メキシコ・ルネサンス（The Mexican Renaissance）とも呼ばれている²⁰。メキシコ・ルネ

サンスは、「地下に生き続けていたメキシコ民族的なものが、植民地時代に土着文化を圧倒していたヨーロッパ文化をふりはらって地上に踊り出、一斉に開花した文化現象」²¹であるだけでなく、「西欧的現代芸術そのものまで」も改革しようとする運動でもあった²²。

3-1 ホセ・バスコンセロス（José Vasconcelos : 1881-1959）

革命の文化的な面を支えたのは、メキシコ近代教育の創始者ともいわれるオブレゴン（Alvaro Obregón）政権（1920-1924）の文部大臣バスコンセロスであった²³。彼は、次世代の思想家として、革命後の新たな時代にふさわしい芸術を模索し、壁画運動や野外美術学校などさまざまな文化活動を支援、展開していく。彼は、メキシコ革命がメキシコ近代国家の開始時期であり、国民文化の創成期として、広くメキシコ人一般に認識されるきっかけを作った立役者といってもよいであろう。1922年、バスコンセロスにより国立高等学校の壁面が、壁画家たちに提供された。彼は、フスト・シエラ（Justo Sierra）が始めて取り組んだ初等教育の普及や高等教育の専門化の政策を踏襲し、白人優位を認める「科学主義者」が重視しなかった国民に対する平等な、伝統的な原則に基づいた教育を実現しようとしたのである。そのため、彼は、芸術家や建築家、教師らと協力し、組織的に壁画運動に始まるさまざまなプロジェクトを展開し、革命の成果を等しく民衆に提供する社会的な活動に尽力した。彼の教育政策を支えていたのは、「大陸を一つの優れた統一体」として考え²⁴、「スペインの伝統に戻ることは、イスパノアメリカの統一体へ復帰することに他ならない」²⁵とする彼独特の思想であった。そして人種的にも、メキシコならびにラテンアメリカにおけるメスティソなどの混血人種こそ、将来を担う「総合人種」であり、「世界人種（Raza Cósmica）」²⁶であると彼は考えた。バスコンセロスは「新大陸において、ラテン人の手によって、地上のすべての人種の血が混ざりあい、第五の人種、世界人種が生み出される」²⁷と主張し、懐古主義に陥らず、将来のラテンアメリカ人の可能性に目を向けていた。このような彼の「世界人種」に基づく思想は、これまでのラテンアメリカにおける「負」の価値を転換し、狭い意味ではメキシコのアイデンティティとして、広い意味では歴史を共有するラテンアメリカのアイデンティティとして重要なものとなった²⁸。

バスコンセロスは、国のプロジェクトとして、壁画運動の

受け皿を作ったが、壁画家たちは、そこに何を描いたのだろうか。メキシコ革命を扱った壁画を中心に、三大壁画家の作品について見ていきたい。

3-2 ディエゴ・リベラ (Diego Rivera : 1886-1957)

リベラは、1907年から1921年、まさに革命前夜から激動の革命期、ヨーロッパに留学していた。このことは、リベラの作風に大きな影響を与えている²⁹。帰国後、彼はすでに起きていた壁画制作の動きにのり、1922年に国立予科高等学校の壁画、1923年から1928年にかけて文部省の壁画を作成した。メキシコ史をテーマにした彼の壁画は、歴史上の人物で埋め尽くされており、先住民に対する共感から古代の情景も生き生きとした色彩で、美的に描かれている。1929年には、先住民の血を引くフリーダ・カーロ (Frida Kahlo) と再婚し、これを機に一層インディヘニスモに傾倒する。1929年には、大統領宮に『メキシコの歴史』を手がけ、1930年にはクエルナバカのコルテス宮殿に『クエルナバカとモレロスの歴史』を完成させた。これらの壁画には、革命に関わる場面があるので、各壁画を詳解したい。

まず、メキシコシティの大統領宮殿に描かれた『メキシコの歴史』は、リベラの代表作として最も良く知られる壁画の一つである。この壁画は1929年から1935年にかけて作られたもので、三壁面から構成されている。西壁面には、「征服から1930年代まで」、南壁面には「メキシコの今日と未来」、北壁面には「アステカ世界」が描かれている。中央の西壁面が、一番広く、画面の下三分の二が植民地時代に当てられている。建築構造上、上部三分の一は、五つのアーチで壁画が区画されており、北から「アメリカの侵略」、「改革とフアレス時代」、「独立運動」、「ディアス独裁時代」(図1)、「フランス干渉とマクシミリアン皇帝時代」が描かれている。「独立運動」の中心には、イダルゴが描かれ、イダルゴの右には独立運動を引き継ぐモレロスらが描かれている。「ディアス独裁時代」には、北部のチワワ州の領袖ビジャとコアウィラ州のカランサが描かれている。先住民の土地問題を解消すべく提示した「アヤラ計画」を手をしているのがサパタであろう。さらにサパタと思しき人物は、中央の「独立運動」の画面に「土地と自由」という赤い横断幕を持って登場する。

次に、『クエルナバカとモレロスの歴史』にも、サパタが描かれているので、見てみたい。この壁画のテーマは、征服か



図1 リベラ『メキシコの歴史』(部分：ディアス独裁時代)
1929-1930 / 1935年 フレスコ メキシコ・シティ、国立宮殿
[Rivera: Historia de México. Palacio Nacional, Ciudad de México]
著者撮影

ら1911年までのサパタによる農民革命までの地方史である。サパタの登場する壁面は約2.5×2.5mで、壁面は中央の通用門で大きく左右に分けられている。画面左下には、手綱を引くサパタと農民ら、その上には、子供を負ぶり移動していくと思われる女性たちの後姿、また最上部では農民たちが拷問を受け、処刑されている様子が描かれている。サパタと白馬、更にそれに続く農民が画面の半分を占めており、壁画の主題となっている。右手に鎌を手にしたサパタの背後には農民が描かれている。サパタも彼らと同じ白い農民の服装で描かれてはいるものの、サパタと白馬の白は透明感があり、鮮やかに描かれている。サパタは、外光が差す壁面に位置し、白がいつそう画面に映える。農民たちは、裸足にワラッチェ(サンダル)を履き、白い帽子をかぶり、手には弓矢や鋤のような武器を持ち、サパタの後に続いている。一方、サパタの足元には、政府軍の軍人が倒れて死んでおり、サパタは軍人のサーベルを踏むような姿で立っている。

さらにディエゴは、1948年、ホテル・デル・プラドの壁画『アラメダ公園の日曜日の午後の夢』にも、サパタ派を描いた。また、彼はこの壁画に「神は存在しない」と言うプラカードを描き込み、カトリック信者から非難を浴びた。画面中央には「死者の日」に登場するカトリーナと呼ばれる骸骨婦人がおり、彼女と腕を組んでいるのが骸骨の諷刺画で有名なポサダである。カトリーナの左に並んでいる子供がリベラである。この画面に登場する人物は、リベラの関係者、アラメダ公園で見かけることのできる人物さらに歴史上の人物である。紙数の都合上、革命に関係のある歴史上の人物のみ取り上げると、画面右上には、まじめな面持ちで国旗を持ち、左手で帽子を

取って挨拶するマデロが見て取れる。木を挟んでマデロの左側には、革命の一場面が描かれている。馬上のサパタもしくはサパタ派の人物の直下では、サパタ派の一人がやや陰しい表情で、政府軍の兵士を撃ち殺している。その右には、「土地と自由、サパタ万歳」と書かれた旗が見られる。

リベラの作品には、『メキシコの歴史』のように、時代ごとに歴史上の人物が肖像画として描かれ、イーゼル画の集合体のように小さな絵が画面狭しと並んでいる壁画が多い。革命以前では、取り上げられなかった先住民の日常を描いた作品も目立ち、その作風には、先住民に対する彼の共感が表れている。

3-3 シケイロス (David Alfaro Siqueiros : 1896-1974)

シケイロスは、外国の干渉を排除しようとするカランサを支持し、1915 年に入隊する³⁰。その後武官として西欧に派遣され、1919 年パリでリベラと革命における芸術の役割について語り、公共美術としての壁画の重要性を再認識する。1922 年に帰国し、バスコンセロスの要請で、国立高等学校の壁画プロジェクトを推進する。また 1923 年には共産党幹部に選出され、1925 年から 1930 年にかけて制作活動を中断し、鉱山のストライキを指導するなど労働運動へ力を注いだ。その扇動的活動から逮捕される。1932 年からはアメリカや南米に渡り、列強国による搾取を描き、労働者の組織化を目指したが、各国で強制退去となる。また、1935 年仲間への自己批判を迫り、「メキシコ革命を共産主義革命の一つとして捉え、マルクス-レーニン主義を参考としつつ社会主義国家建設の日まで革命運動を続行することをめざし、西欧主導型の国際的な現代美術の流れを変えること、その際メキシコ人の内発的な創造性を促す契機としてインディヘニスマは有効だが、それが最終的な目的ではない」³¹と主張した。「芸術の革命」を壁画活動の目的と標榜していたシケイロスは、1936 年ニューヨークで「シケイロス実験工房」を設立し、新しい壁画にふさわしいピロキシリンなどの化学塗料や新たな画材の研究に取り組んだ。

彼はリベラのように、先スペイン期のインディオの世界には、関心を示さなかったが、そのような彼も征服者に最後まで抵抗を試みたアステカ最後の王クアウテモック (Cuauhtémoc) だけは、壁画やタブロー画の主題として繰り返し描いている³²。1957 年から 1966 年にかけて、国立歴史博



図2 シケイロス『ディアス独裁体制から革命へ』(部分) 1957-66 年 アクリル メキシコ・シティ、国立歴史博物館「革命の間」 [Siqueiros: Del Porfiriato a la Revolución. Revolución, Museo Nacional de Historia, Ciudad de México] 『図録メキシコ・ルネサンス展オロスコ、リベラ、シケイロス』、参考図39, p.185-186, 名古屋市美術館・西武美術館1989.

物館の革命の間で『ディアス独裁体制から革命へ』(図2) という大作に取り組み、完成させた。この連作の中の一つに、疾走する白馬に跨る人物が描かれている。これは、クエルナバカに描かれたリベラの白馬の手綱を引くサパタを想起させる。シケイロスは、馬上のサパタをリトグラフで残しているだけで、革命に登場する領袖は、壁画で明確に表現されていない。それに対し、革命が打倒を目指したディアスと彼の取り巻きが、社交場で踊る女性を見ている場面が描かれている。その左の壁面には、「革命の序曲としてのカナネア鉱山ストライキ」(図2) が描かれ、労働者や民衆の一群が大挙する様子が表されている³³。彼の作風である躍動感あふれる画面構成は、視点が動くことによって、描かれたモチーフに動きが生じ、平面的な壁画に動的な要素を加えている。

壁画を通じ、彼の作品を特徴付けているものは、人物や描かれたものが画面から飛び出すような立体感であり、強調された遠近法による迫力ある空間表現である。力強い描線で労働者や農民など、大衆から生み出されるエネルギーを渦巻くような曲線をつかって、動的に表現している。シケイロスは、ビジャヤカランサなど革命の英雄を取り上げ、壁画として描こうとする姿勢はほとんどなく、大衆、労働者、農民など人々の集合体を英雄として捉え、無数の人々が群集として画面上に登場する。群集のうねりや情動が、ダイナミックな筆致で描かれ、描かれた各人物には、個人的特徴を有す

るものが少ない。革命の領袖として特定できる数少ない人物像は、リトグラフによる馬上のサパタで、初期の作品で、素朴な作風となっている。

3-4 ホセ・クレメンテ・オロスコ(José Clemente Orozco : 1883-1949)

オロスコは、農業経済学を学んだ後、1908年には国立サン・カルロス美術学校に入学した³⁴。ヨーロッパから帰国したばかりのヘラルド・ムリリョ(Gerardo Murillo, 自称 Dr. Atl³⁵)から壁画の影響を受ける。オロスコは、美術学校付近の印刷工房で、骸骨を使った版画で社会を風刺するポサダ(José Guadalupe Posada)らの仕事をみて、社会へ訴える表現手段としての絵を学んだ³⁶。また壁画は、リベラやシケイロスによってそのアイディアがもたらされたのではなく、壁画の構想は、メキシコ革命とも関連せず20世紀にはいつてから、アトルをはじめとするオロスコなどの芸術家を中心に徐々に練り上げられたものであったとも言われている³⁷。革命中は、カランサ派を支持するアトルの影響を受け、挿絵や諷刺画を描いた³⁸。革命後、民主化を歓迎するアメリカと文化面で関係の改善がみられ、オロスコは1917年から一年間アメリカに留学した。帰国後、大衆に美術教育をもたらす実践的な場として設けられた野外美術学校の運営に参加した³⁹。オロスコもバスコンセロスの支援をえて、1923年から1924年にかけてメキシコ・シティの国立高等学校で壁画制作を行った。そこには、革命に関する連作が描かれたが、中でも『塹壕』(図3)が有名である。銃によって生まれる直線が作り出す三角形、腕のラインが作り出す構図、その中に描かれるのは、塹壕に倒れこんだ二人の兵士と泣き崩れる兵士である。

その後オロスコは、オリサバ労働者教育センターの壁画『社会革命』を制作した。この『社会革命』には、サパタ党员が描かれている⁴⁰。ここにサパタは登場しないが、壁面中央の窓枠上部に、十名弱のサパタ党员たちが描かれ、画面の下方に、浅黒い肌の女性たちが抱き合い慄き、恐怖に怯える様子が描かれる。

オロスコは革命を描く際、サパタのような革命の英雄も登場させるが画面の主題は、名もない民衆であり、彼らの苦難であった。1924年、プルタルコ・エリ阿斯・カジェス(Plutarco Elías Calles)が大統領に就任し、教会の政治権力が大幅に制限された。1926年には外国僧職者は追放され、カトリック



図3 ホセ・クレメンテ・オロスコ『塹壕』1926年 フレスコ メキシコ・シティ 旧サン・イルデフォンソ学院(旧国立予科高等学校)
[José Clemente Orozco : La Trinchera. Antigua Escuela Nacional Preparatoria, Ciudad de México] 筆者撮影

系学校や僧院等が閉鎖されることが布告され、クリステーションと呼ばれる戦闘的なカトリック信者が反乱を起こした⁴¹。反カトリック的、また反宗教的壁画を描いてきた壁画家たちは、カトリック教徒つまりは多くのメキシコ人の反感を買い、壁画運動は中断せざるを得ない状況に追い込まれる。事実上、国内で壁画を描く機会を奪われたこの期間、オロスコは1927年からアメリカ合衆国に滞在し、『アメリカ文明の叙事詩』等を表し、国際的評価を得る。この間、彼はインド独立を支援する運動を主催していたアルマ・リード(Alma Reed)と交流し、革命の経験を国際的な視野で再認識したのだった⁴²。そしてオロスコは、インドの指導者をテーマとした壁画『ガンジー』を1930年ニューヨークに残している。彼はラテンアメリカの歴史的な問題だけでなく、第三世界の問題を表現する手段としても、同様に壁画を用いたのだった。帰国後、グアダハラでは、一層批判的に革命後の社会を描き出し、グアダハラ大学の講堂に『創造的な人間と創造者』『民衆と偽の指導者』を制作、グアダハラ市庁舎の階段天井部分と壁

面を利用し『イダルゴ』を中心とした作品を完成させた。

彼は、亡くなる前にグアダラハラの政庁舎に、もう一つのイダルゴの壁画を残した。先に描かれた作品『イダルゴ』は、1937年に政庁舎の階段天井部分のもので、イダルゴは、独立を目指し、人民を導き、自らの信念に燃え、恍惚とした表情で描かれている。晩年の壁画『イダルゴ、偉大なるメキシコ革命憲法と奴隷解放』は、1948-1949年にかけて、グアダラハラの政庁舎議事堂の丸天井に制作された。イダルゴや革命の領袖が描かれた壁画である。イダルゴの横顔は、眉間にしわを寄せ、悲しみに満ちた表情で描かれ、右手にはペンを持ち、「自由」という言葉を記している。周囲には、五人の奴隷たちが鎖や鉄条網などで、縛られている姿が配されている。イダルゴは、モノトーンを基調に描かれ、奴隷との間は赤で塗られている。さらに、壁面部の中央には、改革と書かれた書物を記したフアレスが描かれている。フアレスの右には、イダルゴの遺志を継ぎ、独立闘争を引き継いだモレロスが描かれ、さらに左には、カランサ、サパタが描かれている。

諷刺画から出発しているオロスコであるが、農業技師や測量を学んだその経歴からも、彼の作風は、計算された構図を重視したものとなっている。そのため巨大な壁面に描かれる対象は、主要な人物または主題であり、表現主義的にモニュメンタルに描き出されている。とくに人間の四肢が作り出すラインを多用している。

三人の壁画家が革命に対していかに考え、表現したのか考察していきたい。

4 考察

彼らは、革命後のラテンアメリカや合衆国で壁画制作を行ってきたが、メキシコ革命をどのように捉えているのであろうか。

まずリベラの『メキシコの歴史』では、ビジャはやや微笑を浮かべ、マデロとカランサは証明写真のようにあまり表情がなく描かれている。「独立運動」と「ディアス独裁時代」にはサパタ像が表されているが、いずれか一方はサパタで、残る人物がソンプレロと服装などから見ても兄のエウフェミオ（Eufemio Zapata）またはサパタ党员であることは間違いないであろう。いずれの人物もほぼ胸像として描かれ、ディエゴの得意とする肖像画である。

この壁画は、ポートレートが並び、ただ人物が列挙されて

いく。見るものの視点は、空間を埋めるようにびっしりと描かれたメキシコ史に登場する人物を追い、キャンバス画と同じように肖像を確認する。

クエルナバカの壁画は、政府軍の兵士が足元に倒れていることから、革命に参加しているサパタを描いたと考えられる。そのため農民らが武器を携えて、サパタに続いているのであろう。実際に、サパタが白い服を着て、白馬を連れていたかどうかは定かではないが、農民との一体感を抱かせつつ、サパタを崇高な存在として描こうとするリベラの思いが、この白で表現されているのであろう。さらに日光にあたりその白が際立つようにレイアウトされているのである。

『アラメダ公園の日曜日の午後の夢』において、「土地と自由、サパタ万歳」と書かれていたが、カランサやビジャは描かれることがない。それは、革命が北部の大地主を中心とするカランサ派と中間層を中心とするビジャ派の争いに、展開していくからであろう⁴³。リベラは、インディヘニスモ的土地問題から革命に関わったサパタを讃えるとともに、革命を肯定的に捕らえ、インディオ文化への共感を示している。彼は、読み書きのできない先住民たちの歴史を、生涯を通じ壁画に描き出した。それは民衆が実感することのできない、特権階級やエリート政治家が作り出す虚偽に満ちた観念的國家に対する挑戦であり、またメキシコに暮らす人々がみな等しく歴史を内在化できるようにするための試みであった。まさにそれは国民が参照する人物のポートレート写真が載った事典や年鑑のようなアルマナック的壁画であり、見ればわかる歴史絵巻であった。

これは、石井が記しているように、「リベラがその壁画を通して「肖像をかぎりなく集めてひとつの枠＝フレームワークのうちに収めることで、`国民＝ネイション nation」という集団を表象できる」というテーゼを提起している」<sup>44</sup>からであろう。さらに、石井は、アメリカ合衆国でトランスナショナルな新しいアメリカ人像が求められる時代、リベラの「`国民、の表現のためのレトリックが、ニューディールの時代のアメリカ合衆国にきわめてふさわしいものとして受け入れられた」とも述べている⁴⁵。ただ、ここで注意すべき点は、この時期のメキシコにおける文化とナショナリズムの問題である。革命期をメキシコで過ごしたドミニカ人の思想家ペドロ・エンリケス・ウレーニャ（Pedro Enrique Ureña）は、メキシコが自らの文明を創造する道具に「文化とナショナリズム」を用いたと

述べているが⁴⁶、メキシコ人が理解する「文化とナショナリズム」は、19世紀の文化やナショナリズムではないと主張する。メキシコ人が、「思いを馳せるのは、自由主義を装った資本万能の時代を支配した文化」、「排他的な好事家の文化」などではなく、「すべての人が参加してすべての人に真に開かれた文化、単になにを知るかに留まらず同時に何を成すかを学ぶ作業に基づく文化」である。また「ナショナリズムにしても政治的なもの」ではなく、「メキシコ人が考えているのは、精神的なナショナリズム、すなわち芸術と思想に表現される各民族の資質から生まれるナショナリズム」であるとしている。結果として、国民文化の創出に影響を与えたであろうが、その政治的な問題性について認識しながらも、壁画家たちが壁画制作に携わっていたことは、容易に想像がつく。そのため彼にとっては、バスコンセロスによるメスティソ文化への国民統合という考えも、批判の対象であったのだろう⁴⁷。

シケイロスは先住民の文化に一定の評価を与えながらも、彼にとっては、それらは目指すものではなく出発点として解され、考古学的インディヘニスモ⁴⁸や土着主義は避けるべきものであった。彼が、社会革命を目指す革命の戦士であったことは、その行動から明らかだが、彼はまた植民地時代から続く、ヨーロッパ芸術に対する従属が、ラテンアメリカ世界の芸術を閉塞的な状況に追い込んでいると考え、「芸術の革命」を志した。彼はまさに社会と芸術の両方の変革を求めているのだろう。彼にとって壁画運動は、メキシコ一国の問題ではなく、ヨーロッパ芸術に対する挑戦であり、芸術の社会化であった。彼にとって革命は、ナショナルな問題ではなく、抑圧される労働者の労働環境、労働条件、労働者の社会的位置づけを大衆自身が団結、共闘することによって変革するという、世界に共通する、あるいは少なくともラテンアメリカに共通するような達成されるべき主題であった⁴⁹。そのため、シケイロスは、人間を群衆というダイナミックな集合体として、力強い描線で表現する場合が多かった。

最後に、オロスコは革命をどのように表現したのだろうか。『塹壕』には、革命で死んでいった無名の戦士たちが描かれ、一人が泣き崩れている。革命の終わり、あるいは死という個人の時間の終わりと、恐らく暁に照らし出された朝焼けの空、つまり時間の始まり、あるいは終わらず続く現実世界が対比されている。山田論によれば、この壁画には、「オロスコの革命に対する両義的な態度が凝縮されている。偉大なる革命

の勝利に酔いしれることなく、戦闘の悲惨さと革命の展望に対する懐疑を象徴しているのである。(中略)ただ、オロスコは革命の情熱に陶醉することなく、革命から距離を置いて、革命戦争の現実を冷酷に見つめていたのである。(中略)私的な戦争体験から生まれた『塹壕』は、革命のプロパガンダ(宣伝)芸術に堕することなく、オロスコの悲観的な人道主義の立場を明確に表現している」⁵⁰。

次に、オリサバの労働者教育センターに描かれた『社会革命』では、妄動とも思える行動をとるサパタ党員たちが主題となり、農民たちの置かれた状況に真の革命の姿を見出している。男たちは恐らく敵を取り囲み、集団で暴行を加えているのであろうか。熱狂的な革命への思いが、殺すか殺されるかの命のかかった現実として描かれている。さらに、革命における女性たちの苦悩も表現されている。決して革命を賛美するようなものではない。メキシコで革命期を体験したオロスコだからこそ、革命の現実を捉え、その壮絶な現場を、飾らず、また善悪などの短絡的な価値判断をせず、ダイナミックに描きだしている。山田は、『サパタ派の行進』や革命軍の『後衛』の婦女子を描いた作品に言及し、「オロスコは英雄サパタだけに焦点を絞るのではなく、革命戦争に立ちあがったサパタ党の農民たちの姿に革命の真実を見出している」⁵¹と述べている。

つづいて、グアダラハラ州庁舎の議会の天井に描かれたイダルゴは、中央階段で見られるような独立達成に闘志を燃やすイダルゴ像とは、大きく異なっている。イダルゴは、独立を達成する前に、解放運動の元領袖のわなにかかり、処刑された。つまり実際にイダルゴは独立以前に殺され、壁画に描かれたように、独立という「自由」を手にすることはなかった。このことから考えれば、メキシコが「自由」を手にしたことは、どのようなことだったのかを問いかけているといえる。独立運動を達成するためには、奴隷や社会的弱者の多くが犠牲となったが、「自由」を手に入れた後の現実、あまりにも厳しいものであった。独立後の一連の混乱で、先住民の解放と独立を目指した自由への闘争は、現地生まれの白人たちに押さえ込まれ、さらにアメリカとの戦争により、国土の半分以上を失う。

革命運動にしても、派閥で対立し殺し合い、政権を争う。さらに政治的に社会革命が成し遂げられたといっても、先住民が大半を占める農民たちが望んだ農地改革は、1917年憲

法に努力目標として掲げられるかたちで急激に進むものではなかったし、穏健派のカランサの勝利により、改革の速度は遅々たるものとなった。

まさに、オロスコは歴史解釈の二面性に常に目を向けていたと言える。彼は、理想と現実を見据え、大衆に迎合する様子もなく、また権力に媚びることもなく、風刺画で磨いた鋭敏な感覚でメキシコを描き出した。そして理想と現実のすべてを受け入れることが、歴史を構成することに繋がると解釈していたのだろう。オロスコは、メキシコという国家的な問題を描き出すのにとどまるのではなく、歴史を共有するラテンアメリカ、ひいては世界のいたるところにある問題を描き出したのだと言ってもよいだろう。オロスコは、革命についてモリベラやシケイロスのように目的としたり、理想化するのではなく、革命に関わった人々のドラマを普遍的にまた、批判的に描き出している。これは、革命を否定する保守派勢力に同調するような簡単な姿勢ではない。J. フランコは、オロスコを次のように評価する。「オロスコの攻撃の鋒先は、革命絵画の諸問題に対してあまりにも単純な解決策を弄する人々に向けられている。真に優れた壁画家たちの間では、問題を根本に立ち帰って検討しようとする真面目な試みがなされた。オロスコ自身にしても彼は特定の政治思想にしたがって」⁵² おらず、彼の制作テーマは「人間の苦悩を扱ったものであり、一時的な流行を扱ったものではない。(中略) オロスコは、普遍的なレベルでの人間の苦悩と闘争を描くために絵筆をふるった」⁵³。さらにリベラやシケイロスがテーマとして好んだ先住民、換言すれば「壁画家たちのもう一つの傾向—民俗芸術のモチーフの乱用—は、ホセ・クレメンテ・オロスコによって批判され」⁵⁴、先住民文化ばかりを美化することは、メキシコの状況の一側面ばかりに焦点を当てることになり、相応しくないということが社会的に示された。

メキシコ人にとって国家は、革命前までは特に一体感を感じたり、歴史的に起源を共有するものとしては捉えがたかったと言えよう。メキシコ人の中でも征服以降に生まれるメスティソや敗者であるインディヘナは、クリオーリョが作り出してきた歴史観と並行する歴史観をもって生きてきたが、革命を契機に自分たちの過去を取り戻し⁵⁵、「偽りの現実」から自己を解放しようとした。換言すれば、「歴史の内在化」が大衆に起きたのであろう⁵⁶。しかし革命を率いた当時の領袖たちは、「革命運動の意義を理解する能力に欠けていただけで

なく、仮面の役より何の働きもない理念を弄び続けていたのである」⁵⁷。そのため先住民的歴史観では、革命期は人々が殺しあう絶望的な「テロ」の時代である⁵⁸と言われるのも事実であるが、同時に、それでもなお多くのメキシコ人にとって、自己をメキシコの歴史に一致させようとする契機となったのだろう。

大半の社会的弱者から見れば、独立当時から生まれてくる政治の虚偽的体質は、革命にもあてはまりうる問題であった。革命が「偽りの現実」になりかねないことを壁画家たちは理解していたのだろう。彼らの描き出すものは革命を賞賛し、革命に固執するようなものでないことは、上述の通り明らかである。1920年代から大戦期のナショナリズム的国民国家を創造する機会に、そこに陥る危険性も理解していたであろう。壁画家たちは、国家プロジェクトでも、自分たちの主義主張を持ち続け、壁画制作に協力的だったバスコンセロスや当時のカトリックを信奉する大衆にさえ迎合することはなかった。『アラメダ公園の日曜の午後の夢』のプラカードからも、リベラが、キリスト教的伝統的価値観に対して大衆が群れることを嫌い、自分の主張を大衆に問うていることが伺える。

さらに、第二節の最後で述べたような社会状況下、壁画はラテンアメリカと共通する問題を抱えたマイノリティや第三世界の人々にとっても重要なものとなっていった。壁画はこうしたラテンアメリカを自覚する内発的な動きとともに展開されていくが、諸外国からも認められた文化運動であったことが、ラテンアメリカの人々にとって壁画をより重要だと感じさせることにつながった。壁画の三巨匠はいずれも1930年代には、アメリカ合衆国で活動をし、オロスコとリベラは多数の壁画を残している。つまり、1920年代に本格的に始まった壁画運動が、十年足らずで一級の芸術活動としてアメリカ合衆国で認められたからこそ、壁画運動はラテンアメリカにおいて国境を越える芸術活動となったのである。アメリカでは、1929年に起きた大恐慌の対策として、ニューディール政策が打ち出された。その一環として、メキシコ壁画運動が取り上げられた。1935年以降の政策第2期には、雇用促進局(Works Progress Administration)の連邦美術計画(Federal Art Project)で、全米の公共施設の壁や敷地を、仕事を求める芸術家たちに提供し、壁画や彫刻を作らせ彼らを救済した⁵⁹。

当時、国境を越えるより広い脈絡で壁画運動が理解され、

制作されていったことはこのような社会状況からも、理解することができる。壁画という表現は、北米から南米まで、同時代に広く浸透し、ラテンアメリカ的な動きとなった⁶⁰。三大巨匠はみなメキシコ人であるが、グアテマラ出身のカルロス・メリダ (Carlos Merida) をはじめラテンアメリカの多くの芸術家が壁画制作を試みたのも十分に理解することができよう⁶¹。

壁画運動は、抑圧されてきた人々の解放を求め、民族的な伝統を大切にしながら、ラテンアメリカ全土で統一的な動きを作ろうとする広義のインディヘニスモとリンクし、広くラテンアメリカで受け入れられていったのだと思われる。こうして民族的にも社会的にも歴史を異にしてきた人々が、それまでの社会的格差や政治的境界を越えラテンアメリカという一つの集合体を創り出していく過程は、ヨーロッパ文明を担う列強諸国から自分たちを解放する道のりでもあり、今後も続いていくのだろう。

重ねて述べるが、ラテンアメリカで、あるいは第三世界ではじめてヨーロッパ的芸術を超克するような文化的運動が壁画であった⁶²。メキシコ・ルネサンスは、たんにイタリアの壁画を芸術的、技術的に模倣するのではなく、インディオを賞賛し先住民文化を復興させるだけのものでもなかった。また、スペイン文化を否定するイスパノフォビア⁶³を助長したり、クリオーリョ的な特権階級のみが享受する芸術でもなかった⁶⁴。ラテンアメリカに固有のものを良くも悪くも正当に評価し、マイノリティへの共感と理解を示すあらたな活気に満ちた芸術活動となった。これは、すでに見た当時のラテンアメリカ的なうねりの中で、壁画は世界人種、混血の文化の正当性、先住民文明の再評価、西欧芸術の超克、第三世界からの発信など複合的な意味が与えられ、ラテンアメリカに共有する表現形式として人々に意識されるようになったのだろう。土方は、三大巨匠について、次のように述べている。

「リヴェラ、オロスコ、シケイロスが、1922年に壁画を描きはじめたときに、リヴェラのヨーロッパでの作品を見れば明らかなように、ヨーロッパ絵画の伝統についての最高度の技術をもっていたことを語っている。そして、それらの最高度のヨーロッパ的技術は、社会変革にともなうプリミティヴな民族主義的熱情と思想に奉仕する技術になってしまっている。だがそれらの作品が少しも公式主義的な思想画になっていないことは、それらの作家の偉大な天才によるところはいうまでもないが、また植民地時代を清掃したメキシコ人とし

ての明晰な眼によると考える外はない」⁶⁵。

「植民地時代を清掃したメキシコ人」とは、植民地時代、さらに独立を含めた虚偽的社会を生き抜いてきた中から生まれてくる社会への洞察力を備えた人々を意味するのであろう。「政治的、社会的緊張に向けられた彼ら(壁画家)の眼は、多くの場合、批判的な立場をとったことも、特徴的である。なぜならば、彼らは常にヒューマニズムの立場から⁶⁶を観察したからであって、政治の不正、社会的圧力、そして人間疎外の路線をたどる近代文明の暗黒面に対する批判は彼らの画面にしばしば登場している」(傍点は原著者による)⁶⁶。

民族意識を持たせようという意図や、征服に起因する劣等感から民衆を解放するという目的で、壁画運動では土着性が強調され、その崇高さが歌われ、壁画運動は一つのイデオロギーとして機能したという偏狭な解釈もある⁶⁷。また、メキシコ革命は、革命と呼ぶに値するものではなかったが、描かれた「壁画は、革命に実態を与えた。壁画家は、革命とそのイデオロギーの制作者」⁶⁸であるとするものもある。フォルガライト (Folgarait) によれば、1920年から1940年に、壁画はポスト革命の時代において、必要とされた革命に実態を与える手段として有効に働いたという。しかし、描かれるものを見る限り、三大壁画家は、思想的にも決して一まとめに語ることができるほど単純ではなく、壁画という芸術を通じて何を表現するかという壁画に対する態度は、まったく異なっていた。

もちろん、テーマとしてリベラは『メキシコの歴史』、シケイロスはクアウテモックの連作を生み出しているが、偏狭なインディヘニスモに陥っていたとは、言いがたい。単にインディオやインディオ文明を再評価し、国民文化を創出しようという狭量なアイディアに基づいていたのではない。むしろ「国際的な現代美術の世界を視野に入れていたシケイロスは、メキシコの壁画運動が単に「革命の芸術」であることだけにこだわれば、永久にメキシコ革命という呪縛から逃れられず、また独立して評価されないこと、したがって圧倒的な価値の強制力を持つ西欧美術にとってはあくまでローカルなものとしてしか認識されないこと、そこでは壁画運動という美術の世界での出来事も革命達成のための政治プログラムとしてのひとつとしてしか理解されないだろうことを把握していた」⁶⁹。彼は、「非西欧社会に普遍的な感性によるオリジナルな価値を提出し、植民地時代以来続く西欧支配のパターンに一矢

をむくいる」ために、戦略的に、「芸術の革命」として「あるいは、西欧の現代美術の問題すべてを乗り越えるための主義主張である壁画運動」を提唱したのである⁷⁰。

壁画はその運動の主張や視点において多様であり、さまざまな主義主張を持つラテンアメリカの人々が共有することができる表現手段の一つであり、異なる人々をまとめる鑿であり、「明晰な眼」による批判や価値判断、現実解釈は、先進国の文化とは一線を画する文化的な土台をメキシコやラテンアメリカに提供することになった。

5 おわりに

オロスコ、リベラ、シケイロスの社会に対する厳しい観察力と冷静な見方は、彼らが置かれた立場をいかに解釈し、生き抜くかということを模索する中で、植民地時代から長期にわたり培われてきたものだろう。虚偽的な独立や革命の欺瞞、自由主義とともに立ち現れる従属、政治的スローガンと社会的実態、虚偽を含む現代をいかに見つめ、何に価値を置くのか、壁画にはラテンアメリカに広く共有されうる見方や価値観が表出している。そこには、征服に始まるラテンアメリカ文明の独自性を構成する要因が見て取れる。

メキシコは、「16世紀の征服の結果、抜きがたく植えつけられて半封建的なアシエンダ制の苦悩や、独立以後外国に売り渡された自国の経済の悲惨さを、革命によって解消し」、壁画などの文化活動を通じ「国民性の自覚と文化を達成することができた」⁷¹。この点で壁画運動は、文化教育活動として、革命後制度的にも充実していない学校教育を大いに補完し、社会的に貢献し、壁画自体が新たなアイデンティティと密接なつながりを持つにいった。

しかしメキシコ革命を契機に描かれた壁画は、単にナショナリズム的な革命芸術ではなく、革命をも批判的に描き出した。先に述べたとおり、インディヘナにとって革命期は、テロの時代とも捉えられており、革命を批判的に捉え表現することは、まさにインディヘナの当時の状況を代弁することでもあった。壁画家、特にオロスコは、革命という歴史的事象を批判的に描くことで、インディヘナも含めメキシコ人に、壁画つまり「描き出された歴史」への共感を呼び起こした。また壁画運動が、「西欧中心型で展開してきた国際的な現代美術に大きなインパクトを与えたのは、それが「芸術のための芸術」ではなく、社会に対するメッセージであり、歴史や社会

を一瞬にして感じさせるパワーを備えていた点が大きかったからである」⁷²。ラテンアメリカの人々にとって、壁画運動は、「20世紀の西欧主体の現代美術の世界で、唯一第三世界から生まれ、そして世界にインパクトを与えた芸術運動」⁷³であり、「単にメキシコのみならず、ラテンアメリカ全体、あるいは第三世界全体の貴重な遺産であると認識」⁷⁴されたからこそ、現在のラティーノにも受け入れられる表現手段となったのだろう⁷⁵。

壁画は、リベラが『メキシコの歴史』で描き出したように、メキシコに暮らす人々に、一つの時間と空間を共有する存在であることを自覚させ、虚偽に満ちた独立や革命を自己の歴史としてメキシコ人に認識させ、重層的な社会や並行する歴史観に一体性を与え、過去を清算させた。同様に国際的な展開を見せる壁画運動は、ラテンアメリカの人々に一つの歴史観を表明したといえよう。革命はメキシコ人にとって、国内の体制を大きく変換する本質的にナショナリスティックな運動として認識されたのに対し、同じメキシコから生まれた壁画制作は、単に国家主義的な革命芸術に留まることはなく、当時ラテンアメリカが置かれていた国際状況を理解していたバスコンセロスや三大巨匠によって導かれ、ラテンアメリカの精神に根付いた芸術活動となり、壁画はついにラテンアメリカの人々にとって、根源的なものとして認識されるに至ったのだと解釈することができよう。

壁画は、アメリカを始めとする他の世界を視野に入れ展開されていたラテンアメリカからの、ひいては第三世界からの問いかけであり、文化的な挑戦であった。支配的な文明に対するラテンアメリカからの主張であり、支配的な文明に抑圧されるマイノリティへの理解の表明である。これは、第三世界の文明から投げかけられる大きな問題である。壁画はメキシコ、広くはラテンアメリカのアイデンティティとかわる、ラテンアメリカ全体に潜在する根源的問題を我々に提示している。

かつて世界恐慌の中、アメリカでメキシコ壁画運動が、芸術家の職を増やすためにナショナリスティックな公共事業として取り込まれた。しかし、それから80年、世界的な金融恐慌の最中、大衆社会の爛熟の中で芸術的価値も「鑑定」によって金銭的価値に換算され、投資の対象となるなど、芸術の社会性が危うくなっている。このような状況の中、メキシコ壁画の影響を受けて、メキシコ・シティで製作された岡本太

郎の壁画『明日の神話』(1969)は、今もなお、経済的価値を越えて無数の人々に語りかけている。我々現代人は、岡本の描き出した核の脅威のみならず、食糧や環境問題などにより危機的状況に置かれており、我々の未来はさらに神話の度合いを深めている。メキシコの壁画家たちは、革命期の現実を見つめ、形ある壁画を残した。メキシコ壁画にはじまる一連の壁画伝統の原点を再考することは、現代文明を成り立たせている我々の価値観を批判的に検討する契機になるであろう。

注

- 1 日本とメキシコ地域との交流は、前フィリピン総督ドン・ロドリゴの乗った船が、慶長14年(1609年)にヌエバ・エスパーニャへの帰途台風に遭遇し、現在の千葉県夷隅郡御宿町の海岸で座礁したことに始まる。地元の人々に救助された一行は、さらに徳川家康からガレオン船を贈られヌエバ・エスパーニャへ戻った(日墨協会編1990, pp. 42-51)。この時から400年が経過した。
- 2 ラテンアメリカ諸国の独立については、国本(2001)を参照にした。
- 3 パス1982, p. 128.
- 4 パス1982, p. 128.
- 5 ディアス独裁体制以前、フアレス大統領は、植民地時代からの遺制や教会権力、経済発展を妨げる保守派勢力を解体するべく、1855年フアレス法を、1956年レルド法を公布した。フアレス法により、カトリック教会が持っていた諸特権は制限され、レルド法によって、カトリック教会が永代財産として保持していた不動産の解体が規定された。フアレスは、さらに保守派との対立の中で「教会財産接收法」などの改革諸法を公布し、社会体制の構造改革を図った。
- 6 ディアス体制やメキシコ革命については、国本(2002)、増田(1968)、メキシコ大学院大学編(1978)を参考にした。
- 7 都市部では政治的に不満をかかえる中間層、地方では大農場に農地を独占された零細農民があふれた。大農場で働く農夫たちは、植民地時代の農奴同然の暮らしを強いられた。しかしこれら農民や労働者層のストライキや労働争議による改革要求は、資本家や政府軍に厳しく弾圧された。
- 8 パス1982, p. 137.
- 9 メキシコ革命は、1910年-1920年の10年間とする短期的な捉え方と、1910年から1920年までが、革命の破壊期動乱期(カランサまで)とし、1921年から1940年までが改革期制度化期(オブレゴンからカルデナス Lazaro Cardenas)とし、1941年から1970年代までが革命における強化期、近代化期(カマチョ Avila Camacho)であるとする長期的な捉え方(メキシコ大学院大学編1978)がある。
- 10 新憲法には、大統領の継続就任の禁止、さらに教会勢力の権限を抑制すること、先住民の共有地を回復させることなど革命の理念が条項として明記された。さらに世界憲法史上で初めて労働基本権を詳細に規定(123条)した憲法であった。また、外国資本による鉱物資源や土地の保有権を

制限することも決められていた。

- 11 基本的な土地所有の単位、社会集団。
- 12 田中2001, pp. 304-305.
- 13 田中2001, p. 307.
- 14 国本2001, p. 205.
- 15 マリアテギ1988, pp. 31-36.
- 16 国本2001, pp. 205-206.
- 17 この時代、芸術だけではなく政治の分野でも、ラテンアメリカを意識する運動が展開されていた。ペルー人のアヤ・デ・ラ・トレ(Víctor Raúl Haya de la Torre)は、亡命先のメキシコでメキシコ革命の影響を受け、労働者と知識人による反帝国主義組織のアブラ(アメリカ人民革命同盟 Alianza Popular Revolucionaria Americana)を結党した。アブラは、反米帝国主義を唱え、ラテン・アメリカの政治的統一と全世界の被抑圧民族および階級との連帯を説いた。具体的な政策としては、土地と産業の国有化、パナマ運河の国際化などであった。政党の支部はラテンアメリカだけでなく、ヨーロッパにも置かれ、ラテン・アメリカ諸国の民族主義の大衆運動に大きな影響を与えるとともに、帝国主義にさらされている第三世界との連携を図っていった。
- 18 メキシコ壁画運動という固有の運動は、神話的なもので実在しなかったと考える意見(Orozco Valladares 1983, p. 98)もあるが、本稿ではメキシコで壁画が頻繁に作成される現象をさして、メキシコ壁画運動と便宜的に述べることにする。
- 19 加藤1987a, p. 364.
- 20 「メキシコ・ルネサンス」という用語は、1920年代に画家ではジャン・シャルロー(Jean Charlot 1979)によって初めて使用された。また作家ウォルター・パーチ(Walter Paach)や歴史家ローレンス・シュメケビア(Laurence Schmekebie)もこの語を使ったが、いずれも外国から来た者たちがはじめに使用した(Conde 1989, p. 209)。
- 21 田辺1986, p. 57.
- 22 加藤1988, p. 178。また壁画運動の理論や画家の組織化はシケイロスによって行われ、「技術労働者、画家、彫刻家組合(Sindicato de Obreros Técnicos, Pintores y Escultores)」が結成(1923)される。この組合の活動の目的は、次のように声明文で語られている。「我々の美的目標は、基本的には、芸術の社会化である…。我々は、それが貴族的であるがゆえに、いわゆるタブロー画や超知性的サロンの芸術を拒絶し、それが公有財産であるが故に、記念碑的芸術表現を称賛する。老衰した体制から新たな体制への移行という社会的時代にかんがみ、美の創造者たるものは、民衆のためのイデオロギー的価値を有する作品を生み出すべく、最大限の努力をするべきこと、現在では個人的自慰表現に化している芸術の理想目標が、今後はすべての人々のための芸術、教育と闘争となることをここに宣言する。」この「声明文」は、Siqueiros(Mario de Micheli 1985, p. 46)に掲載されている。訳文は、名古屋市美術館編(1989, p. 196)を使用。
- 23 1914年にも、エウラリオ・グティエレス(Eulario Gutiérrez)臨時大統領から、文部大臣に任命され、二年間文部大臣として務めた(フランコ1974, p. 87, セア2002, p. 103)。
- 24 バスコンセロスが、メキシコ国立大学の学長になった際に校章が作られたが、そこには、メキシコ以南のアメリカ大

- 陸がデザインされている。このことから彼の思想が伺える。
- 25 パス 1982, p. 162.
- 26 論文“La raza cósmica” (1925) の邦訳として、「地球人」(バスコンセロス 2002, pp. 103-123), 抄訳で「宇宙的人種」(バスコンセロス 1988, pp. 106-121) があるが、異なる訳語が与えられている。ここでは、「世界人種」と訳した。
- 27 バスコンセロス 1988, p. 107.
- 28 「バスコンセロスは当時学生運動の指導者だったペルーからの亡命者であるトレに職を与え、(中略) メキシコでの教育に携わせた」(フランコ 1974, p. 88) とあるように、反米帝国主義を掲げる APRA の創設者アヤ・デ・ラ・トレもバスコンセロスから職を与えられ、彼もまた第三世界の連携をうたった。
- 29 リベラの履歴については, Andrea Kettenmann Köln (1997), 加藤 (1988) を参照にした。
- 30 シケイロスについては, Leonard Folgarait (1998), Micheli (1985) と加藤 (1988) を参考にした。
- 31 加藤 1988, p. 186.
- 32 例えば、『神話と対決するクアウトモック』(1944), 『よみがえるクアウトモック』(1950), 『クアウトモックの苦悩』(1951) などである。
- 33 山田 1995, p. 446.
- 34 オロスコについては, Orozco Valladares (1983), 加藤 (1988) を参照にした。
- 35 ムリリョが、ナワトル語で水を表すアトルに自分の名前を変えた象徴的行為は、ヨーロッパに対する意思の表れ(フランコ 1974, p. 129) であり、先住民の雨の神トラロック (Tlaloc) の子孫であることなど、先住民文化を積極的に評価していることの表れである(加藤 1987b, p. 86)。
- 36 Clemente Orozco 1970, p. 10.
- 37 Orozco Valladares 1983, p. 99.
- 38 主に、アトル主催の「前衛」紙や「パンチート (Panchito)」、「公正 (El Imparcial)」, 「アウィソテの息子 (El Hijo del Ahuixote)」に描いた。
- 39 タスコ美術学校では、日本人画家北川民次も参加しており、児童画教育で成果をあげた。メキシコ芸術の日本とのかかわりは、後の岡本太郎や利根川光人などにも見ることができる。
- 40 オロスコは、サパタやサパタ党员に関する作品を残しているが、「サパタ党员」というキャンバス画は構図的に、この『社会革命』という壁画の構図を継承している(山田 1989, p. 42)。
- 41 彼らは、伝統的にカトリック信者の多い、メキシコ中西の諸州の農民であった(国本・畑・細野 1984, p. 137)。
- 42 山脇 1989, p. 18.
- 43 国本・畑・細野 1984, p. 117-118.
- 44 石井 1988, p. 37.
- 45 石井 1988, p. 37. 国民文化を高揚するのではなく、その時代的背景とともに「絵画と民衆を直結する壁画運動は、にわかに社会主義リアリズムの路線をたどるようになり、連邦美術計画ははからずも反体制美術の色彩を帯びはじめるのである。つまり、この第二次大戦前夜の不安な状況のなかで、メキシコ美術とアメリカ美術は一つの共通分母のうえに立ち」(桑原 1972), 壁画運動は、国民文化を超えた展開となっていく。
- 46 ウレーニャ 2002 [1925], p. 146.
- 47 田中は、「芸術家の鋭敏な感性は、バスコンセロスの時代感覚を遥かに上回るスピードで彼のもとから離れていった」と述べている(田中 2001, p. 310)。
- 48 考古学的インディヘニスモとは、考古遺物からインディオ文化を評価するインディヘニスモのことである。マヌエル・ガミオ (Manuel Gamio) は、農業振興省に設置された人類学局の所長 (1917-1924) となり、テオティワカンの考古学調査を行って、古代文明の偉大さをメキシコ人に知らしめた。「また、ガミオは人類学者として、インディオ文化の異質性を熟知しており、インディオも社会の進歩に参加させるべきであるとしながらも、文化や芸術の面ではその独自性を残すべきであると考えていた」(国本・畑・細野 1984, p. 151)。その結果、社会的に先住民文化の再評価がなされた。
- 49 シケイロスの思想については, Micheli (1985), Folgarait (1998), 加藤 (1988) を参考にした。
- 50 山田 1989, p. 32.
- 51 山田 1989, p. 42.
- 52 フランコ 1974, p. 171.
- 53 フランコ 1974, p. 171.
- 54 フランコ 1974, p. 93.
- 55 パス 1982, p. 153.
- 56 パスは、レオポルド・セアの言葉を挙げ、革命は、「我々の歴史を同化する」ことで、歴史を生きているものにかえることだと述べている(パス 1982, p. 153)。
- 57 パス 1982, p. 153.
- 58 小林は、ルイス・レジェス・ガルシアを引用し、メキシコ革命は先住民にとって「激しいテロの時代」と呼ばれていたことを指摘している(小林 2000, p. 34)。また、リカルド・ボサスは、徴用された反革命軍から革命勢力を転々とし、時代に翻弄される先住民の目から、革命を描き出した(ボサス 1984)。
- 59 この事業によって、1,000 を越すアメリカの都市で 16,000 点の壁画が作成された(桑原 1972)。当時アメリカでは、移民が増加し、民族=ネイションの枠を超えたトランスナショナルなアメリカ合衆国文化が成立し、コスモポリタニズム的「アメリカ合衆国人」が生まれることが、アメリカの知識人によって求められたが、その要求は挫折した(石井 1988, p. 38)。
- 60 実際はラテンアメリカだけでなく、岡本太郎、北川民次など日本にも影響を及ぼした。
- 61 ブラジルでは、カンディド・ポルティナリがリオの文部省の庁舎にある一連の壁画を描いている。フランス人のジャン・シャルローなど外国人であるが、メキシコに壁画を残している芸術家も多数いる(加藤 1987a, p. 310)。岡本太郎もその一人である。
- 62 バプロ・ピカソ (Pablo Picasso) も、メッセージ性の強い壁画『ゲルニカ Guernika』(1937) や『戦争と平和 La Guerre et la Paix』(1952) を残している。
- 63 パウエル 1995, p. 10. 彼はメキシコ革命期に、インディヘニスモと結びつき、教条的なイスパノフォビアが生じてくると述べている。
- 64 リベラの場合、征服期を扱った一連の壁画や「メキシコの

歴史」などで、コルテスを醜怪な人物として描いていることも確かである。

- 65 土方 1955, p. 5.
66 桑原 1972.
67 Maccoby 1967 (角川 1995, p. 139 から引用).
68 Folgarait 1998, p. 198.
69 加藤 1988, p. 183.
70 加藤 1988, pp. 183-184. ヨーロッパ中心史観を正す『現代史序説』を記したバラクラフも、ヨーロッパ以外の地域で萌芽する芸術として、その重要性を指摘している (バラクラフ 1971, p. 311).
71 増田 1968, p. 186.
72 加藤 1988, pp. 235-236.
73 加藤 1988, p. 237.
74 加藤 1988, p. 237.
75 加藤は、合衆国内のヒスパニック系のチカーノ芸術にふれ、メキシコとの関連も含め「チカーノアートの誕生」について詳説している (加藤 2002, pp. 57-124).

参考文献

- 石井康史 1988 「“国民” のリブリゼンテーション」, 美術手帖. ウレーニャ, ペドロ・エンリーケス・
2002 [1925] 「アメリカのユートピア」, 『現代ラテンアメリカ思想の先駆者たち』, レオポルド・セア編, 小林一宏・三橋利光共訳, 人間科学叢書 34, 刀水書房.
加藤薫 1987a 「壁画運動」の項, 『ラテンアメリカを知る事典』, 三六四頁, 平凡社.
1987b 『ラテンアメリカ美術史』, 現代企画室.
1988 『メキシコ壁画運動—リベラ, オロスコ, シケイロス—』, 平凡社, (2003, 現代図書より再版).
2002 『21 世紀のアメリカ美術 チカーノ・アート 抹殺された〈魂〉の復活』, 明石書店.
国本伊代 2001 『概説ラテンアメリカ史』(改定新版), 新評論.
2002 『メキシコの歴史』, 新評論.
国本伊代, 畑恵子, 細野昭雄
1984 『概説メキシコ史』, 有斐閣選書 894, 有斐閣.
桑原住雄 1972 「新大陸の壁画芸術—メキシコ壁画が意味するもの—」, 『図録シケイロス展』, 朝日新聞東京本社.
小林致広 2000 「敗者の歴史でないインディオ史は可能か」, 『立命館言語文化研究』, 12 巻 1 号, 27-34 頁, 立命館 [大学] 国際言語文化研究所編.
セア, レオポルド編
2002 『現代ラテンアメリカ思想の先駆者たち』, 小林一宏・三橋利光共訳, 人間科学叢書 34, 刀水書房.
田中敬一 2001 「1920 年代メキシコに見る国民文化の創造」, 『紀要』, 33 号, 299-314 頁, 愛知県立大学外国語学部編.
田辺厚子 1986 『亡命の文化史』, サイマル出版会.
角川雅樹 1995 「メキシコにおける人と文化」, 『ラテンアメリカ人と社会』, 中川文雄・三田千代子編, ラテンアメリカ・シリーズ 4, 143-167 頁,

新評論.

- 名古屋市美術館
1989 『図録メキシコ・ルネサンス展オロスコ, リベラ, シケイロス』, 名古屋市美術館.
日墨協会編
1990 『日墨交流史』, PMC 出版.
パウエル, フィリップ・ウェーン
1995 『憎悪の樹』, 論創社.
パス, オクタビオ
1982 『孤独の迷宮』, 高山智博・熊谷明子訳, 法政大学出版局.
バスコンセロス, ホセ
1988 「宇宙の人種」, 高橋均訳, 『現代思想』, 16 巻 10 号, 106-121.
2002 「地球人」, 小林一宏・三橋利光共訳, 『ラテンアメリカ思想の先駆者たち』, 103-123 頁.
バラクラフ, G.
1971 『現代史序説』, 中村英勝・中村妙子訳, 岩波書店.
土方定一 1955 「メキシコ美術の相貌—伝統と現代—」, 『美術手帖』, No.101, 10 月号.
フランコ, ジーン
1974 『ラテン・アメリカ—文化と文学—苦悩する知識人—』, 吉田秀太郎訳, ラテン・アメリカ研究 5, 新世界社.
ポサス, リカルド
1984 『コーラを聖なる水に変えた人々』, 現代企画室, インディアス群書 2.
増田義郎 1968 『メキシコ革命: 近代化のたたかい』, 中央公論社.
マリアテギ, ホセ・カルロス
1988 『ペルーの現実解釈のための七試論』, 原田金一郎訳, 柘植書房.
メキシコ大学院大学編
1978 『メキシコの歴史』, 新潮社, 新潮選書.
山田諭 1989 作品解説, 「図録メキシコ・ルネサンス展オロスコ, リベラ, シケイロス」, 15-42 頁.
1995 「作品解説」の項, 『世界美術大全集—表現主義と社会派—』 西洋編第 26 巻, 439-448 頁, 小学館.
山脇一夫 1989 序文, 「図録メキシコ・ルネサンス展オロスコ, リベラ, シケイロス」, 15-23 頁.
1995 「メキシコ壁画運動 オロスコ・リベラ・シケイロスを中心に」, 『世界美術大全集—表現主義と社会派—』, 西洋編第 26 巻, 345-360 頁, 小学館.
Charlot, Jean
1979 *The Mexican Renaissance, 1920-1925*, New York, Hacker Art Books.
Clemente Orozco, José
1970 *Autobiografía*, Era, Mexico.
Conde, Teresa del
1989 “El renacimiento mexicano”, 「図録メキシコ・ルネサンス展オロスコ, リベラ, シケイロス」, 209-215 頁.

- Folgarait, Leonard
1998 *Mural painting and social revolution in Mexico, 1920-1940 : art of the new order*, Cambridge University Press, New York.
- Kettenmann Köln, Andrea
1997 *Diego Rivera, 1886-1957: a revolutionary spirit in modern art*, Taschen.
- Maccoby, Michael
1967 "El Carácter Nacional Mexicano", *Revista de Psicoanálisis Psiquiatría y Psicología*, No. 7, Fondo de Cultura Económica, México.
- Micheli, Mario de
1985 *Siqueiros*, SEP/Cultura.
- Orozco Valladares, Clemente
1983 *Orozco, Verdad cronológica*, Universidad de Guadalajara.

デザイン領域が関与する認知症介護へのアプローチ

山崎正人^{*1}, 申珠莉^{*2},

(^{*1} 東海大学教養学部芸術学科デザイン学課程非常勤講師, ^{*2} 東海大学教養学部芸術学科デザイン学課程教授)

[研究ノート]

An Approach to the Care for Dementia Sufferers in Relation to the Domain of Design

Masato YAMAZAKI ^{*1} and Julie SHIN ^{*2}

^{*1} Lecturer, Course of Design, Department of Arts, School of Humanities and Culture, Tokai University

^{*2} Professor, Course of Design, Department of Arts, School of Humanities and Culture, Tokai University

In 2025 when all the members of the so-called “generation of Dankai” (the first generation of baby boomers) become older than 75 years old, the number of people with dementia will increase by 1.5 times to 3,860,000 from the current 2,500,000. At the moment, the major treatments for dementia rely on symptomatic remedies, ones that delay the progress of the symptoms. Thus, most of the patients with dementia will have to suffer from serious illness and require nursing care by others.

In the current care for dementia, we should not only take care of the medical and physical symptoms, but gather information for individual patients so that we can ensure their dignity of life and to allow them to have their preferred lifestyles according to their personalities. To materialize this care it is essential to have direct human involvement in each case, both by the patients’ family members and professional staff, as well as to develop ideal environments that contribute to the efficiency of care.

The improvement of care environments also bears importance in regard to avoiding the potential medical risks caused by the increase of dementia in people with advanced age (who often live alone without caretakers), or the patient/caretaker couples, both of whom are suffering from dementia.

In this paper, the findings were made through my personal experience of home care. The contrivances I made to assist the self-support of the subject or to mitigate behavioral disorders turned out to be related very closely to the domain of design. The efficiency of design has been focused on and examined to find out the ways design can contribute to the future of dementia care.

Coming with a sense of cooperation and using engineering science, the development of care equipment and the introduction of visual teaching materials that support dementia care have been carried out. The process and the consequences of these developments are discussed.

Accepted, May. 6, 2010

はじめに

団塊の世代全員が 75 歳になりきる 2025 年, 認知症患者は, 現在の 250 万人から 1.5 倍増加の 386 万人になるといわれている。目下のところ認知症の治療は, 症状の進行を遅らせる対症的な治療法が主となっている。このようなことから認知症患者の大半は確実に症状が重度化して他者による介護が必要となる。

認知症介護は, 患者個人の様々な情報を収集して, 尊厳を保ち, 安全で安心した環境のなかでその人らしい生活を確保することである。多くの介護施設では, 認知症患者に適応した環境整備が図られているのに対して在宅介護環境では

十分な配慮がなされていないことが多い。そのため在宅で暮らす認知症患者は混乱が起きやすく不安定な生活をしていることが多い。そこで, デザイン領域からも現状の問題に対して積極的に取り組む必要があると考えた。

本研究では, これまで, 筆者家族(以下: 被験者)の在宅認知症介護期間に, 自立支援と BPSD(認知機能障害が原因で起こる混乱した行動)の抑制に環境整備を実施した。約 130 の事例は, 試行錯誤のなかで効果を上げ被験者の自立支援と生活を支えた。これらの事例は, 計画段階から実施にかけて視覚伝達・道具・空間系デザインの手法が多く活用された。それを基盤に今後の認知症介護のなかで広くデザイン領域が貢献できないか探査をしてきた。その結果, 認知症患者を支援する機器の開発と, 実施事例の評価に用いた支援年表を介護と看護の専門職用教材に改良する 2 つの研究

テーマが導き出された。本稿では、これら研究の進行状況について報告する。

I. 研究の背景と目的

現在、認知症には、薬物療法と非薬物療法がある。前者は、主に薬物を用いて症状の緩和と進行を遅らせる治療に対して、後者は、認知機能障害（中核症状）や情動機能の改善、BPSDの軽減、包括的QOLの向上を目的とした療法やリハビリテーションのことを指している。非薬物療法は、介護施設を中心に試みられており、行動療法、音楽療法、回想法、記憶訓練法、リアルオリエンテーションやバリデーションなど多くの種類がある¹⁾。この療法の課題としては、認知症患者への介入が均質でないことや、その結果として現れる効果を数値化して科学的に検証することが難しいことからエビデンス²⁾が出しにくいことが上げられる。しかしながら、多くの非薬物療法の実践から効果ありとの事例が蓄積され、普及に向けた解説書の出版や日本認知症ケア学会においても非薬物療法に関する研修会やセミナーが開催されていることから、この療法を取り入れる施設が増えてきている。

非薬物療法の効果検証と同様に、本研究で実施した環境整備の事例もその有効性を科学的根拠に示しにくいものである。そこで、実施事例の有効性を示すために、より詳細かつ明確に事例を報告する必要があった。

この手段としては、まず、基本となる被験者に関する病態と残存能力の経過ならびにBPSDの出現と事例実施の背景となる家族の状態や介護サービスの利用状況などを項目ごと時系列に整理をした。次いで、これらの情報と個々の実施事例を対応させ支援年表を完成させた。この年表により事例分析と効果の評価に向けた外部での報告が容易になった³⁾。

II. 効果検証に向けた情報発信とその反応

II -1 外部報告の状況

これまで実施した環境調整の評価を進めるにあたりデザイン領域に関連する先行研究が見当たらないことから、認知症を専門とする介護と工学分野において積極的に事例報告をおこないの反応を収集した。特に、学会の研究報告会やセミナー、シンポジウムは、参加者から直接反応が収集できる貴重な機会であった。報告は、介護分野主催の事例報告3件⁴⁾と工学分野主催の事例報告6件⁵⁾で、全報告においてスラ



図1 スライドと支援年表を用いた外部報告例（国立障害者リハビリテーション研究所シンポジウム）

イドで支援年表の事例を部分抜粋（図1左）、工学分野1件を除き会場に支援年表を掲示した（図1右）。

それぞれの参加者の構成は、介護分野で、介護家族のみが1件、ヘルパー、ケアマネージャー、社会福祉士、介護福祉士、看護師、作業療法士、言語聴覚士などが2件であった。

それに対して工学分野では、工学研究者のみが3件、対象者の限定なしが3件と半々であった。限定しない場合の参加者は、工学研究者、メーカーのエンジニア、技術コンサルタント、一般、介護家族、介護と看護の専門職、作業療法士と言語聴覚士を含むリハビリテーションの関係者などであった。

II -2. 介護と工学分野の評価

介護と工学分野の事例報告において、参加者が興味を示した内容を比較してみると、介護分野では、自立支援とBPSDの抑制を目的に実施した事例紹介とその効果について、次いで、認知症患者にとっての安全で安心できる環境整備であった。また、適切な環境整備の実施にあたり必要となった被験者の観察方法や失敗から工夫を重ねた体験談などもあった。

これに対して工学分野では、被験者が安全に使用できた家電製品の操作に関する取り組みや、新規に購入をした家電製品の操作や家具の配置に伴う被験者の行動変化であった。

II -2-1 介護分野の報告と反応

介護分野の反応では、主に、参加者が実際の介護のなかで事例を応用して実践する方法の質問と事例の解説をした書籍の出版およびホームページの有無に対する問い合わせであった。また、スライド画像やプリンターの出力による事例紹介では、リアルな情報が理解しづらいことから視覚表示物や小物の工夫に関しては、実物展示の要望が多かった。

具体的な事例報告の評価では、室内の安全を確保する空間系の環境調整と、家電製品などの誤操作を防止した道具系の環境調整が在宅の介護環境の安全を確保すると同時に、記憶障害や自立支援のために実施した日記や表示物といった視覚伝達系の環境調整が被験者の不安を軽減したことなどが視覚的に確認できたことにより介護の場で役立てたいという意見が多かった。

また、報告に用いた支援年表が認知症の全体像について容易に把握できる貴重な資料であることから、看護師育成の教員から授業で年表を使用したいという要望や、看護と介護の専門職から被験者の病態に他疾患を併発した場合を想定して、その対応について考える訓練ができることやスキルアップ用の教材として多様な使用が考えられるなどの意味もあった。

介護家族を対象としたセミナーでは、環境整備の実施を通して家族が困難な状況を乗り越えた方法の解説に重点をおいた。それら筆者の経験は、介護家族が共感するところであり両者の精神的な共有が図れた。今後、本研究は介護家族にも対象を広げることで様々な展開が考えられる。

これらの反応から、事例の解説書作成と支援年表の教材化に向けた改良が次段階の研究テーマとして導きだされた。

II -2-2. 工学分野の報告と反応

国内における認知症患者を機器で支援するという工学分野の研究の歴史は浅く研究データの蓄積も多くはない。ここで対象となる支援機器の開発課題は、個別性が高い認知症患者一人ひとりにどのように対応できるかである。

これらの研究では、桑原のテレビ電話を使用して遠隔地から高齢者と対話や回想法を可能とするシステムの開発⁶⁾や安田の認知症患者の記憶障害に音声出力記憶補助器とICレコーダーを使用して情報と心理や感情を支援する実験と、三次元計測を利用したトイレ動作支援システム⁷⁾などがある。

また、国立障害者リハビリテーションセンター研究所でも5年前から認知症患者の支援機器開発の研究に着手した。同研究所は、医学、工学、社会科学、心理学と広範囲の分野から障害者の医療・福祉の向上を目指している施設である。福祉機器開発部では、海外で認知症患者が使用している機器を収集、国内の希望者にその機器を貸出して試用と評価をする研究⁸⁾やグループホーム内で認知症患者に電子スケ



図2 認知症のある人の機器展示館と常設展示

ジュールボードを使用して自立的な行動を促す研究⁹⁾を行っている。

他に同センターでは、収集した機器を平成19年12月、国内初の認知症のある人の福祉機器展示館を開設して同館で展示をしている(図2左上)。本研究の支援年表は、第2回認知症のある人の福祉機器シンポジウムで筆者の講演後に常設展示となっている(図2右)。

認知症患者の支援機器開発に携わる研究者は、対象となる支援の目的に応じて病態のどの時期に機器を用いるか設定している。これらの機器は、軽度から重度と長期間に渡って認知症患者を支援するよりもある一時期の使用を想定していることが多い。そのため研究者は、開発機器の対象となる比較的狭い病期の範囲に限って専門的知識を習得している。そこで、被験者の軽度から重度までの全症状と同時に介護家族の影響も網羅している支援年表は、研究者がアイデア展開をする際に適した資料であると評価を得た。なかでも、石川県工業試験場の研究者からは、同年表を用いて開発中の機器の普及と新たな機器導入の機会について検討したいという要望があり年表の貸出しを試みた。

具体的な事例報告では、被験者が熱いから危ないと湯沸かしポットに水をかけようとした行動や、気になる家電製品のコンセントプラグを抜くこと、電源コードをはさみで切断しようとした行動についての道具系環境整備は、今後の機器開発にとって貴重な情報となったようである。

III. 評価を踏まえた展開

III -1 支援年表の教材化に向けた介護分野との連携

支援年表を教材にする改良作業では、日本赤十字社埼玉



図3 新支援年表と実物事例を使用した介護講座（2回目）

支部特別養護老人ホーム彩華園地域介護実習・普及センターと東海大学医療技術短期大学看護学部の協力を得た。

彩華園は、埼玉県の委託事業として介護の講座を開講している。国立障害者リハビリテーションセンター研究所主催のシンポジウムにて筆者が講演後、参加していた同園の介護指導員から主に一般を対象とした「認知症の方の生活を助ける福祉用具」講座で支援年表と実物の事例貸出しの依頼があった。これまで本研究を筆者以外が解説をする前例はなく外部講師用に要約資料を作成する必要がでた。また、受講生に必ず伝えて欲しい内容として、事例は、あくまでも被験者の病態や残存能力の見極め、生活歴の活用などを視野にいれ設計・実施をしたもので、実施後は効果の検証をおこない必要であれば修正を繰り返すという調整作業が必要であることを講義に盛り込む条件を出した。講座は、平成20年3月と平成21年9月に開講され（図3）、初回で支援年表の改良項目を抽出、二回目で改良版を使用して使い易さや理解度の確認をした。

支援年表の改良点では、経過を示す西暦と和暦を縮小して、初診から1年目、2年目という大きめの表記を追加した。また、被験者の状態像をイメージしやすくするため顔写真を増やした（図6右下）。

事例の分類では、筆者が分析のために用いた道具・空間・視覚伝達系環境配慮という項目を初期支援と環境整備に変更、それに伴い事例の配置を調整した。他では、通院回数や介護サービスの利用状況、民間の介護タクシーの利用など認知症に関わる経済的負担や機会ごとの家族の心理状況を追加した（図6左上）。この改良によって事例とその背景が明確に伝わり、筆者以外にも、多様なキーワードからさまざまな分析が可能になった。

視覚表示物を中心とした実物展示は事例の理解のしやすさ、認知症の人の視線の重要性、自宅での支援の様子が把握できたという評価であった。今後の事例紹介では、目的に



図4 支援年表を用いた看護教育

応じて視覚表示物など実物展示を検討する必要が出てきた。

III-2. 教材化に向けた看護分野との連携

看護系の協力では、改良した支援年表を大学院の授業で使用（図4）した。

その反応では、医療の専門職ではない普通に暮らす人々がどのような経験をしながら認知症を見るのかが把握できたことと、療養者の認知に応じて物理的な環境調整が家族内の関係性の調整も同時に行っていたことが理解できたということであった。また、一緒に住んでいくためには、主の介護家族が療養者の症状をよく把握して他の家族のフォローや調整をしていくことの重要性があることに気づいた。要介護度があり、誤嚥性肺炎などの合併症などによる身体的衰え時、老人保健施設から療養型病床に変わるなどの過渡期には、療養者と家族ともに大きなストレスに直面していることが明確に伝わってくるなどであった。他では、直面する機会ごとに経済的問題が浮上することや写真を多用したことから、療養者の状態やその変化の理解が高まったことが評価として上げられた。年表の単独使用でも比較的正確に内容の読み取りができていたことや、ポスター形式にまとめ上げた着想についての評価も高く教材化に向けての手応えを感じた。

III-3. 補足資料として必要となった解説書の準備

支援年表を教材化にする目的は、介護と看護の専門職にとって環境調整の重要性を正確に理解してもらい、在宅介護の実践のなかでその方法を役立ててもらうことである。そこで、支援年表とは別に支援年表の使い方と事例の詳細な解

説書が必要となった。この準備では、解説書に必要な体系を整えるため、デザインと認知症について1編、初期段階の環境整備について1編、日記を活用した初期支援2編、視覚伝達、道具、空間系デザインの手法を活用した自立支援2編、環境整備に必要な被験者の観察方法1編、介護者と環境整備による排泄支援1編、徘徊の対処に必要な環境整備2編、環境整備の実施と家族心理の動向2編、環境整備研究が情報発信する課題1編、介護サービス提供者に向けて必要となった環境整備1編、今後の認知症介護のなかで果たすデザインの役割について1編の合計15編の論文¹⁰⁾を執筆した。これらのデータを基本として解説書の作成をおこなっている。また、今後、解説書と支援年表の整合性を高めるため再度支援年表の調整をする必要がある。

III -4. 工学分野との連携準備

福祉先進国スウェーデンでは、認知症患者の自立・自律を支える機器が普及している。認知症の高齢者が普通に一人で暮らせることを支えているのは、必要時に何回も訪問してくれる介護サービス、そして、その隙間を埋めるボランティアと支援機器によるものである。例えば、薬を飲む時間を教えてくれるアラーム付きの機器（図2左下）は、時間を教えるだけでなく、アラームと同時に薬を出してくれる。また、重複して薬が取り出せない安全対策も備えている。この機器の利用により、患者の生活リズムが整い安全と安心が確保できるのである。機器導入にあたっては、医師、介護の専門職、作業療法士間で協議をして最終的に作業療法士が処方箋を出し必要な機器が導入される。また新しい機器の操作に慣れるまでその操作が練習することができる施設も備えている。

一方、国内では、認知症専用の機器はほとんどなく、介護保険の適応は徘徊探知機のみである。高度な工業技術を持ちながら介護は献身的に人の手でおこなうものという考えが根強く、急激な認知症患者の増加と介護者不足がある状況においても、認知症患者専用の機器開発が増える状況ではない。現状、認知症患者を抱える介護家族が勤務先などから実家や自宅の様子を携帯電話で確認できるサービスの利用者が増えてきた。自費でカメラを設置、サービスの契約をしている。本来このシステムは、防犯用に開発されたもので認知症専用の機器ではない。この様に、既存の製品を認知症介護に当てはめて使用するケースが最近増えてきており、

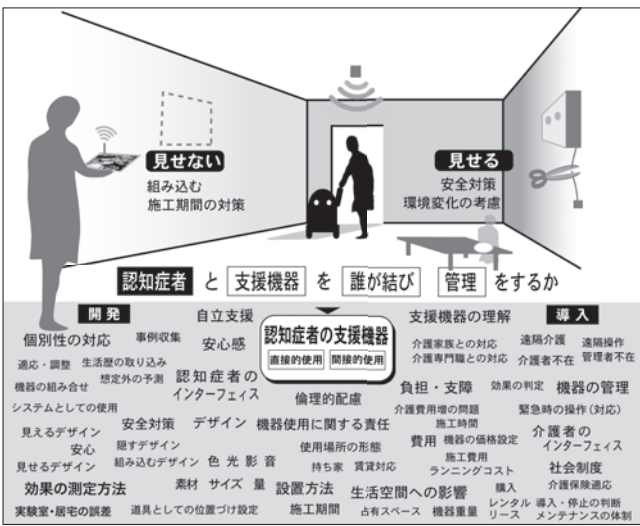


図5 支援機器の普及と課題例

国立障害者リハビリテーション研究所においても一般の製品と認知症患者が使用できる共用品についても調査を実施している。

認知症の支援機器の普及では課題やリスクが多く、機器の研究と同時に普及に向けての準備を進めておく必要がある。例えば、機器の不具合による責任の所在やメンテナンスの方法、高額で購入しても確実に使用できる期間が特定できないなどもある。同時に、機器が製品化され関連する社会的制度が確立したとしても、住み慣れた環境に見知らぬ機器が突然登場したことで、認知症患者が「ここは私の家ではない」という判断をして、玄関から外に出て事故に巻き込まれることも想定しておかなければならない。

本研究では、実施事例の分析を通して認知症患者を支援する機器の開発と普及に向けてデザイン領域からも多くの課題に取り組みたいと考えている。そのようなことから機器が必要となるシーンを想定しながら、一般の人が機器の必要性を理解できるようパース画（図5）を作成することや工学系の研究者に向けて機器のプロトタイプモデル（図7右上）を提案¹¹⁾している。現在、幾つかの企業から自社のシーズを認知症関連に活用できないかその振り分けの依頼もあり、本格的に工学分野との連携に向けて準備を進めているところである。

IV. 環境整備研究の評価と展開

これまでの研究の経過を整理した（図7）。本研究は、被験者に対して実施した環境整備が基盤にある。事例の有効

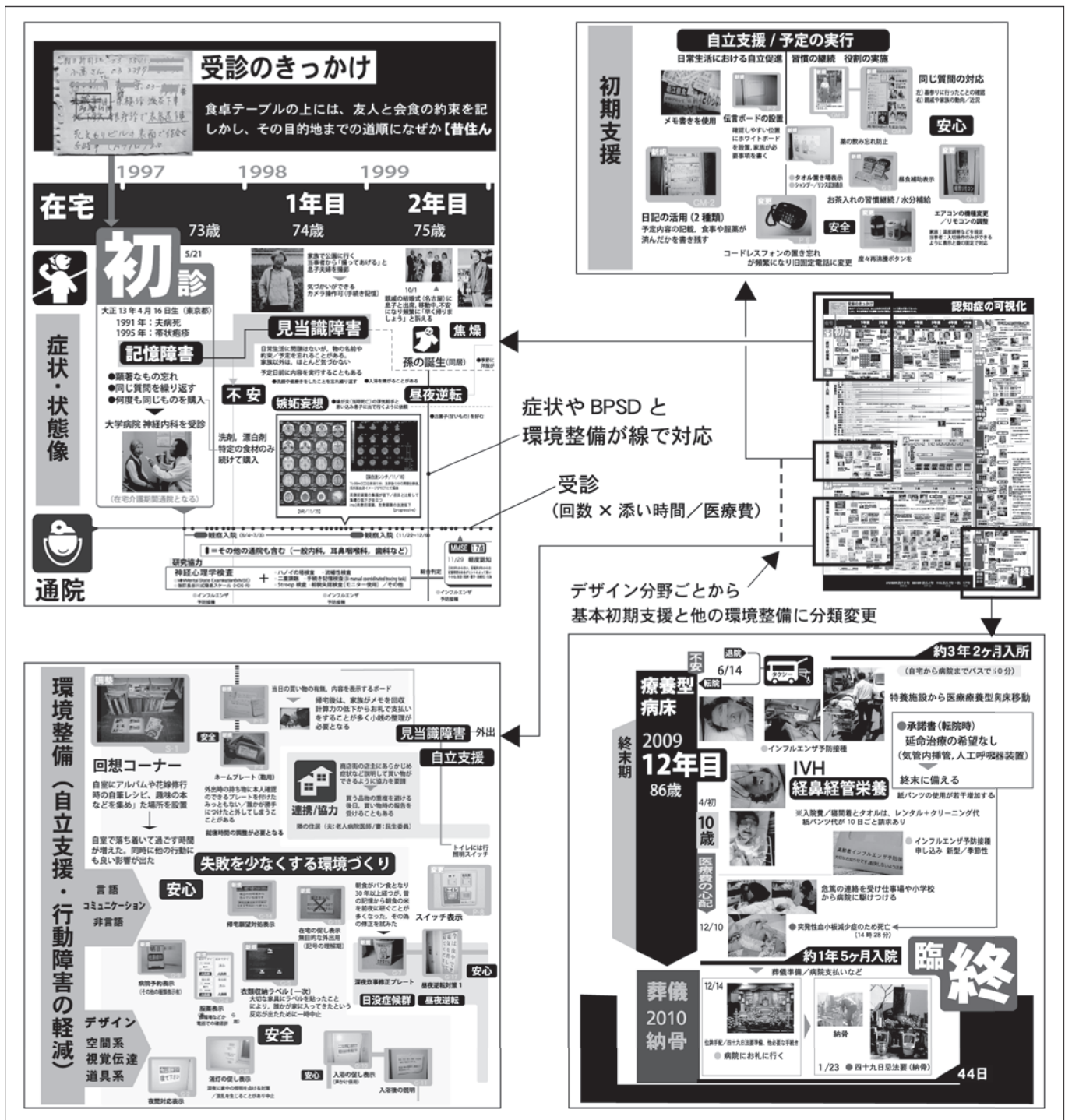


図6 支援年表の教材化に向けた改良

性を確認する作業では介護と工学分野において事例報告を重ねた。その結果として認知症患者の支援機器開発と看護と介護専門職を対象とした教材開発という2つの方向が導き出された。

前者においては、筆者の専門が工業デザインということから研究の初期段階から支援機の開発と工学分野との連携を視野に入れていた。一方、支援年表の教材化は、想定外の反応であった。しかし、認知症のある人の福祉機器展示館の

見学者や彩華園の講座受講者から筆者に直接、支援年表の貸出し依頼があるなど教材としてのニーズが高いことが確認され、本格的に支援年表の教材化に取り組むことにした。他では、介護家族に向けて苦境を乗り越える気づきや、筆者と介護家族の共感を目的に、(社)認知症の人を抱える家族の会東京支部会報きずな「我が家の工夫」に環境整備の事例とその背景についてわかりやすく解説をしている。この活動も本研究の成果のひとつであると考えている。

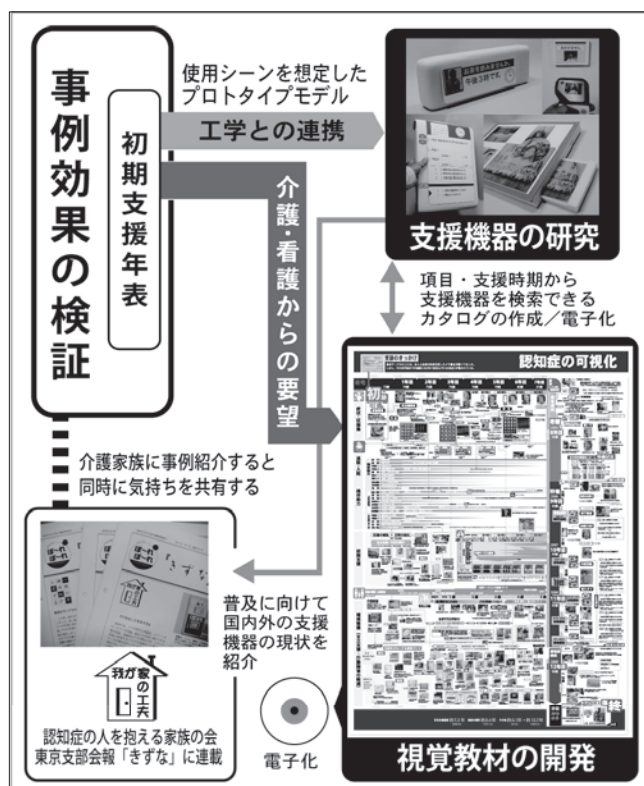


図7 基礎研究の展開

V. まとめ

平成21年秋、認知症ケア学会第10回大会が東京で開催され、本研究は「認知症の可視化」という題目で教材開発を中心に報告をおこなった。この発表では、認知症にとって早期発見、早期受診の重要性を訴求するために受診に至ったきっかけを新たに年表に追加をした（図6左上）。年表を用いた発表では、一度に年表を見ることができる人数が限定されてしまう。そこで、認知症介護研究・研修仙台センター長ならびに研究メンバーから、モニターで年表を紹介する方法として支援年表の電子化を勧められた。同センターは、他に東京と大阪に拠点をもち、認知症の介護研究と、都道府県ならびに政令指定都市から委託され認知症介護指導者を養成する機関である。同センター所属にする研究者からの助言の意味は大きく、電子化が実現できれば効率のよい情報発信ができると同時に、項目別に必要なデータを抽出、拡大縮小することや、音声による解説も可能となり教材として使用の幅が広がると考える。この研究発表では、当学会の石崎賞を受賞することができ一定の評価を得られたものと確信している。

発表後では、認知症のある人の福祉機器展示館に常設展

示された旧支援年表を第5回認知症のある人の福祉機器シンポジウムに合わせ差し替えをした。今回の内容は、同研究所が収集した機器をICF国際生活分類に対応させて作成した表と、新支援年表を同一パネル上にレイアウトした。この目的は、支援年表の電子化に向けて、被験者の経過に使用可能な支援機器を対応させ具体的症状に即した電子カタログ化が図れないか確認する意味もある。支援年表とその解説書は、さらに完成に向け試用を重ねる必要がある。そのために介護福祉士の研修¹²⁾、ならびに介護福祉士を養成する教育機関¹³⁾や、福祉住環境コーディネーター資格取得者に向けて試用の準備を進めているところである。

謝辞

本研究は、ひとりの被験者の在宅認知症介護の環境調整から、多くの認知症患者を対象とする研究に進展することができた。これらの研究基盤は、2006年度から2008年度の文明研究所個別プロジェクトの助成によるものである。歴代の研究リーダー、水野雅生教授、渡辺哲生教授、申珠莉教授ならびに文明研究所所員の方々、助言やデータの提供をして頂いた東海大学医療技術短期大学の新村直子講師、日本赤十字社埼玉支部特別養護老人ホーム彩華園の五十川さとみ介護指導員に文末ながら心から敬意を表します。

注

- 1) 平井俊策（2006）『老年認知症ナビゲーター』pp276-277、メジカルビュー社。
- 2) 症状に効果があると示す証拠をエビデンスという医療用語。斉藤正彦（2006）「認知症における非薬物療法研究の課題と展望」『老年精神医学雑誌』17：pp711-717。
- 3) 山崎正人（2007）「超高齢化社会の問題と対策 在宅認知症介護におけるデザイン系環境配慮の可能性」『文明』11-12 合併号：pp51-63、東海大学文明研究所。
- 4) ・（社）愛知県医療法人協会主催、第1回QOL研修会にて「3つのデザインが支えた認知症介護」をテーマに講演、事例のスライドと会場内に支援年表を掲示、2008年9月。
・全国グループホーム協会主催、第4回認知症介護実践研修にて「認知症の在宅介護環境の重要性について」講演、事例のスライドと会場内に支援年表を掲示、2008年12月。
・神奈川県秦野市役所主催、介護者セミナーにて「認知症の在宅環境の事例報告」講師、事例のスライドと会場内に支援年表を掲示、2009年3月に2回開催。
- 5) ・（独）千葉労災病院主催、機器・デザイン・通信・ITによる新しい支援法シンポジウムにて「在宅認知症介護におけるデザイン系環境配慮の展開」について講演、事例の

スライドと会場内に支援年表を掲示，2007年2月。

- ・国立障害者リハビリテーションセンター研究所主催，第2回認知症のある人の福祉機器シンポジウムにて「道具・空間・視覚伝達系デザインを取り入れた実母の在宅ケア実践例」をテーマに講演，事例のスライドと会場内に支援年表を掲示，2007年12月。
 - ・第52回ヒューマンインターフェイス学会ノンバーバル研究会，高齢者の認知機能保障技術部門にて「デザイン領域が関与した在宅認知症介護の縦断研究」をテーマに研究報告をした，事例のスライドのみ，2008年12月。
 - ・(独) 科学技術振興機構 JST イノベーションプラザ東海主催，第2回認知症高齢者コミュニケーション支援機器開発研究会にて「在宅認知症介護におけるデザイン系環境配慮の展開」をテーマに研究報告をした，2007年12月。
 - ・(独) 科学技術振興機構 JST イノベーションプラザ東海主催，第4回認知症高齢者コミュニケーション支援機器開発研究会にて「在宅認知症介護におけるデザイン領域の役割，環境配慮研究の展開にみる支援機器開発」テーマに研究報告をした，2009年2月。
 - ・(国) 京都工芸繊維大学総合，プロセス研究センター主催，記憶障害と認知症の型への工学支援 最新技術によるケアの可能性を探るシンポジウムにて「認知症ケアにおけるヒト・モノ・バをつなぐデザインの役割」をテーマに講演，事例のスライドと会場内に支援年表を掲示，2009年3月。
- 6) 桑原教彰(2006)「TV 電話とコンテンツ共有を用いた高齢者への遠隔からの対話や回想法を可能とするシステムの実現と評価」『ヒューマンインターフェイス学会誌』9-3，：pp41-52。
 - 7) 安田清，(2006)「認知症に対する Low テクを使った情報支援や心理・感情支援」『ヒューマンインターフェイス学会研究報告集』。 安田清(2008)「三次元計測を利用したトイレ動作支援システム：トイレ模擬環境での評価」『第22回人工知能学会大会』3I3-06。
 - 8) 石渡利奈(2010) 国立障害者リハビリテーション研究所主催，第5回認知症のある人の福祉機器シンポジウム研究報告。
 - 9) 石渡利奈(2008)「発話分析による認知症者への情報呈示手法の提案と実践例」『ヒューマンインターフェイス学会研究報告集』1.1.6：pp31-36。
 - 10) 山崎正人(2008)「本人・家族を支えたもう1つの力」『訪問看護と介護』 ヒト・モノ・バをつなぐ認知症ケア今日のデザインの役割1，13(7)：pp592-595，医学書院。
山崎正人(2008)「環境配慮(工夫)の原点」『訪問看護と介護』 ヒト・モノ・バをつなぐ認知症ケア今日のデザインの役割2，13(8)：pp686-689，医学書院。
山崎正人(2008)「手探りの初期支援-1」『訪問看護と介護』 ヒト・モノ・バをつなぐ認知症ケア今日のデザインの役割3，13(9)：pp778-779，医学書院。
山崎正人(2008)「手探りの初期支援-2」『訪問看護と介護』 ヒト・モノ・バをつなぐ認知症ケア今日のデザインの役割4，13(10)：pp850-855，医学書院。
山崎正人(2008)「自立支援とその周辺-1」『訪問看護と介護』 ヒト・モノ・バをつなぐ認知症ケア今日のデザイ

ンの役割5，13(11)：pp938-941，医学書院。

- 山崎正人(2008)「自立支援とその周辺-2」『訪問看護と介護』 ヒト・モノ・バをつなぐ認知症ケア今日のデザインの役割6，13(12)：pp1040-1043，医学書院。
山崎正人(2009)「看護と介護，デザインと共通する視点」『訪問看護と介護』 ヒト・モノ・バをつなぐ認知症ケア今日のデザインの役割7，14(1)：pp68-71，医学書院。
山崎正人(2009)「介護者とデザインによる排泄支援」『訪問看護と介護』 ヒト・モノ・バをつなぐ認知症ケア今日のデザインの役割8，14(2)：pp164-167，医学書院。
山崎正人(2009)「徘徊の対処と必要な情報-1」『訪問看護と介護』 ヒト・モノ・バをつなぐ認知症ケア今日のデザインの役割9，14(3)：pp234-237，医学書院。
山崎正人(2009)「徘徊の対処と必要な情報-2」『訪問看護と介護』 ヒト・モノ・バをつなぐ認知症ケア今日のデザインの役割10，14(4)：pp334-337，医学書院。
山崎正人(2009)「家族心理の整理と支援の検証-1」『訪問看護と介護』 ヒト・モノ・バをつなぐ認知症ケア今日のデザインの役割11，14(5)：pp420-423，医学書院。
山崎正人(2009)「家族心理の整理と支援の検証-2」『訪問看護と介護』 ヒト・モノ・バをつなぐ認知症ケア今日のデザインの役割12，14(6)：pp506-509，医学書院。
山崎正人(2009)「支援研究の実践と情報発信の課題」『訪問看護と介護』 ヒト・モノ・バをつなぐ認知症ケア今日のデザインの役割13，14(7)：pp610-613，医学書院。
山崎正人(2009)「介護サービスの利用と関連する関係づくり」『訪問看護と介護』 ヒト・モノ・バをつなぐ認知症ケア今日のデザインの役割14，14(8)：pp712-715，医学書院。
山崎正人(2009)「超高齢者社会のなかのデザインの役割」『訪問看護と介護』 ヒト・モノ・バをつなぐ認知症ケア今日のデザインの役割15，14(9)：pp806-809，医学書院。
- 11) 第52回ヒューマンインターフェイス学会ノンバーバル研究会，高齢者の認知機能保障技術部門にて事例報告と認知症介護のなかで必要な機器開発と機器普及の課題について提案をおこなった。
 - 12) 社会福祉法人 全国社会福祉協議会 介護福祉士ファーストステップ研修，岐阜県，コミュニケーション技術の応用的な展開(認知症)講座にて新支援年表を使用する予定。
 - 13) 東海大学健康科学部社会福祉学科，介護福祉士養成の授業で新支援年表を使用する予定。

現代の表現における個と社会

「GPS 機能および携帯電話を利用したインタラクティブ・コミュニケーションの可能性」

—— プロジェクト総論 ——

池村明生 東海大学教養学部芸術学科教授

[プロジェクト報告]

A Modern Expression of an Individual Society

The possibilities of interactive communication using GPS technology and mobile phones

Akio IKEMURA

Professor, Department of Arts, School of Humanities and Culture, Tokai University

We constructed the PICTORI network system on the hypothesis that the following two points might stimulate user participation. The first point is that an open system would insure trustworthiness while protecting the anonymity of users. The second is creating an entertainment design that would accelerate user interest and enrollment through playing, or engaging with the technology. This paper intends to analyze and clarify what effects were produced by these systems and designs.

Accepted, May. 6, 2010

社会化する芸術表現

個（私）の形成を前提に発展してきた近代芸術は、今や、情報化の進展とともに大きくかたちを変えようとしている。

絵画や彫刻といった古くから続く芸術表現においては、何を表現するか、どのように制作するかといった、発想から表現までの一連の芸術活動はすべて制作者である個（私）に宿る意思と技術を基本としてきたが、情報ネットワークの整備によりグローバルに、また有機的につながる現代社会においては、個（私）という一人称の制作者から、集団（みんな）という三人称の制作者に変化し、作品そのものも制作物としての“モノ”から、プロセスとしての“コト”に変わりつつある。

これらの変化は、インターネットや携帯電話といった情報テクノロジーの発達に関わっていると思われるが、技術的な革新のみならず、現代社会を生きる人々の芸術に対する受け容れ方にも大きく影響していると思われる。それは個々人が感じとる芸術との距離が縮まり、芸術的価値を他者（芸術家）から受け容れようとする保守的な態度から、自ら芸術行為にかかわり芸術的価値を謳歌しようとする積極的な姿勢へと変わったことにある。“アート”や“デザイン”，さらに“クリエイティブ”というワードが市民主体の言葉となり、誰もが日常的に利用できるテクノロジーが発達したことで、芸術表現そのものが開放されはじめ社会化されてきたと捉えることがで

きる。

遊びを活かす共有感の醸成

社会化する芸術表現は、個（私）の意思と技術を基本とした作品（モノ）から、集団（みんな）による偶発的で曖昧な作品（コト）に変わり、芸術的な視野に立つ者（芸術家に限らず）が想定するシナリオに基づき、新しいネットワークが形成されながら芸術表現が行われる。そしてそのプロセスでは、見ず知らずの人同士がつながりあうために「遊び」が重視される。

現代社会においてこの「遊び」は、人と人をつなぐきっかけとなり、現代社会が抱える閉塞感、さらに現代社会を生きる人々誰もが感じる心の不安を紛らわす求心的なテーマとなる。「遊び」をオンラインゲームなどに代表される仮想体験による非現実的な社会への逃避と捉えることもできるが、社会化する芸術表現がめざす「遊び」は、現実社会におけるリアルな体験を目標とする。たとえテクノロジーを利用したとしても非現実社会に迷い込むのではなく、現代社会を生きる人同士がつながりあう共有感の醸成に芸術的価値を見出す。逆に捉えれば、このような芸術表現が生まれる背景には、人と人との希薄な関係、コミュニティ意識の欠如を伴う社会が存在し、より個人化に向かおうとするパーソナル志向の価値観と同時に、様々な社会や情報とつながろうとするグローバルな世界観のズレ（＝ギャップ）において不安を抱き続ける現代人の心理が現れている。

受理日：2010年5月6日

「遊び」と「テクノロジー」の融合

「現代の表現における個と社会ー GPS 機能および携帯電話を利用したインタラクティブ・コミュニケーションの可能性ー」は、上記で述べた社会化する芸術表現の実践を趣旨に推進されたプロジェクトである。『絵しりとり』という誰もが気軽に参加できる「遊び」をテーマに、『GPS』（グローバル・ポジショニング・システム）というコミュニティを感じさせる「テクノロジー」、さらに『携帯電話』というパーソナルツールを利用して、「現代の表現における個と社会」との関係を探る実験であった。そして推進にあたっては、東海大学教養学部芸術学科と東海大学工学研究科情報理工学専攻の教員および学生の参加により、文理融合型プロジェクトとして実施された。

○実証実験の概要

名称 PICTORI

概要 見ず知らずの人が携帯電話を利用して「画像」と「ワード」入力しながら、インタラクティブなかたちで遊ぶことのできる『絵しりとり』ゲーム

実施 a. 携帯電話用の専用サイトの構築
b. GPS マップにおける専用サイト情報の出力

○参加プログラム

- 1) QRコードを利用してカメラ付携帯電話から専用サイトにアクセス
- 2) 専用サイトの最新情報を確認して投稿用作成画面をクリック
- 3) 投稿用作成画面に最新ワードにつながる“しりとりワード”を入力
- 4) 投稿用作成画面に GPS 情報を付加
- 5) 投稿用作成画面に“しりとりワード”を表す画像を添付
- 6) 上記情報をメール送信
- 7) 専用サイトにて更新ボタンをクリックして投稿情報を確認

「個」の維持と「社会」への開放に向けて

見ず知らずの人同士が芸術表現という共同作業を行うに

は目的と意義が必要となる。今回のプロジェクトにおいては“つながりあうこと”，また『絵しりとり』を“途切れさせないこと”が目的となり、『絵しりとり』という「遊び」に対する欲求が参加者それぞれの意義となった。『GPS』マップによって映し出された映像からは、現代社会を生きる人々の存在が確認され、見ず知らずの人同士のコミュニケーションの足跡が現れた。そしてこの実験において芸術表現を成立させた重要なファクターは『携帯電話』であった。

現代社会を生きる人々にとって最も関心の高い価値観は「個」（私）である。「国家→組織→地域→家庭」といった戦後から続く価値観の変化は、今や「個」という最小単位の殻に宿りつつある。パーソナルツールとして利用された『携帯電話』は、その不安定な「個」の状態を守りながらも、一方で臆することなく「社会」への開放を実現させた。そして『GPS』は見ず知らずの人同士の共同作業を映し出すシステムとして、参加者相互のコミュニティ意識を高める鏡となった。

時代とともに芸術表現は様々なかたちに変化すると思われるが、すべての人々が「個」（私）という価値観に関心を示す現代社会においては、「個」（私）の維持と「社会」（みんな）への開放に向けた芸術表現が必要となり、参加を誘発するための「遊び」と、人と人とがつながりあうためのパーソナルで、かつソーシャルな「テクノロジー」の利用が求められていく。



写真 直径2.4mの円形スクリーンに映し出された GPS マップ画像

現代の表現における個と社会

「GPS 機能および携帯電話を利用したインタラクティブ・コミュニケーションの可能性」

—— PICTORI: 位置と時間の共有によるゆるやかなコミュニケーション ——

内田 理 東海大学情報理工学部情報科学科准教授

[プロジェクト報告]

A Modern Expression of an Individual Society

The possibilities of interactive communication using GPS technology and mobile phones:

PICTORI: Instant Communication Based on Location and Time Sharing

Osamu UCHIDA

Associate Professor, Department of Human and Information Science, School of Information
Science and Technology, Tokai University

This study investigates a new style of communication with a mobile phone camera and the phone's GPS functions. Specifically, the study is based on the assumption that a community will be formed with people sharing the same location and time even though they do not know each other in the real world. In addition, this study has developed an interactive communication game called PICTORI (PICture shiriTORI), which creates a community to play in – just like the real world, in which close friends play. In this game, with the GPS function on the mobile phone, users send their present locations to the system, and only when the users stay within a specified range, they are allowed to participate in the shiritori game. In other words, it is a game designed to allow fellow users in nearby locations to play shiritori with a feeling of friendship even though they may be strangers to one another. The verification experiment observed active gaming and communication taking place even among users who were strangers.

Accepted, May. 6, 2010

はじめに

現在, MySpace や Twitter, mixi などの SNS (Social Network Service) や Flickr, YouTube に代表される写真・動画投稿サイト, はてなブックマークなどのソーシャルブックマークサイトなど, social web に関連する様々なインターネットサービスが拡がりを見せている. これらのサービスにおいては, 趣味や嗜好, 属性が似た者同士が「コミュニティ」と呼ばれる集団にグルーピングされ, まるで現実社会における社会ネットワーク (いわゆる「友達の輪」) の中で行われるようなコミュニケーション (情報交換や情報共有) がなされている.

一方, 携帯電話の通信速度高速化や高機能化に伴い, 携帯電話向けのインターネットサービスが急増している. 近年日本で発売される携帯電話のほぼ全てにカメラが内蔵されているほか, GPS (Global Positioning System) 機能や電子マネー機能なども普及が進んでいる. 特に GPS 機能を利用したインターネットサービスに関しては, 目的地まで地図を用いて誘導するサービスや現在地に近い飲食店の情報を提供

するサービスなど, 既に多くのサービスが提供されている.

今回, 携帯電話のカメラ機能と GPS 機能を利用した新しいコミュニケーションに関して検討を行った. 具体的には, 位置と時間を共有する者同士には現実社会では知らない者同士であっても一種のコミュニティが形成されるであろうという仮定に基づき, そのコミュニティ内でまるで現実社会での友達同士のようにプレイする, インタラクティブ・コミュニケーションゲーム PICTORI (PICture shiriTORI) の開発に取り組んだ. このゲームでは, ユーザは携帯電話の GPS 機能を利用して自身の現在位置をシステムに送信し, 指定された範囲内にいる場合のみ携帯電話のカメラで撮影した写真を利用したしりとりゲームへの参加が許可される. すなわち, 見ず知らずでありながら近い位置にいるユーザ同士が, 友達感覚でしりとりをするゲームである. 単なるゲームではなくしりとりであるため, このゲームを通して, ゆるやかな形のコミュニケーションが成立すると考えられる. 今回は実際にシステムを実装し, 見ず知らずの人とコミュニケーションが成立するかについて検証を行ったので報告する.

受理日: 2010 年 5 月 6 日

関連研究

位置情報を利用したコミュニケーションシステムに関しては、近年活発な研究がなされている。例えば、上田らは GPS 機能及びカメラ機能の付いた携帯電話を用いて写真情報を WebGIS (Geographic Information System) に投稿できるシステムを開発した^[1]。上松らは、位置情報付きの情報を GPS 機能付き携帯電話から投稿可能な Weblog システム^[2]や、それらを活用したコミュニケーション支援システム^[3]を提案している。暦本らは、WiFi アクセスポイントを利用した位置認識手法 (Place Engine) を開発し、それを用いたコミュニケーションの可能性を指摘している^[4]。また、携帯電話を利用して写真やメッセージを地図上に投稿し、友達同士でそれを共有することによりコミュニケーションを図る loc8r (<http://loc8r.jp/>) というサービスも提供されている^[5]。

本研究は上田らの研究^[1]と類似性が高いが、上田らの研究の目的が主として携帯電話で撮影した街角情報の投稿であるのに対し、本研究で開発するゲームの主たる目的は、携帯電話で撮影した写真によるしりとりを通した、近接位置にいる人との「ゆるやかな」コミュニケーションである。また、loc8r も携帯電話の GPS 機能を用いて地図上に写真を投稿しコミュニケーションを図るものであるが、本研究と違い現実社会での友達とコミュニケーションをはかる事を主な目的としている。

PICTORI の概要

本研究で構築したシステム (PICTORI) の流れを以下に説明する。ユーザはまず、携帯電話の GPS 機能を用いてシステムに経緯度情報を送信する。システムがあらかじめ設定した範囲内にいる場合には、ゲームへの参加が許可され、現在のしりとり画面 (メイン画面) が表示される (図 1)。ユーザは携帯電話のカメラを利用して写真を撮影したり、携帯電話内に保存されている写真からしりとり可能なものを探しだし、その写真をメールに添付してシステムに送信する (本文にはしりとり言葉を記載する)。システムは、投稿されたメールから写真としりとり言葉を抽出し、メイン画面を更新する。本研究では、Linux サーバ上に PHP 言語を利用してシステムの実装を行った。また、地図上にしりとりの様子をリアルタイムにマッピングする Flash コンテンツを、ActionScript を利



図 1 PICTORI のメイン画面

用して作成した。

検証実験

本システムの検証実験を、2008 年 10 月 18 日、19 日に横浜市にて実施した。利用案内パンフレットを配布して不特定多数の人に利用してもらい、ゲームへの参加がどの程度なされるか、すなわち見ず知らずの人とのゆるやかな形でのコミュニケーションがどの程度進むかどうかを確認した。なお、今回の検証実験では、ユーザが最初に行う経緯度情報送信を省略し、メール送信の際に経緯度情報を本文中に添付する形式で実施した。

実験結果について以下に考察する。二日間でおおよそ 90 件程度のしりとり投稿がなされたことから、見ず知らずのユーザ同士で活発なコミュニケーションが行われたと思われる。また各地点で撮影した写真も多く利用されており、位置連動型のコミュニケーションがなされたと解釈することができる。ユーザからは、おおむね面白いとの評価が得られた。しかし、GPS 機能を利用する事を面倒であるとコメントするユーザもあり、これに関しては今後の検討課題として残された。

まとめ

本研究では、位置的关系と時間を共有する者同士には一種のコミュニティが形成されるであろうという仮定に基づき、そのコミュニティ内で友達同士のようにプレイする、インタラクティブ・コミュニケーションゲーム「PICTORI」の開発に取り組んだ。検証実験により、見ず知らずのユーザ同士でも活発なコミュニケーションがなされる事が確認できた。今後更に、このような位置的关系に基づくコミュニティを利用したコミュニケーションに関して検討を行っていきたい。

参考文献

- [1] 上田 紀之, 中西 泰人, 本江 正茂, 松川 昌平, “時空間ポエマー: GPS カメラケータイを用いた WebGIS の運用実験とその評価,” インタラクシオン 2004, 2004.
- [2] 上松大輝, 徳永徹郎, 沼晃介, 大向一輝, 武田英明, “場log: 位置情報に基づいた情報整理システム”, インタラクシオン 2004, 2004.
- [3] 上松大輝, 沼晃介, 濱崎雅弘, 大向一輝, 武田英明, “場所を手がかりとしたコミュニケーション支援”, インタラクシオン 2005, 2005.
- [4] 暦本純一, 塩野崎敦, 末吉隆彦, 味八木崇, “PlaceEngine: 実世界集合知に基づく WiFi 位置情報基盤”, インターネットコンファレンス 2006, pp.95-104, 2006.
- [5] loc8r (ロケイター), <http://loc8r.jp/>

現代の表現における個と社会

「GPS機能および携帯電話を利用したインタラクティブ・コミュニケーションの可能性」

—— ユーザがネットワークに参加するための仕組みとデザインに関する考察 ——

富田 誠 東海大学教養学部非常勤講師

[プロジェクト報告]

A Modern Expression of an Individual Society

The possibilities of interactive communication using GPS technology and mobile phones:

Considerations of systems and design for participating in the network

Makoto TOMITA

Lecturer, Department of Arts, School of Humanities and Culture, Tokai University

We constructed the PICTORI network system on the hypothesis that the following two points might stimulate user participation. The first point is that an open system would insure trustworthiness while protecting the anonymity of user. The second is creating an entertainment design that would accelerate the user's interest and enrollment by playing. This paper intends to analyze and clarify what effects produce an these system and design.

Accepted, May. 6, 2010

1. はじめに

近年, Information and Communication Technology (以下, ICT) の発達により, 「個」と「社会」は新しい関係を築きはじめている。ICT は「個」と「社会」あるいは, 「ウチ」と「ソト」ⁱ の関係を曖昧化させ, 見ず知らずの人々がネットワークを生み出す効果を持つ。本研究では, 携帯電話と GPS 機能を利用した個人の表現を通して, 特定の場所において見ず知らずの人々が情報を交換し共有するためのネットワーク構築を行った。本稿では, ユーザがネットワークにスムーズに参加できるための, 仕組みとデザインについて考察する。

2. 先行研究

近年, ICT を活用した地域におけるコミュニケーション創出に関する研究や事業が盛んに行われている。例えば, 庄司は, Social Networking System (以下, SNS) を利用した地域活性化のモデル化や効果検証に関して述べ, SNS は地域活性化に影響を及ぼすと考察したⁱⁱ。

このような, 個人が特定され現実世界の結びつきを強化する指向を持つ SNS に対し, 匿名性を特徴にもつ掲示板におけるコミュニケーションの研究においては, 松村らが国内最大規模の掲示板 2 ちゃんねるⁱⁱⁱの定量的な調査により無名的

な匿名性^{iv}が議論発散指向を持つ気軽なコミュニケーションに効果を与えることを明らかにした^v。無名的な匿名性の負の効果としては, 荒らしなどにみられるコミュニケーションの非成立や, 外部の人が入ることを困難にさせる集団極化現象が指摘されている。

本研究では, 非常に狭い地域において, 外部から訪れた「見知らぬ人」同士が短期間で繋がることを想定している。そのため, 個人が特定される SNS や, 無名的な匿名の掲示板は, システムとして不向きであると考えられた。また, Twitter 等のショートコメントサービスは本研究と親和性が高いものの, 普及度の問題やアカウント作成の手続きに問題があった。

また, 見ず知らずの人々がコミュニケーションを開始するためには, 関心付けが重要であろう。この点においては, インフォーマルコミュニケーション^{vi}に関する研究を参考にした。臼杵らの研究では, 偶発的なコミュニケーションを生み出すためには, 飲食物や雑誌類・玩具などの会話のきっかけとなる「言い訳オブジェクト」が必要であると述べ, コミュニケーションを生み出すゲームの開発と評価をおこなった^{vii}。本研究では, 見ず知らずの人々の関心付けや取込みを行うために, 共通の興味を持ちだす「遊び」に着目した。

以上の点を踏まえ, 「遊び」を取り入れた, オープンで信頼性を担保したシステムを構築することで, 人々の参加が促進されるネットワークを構築できるという仮説をもとに, インタ

受理日: 2010 年 5 月 6 日

ラクティブ・コミュニケーションゲーム PICTORI (PICture +shiriTORI の造語)の開発を行った。

3. 概要 制作したシステム

展示会場にはスクリーンが設置され、展示会場付近の地図が投影されている。地図上には、ユーザが投稿した写真がマッピングされている。興味を持ったユーザはパンフレットを見たり、スクリーンに写真を投稿する方法や携帯からのアクセス方法を説明員から聞いたりできる。

ユーザは、携帯電話と写真投稿に対応した掲示板に、携帯電話からアクセスできる。この掲示板では写真による「しりとり」が行われている。例えば、駅の写真を撮影したユーザがいれば、「駅」というタイトルと共にメールで投稿すると、次のユーザは「き」の付く身の回りの物、例えば「木」を撮影してタイトルと共に掲示板に掲載できる。携帯電話向けの掲示板だけではなく、ユーザから投稿された写真および写真のタイトルは、展示会場に設置されたスクリーンに表示される。スクリーンには、ユーザの撮影した写真の GPS 情報をもとに地図がマッピングされ、しり通りの流れがわかるように時系列で絵が表示される。

4. 結果：

オープンで信頼性のあるネットワーク

SNS や Twitter などのソーシャルメディアが近年急速に普及し始めている。これらはネットワーク効果ⁱⁱⁱを帯びており、コミュニティ同士の強い紐帯を生む。しかし、アカウントを作成しなければ、そのネットワークには加入できず、「友達登録」や「フォロー」などのコミュニティに参加するための登録手続きを踏まなければ、コミュニケーションが成立しないことが多い。

本システムは、SNS 等と異なり、アカウント作成などの煩わしさはなく、携帯のメール機能によって誰でも投稿ができる。また、掲示板には投稿者のアドレス等個人を特定されるものは表示されず、他のユーザに個人が特定される不安感がない。

しかし、ユーザ同士はお互いの顔は見えないものの、ユーザは会場に一度足を運んでいるため、ある種の「ウチ」の感覚を共有している。さらに、写真の投稿には携帯のメールから投稿するため、携帯のメールアドレス・写真データ・位

置情報といった個人を特定する情報を管理者に差し出した上で投稿する。これらの理由により、誹謗中傷などの無責任な投稿を防ぎ、ゲームの信頼性を担保させたと考えられる。

「しりとり」ゲームを用いたエンターテインメントデザイン

臼杵らの指摘するように、見ず知らずの人がコミュニケーションを行うためには、共通の話題を生み出す何かが必要となる。そこで、本システムでは写真でおこなう「しりとり」ゲームに関心付けや関心作りとして機能させた。

しりとりは、ほとんどの人が経験したことのあるゲームで、ルールも単純である。頭文字さえ合っていれば、何を投稿してもよい。この難しくないテーマの与えられ方がユーザの利用促進に影響を与えたと考えられる。また、ユーザが投稿した写真は、次のユーザのためのお題となる。そのため、次のユーザが何を投稿したのか気になり、継続的な利用に繋がる。

このように、遊び、ゲームの持つ「楽しさ」をきっかけとした、エンターテインメントデザイン^{iv}の手法を用いることで、ユーザの参画と継続的なネットワーク作りが達成されたと考えられる。

5. 考察

オープンで信頼性のあるネットワーク、そして、遊びを活かしたユーザの関心付けと取り込みによって、見ず知らずの人々がネットワークを構築した事例を説明した。今後は比較検証や定量的な実証分析を通して、具体的な手法と効果検証を行う必要があるだろう。

本研究のテーマである「個」と「社会」のギャップを埋めるためには、「個」という「ウチ」を緩やかに「ソト」化させ、社会という「ソト」を緩やかに「ウチ」化させる必要があるのかもしれない。このとき、場所性を活かした、オープンで信頼性のあるネットワーク構築と「遊び」を活かしたエンターテインメントデザインの手法は、重要な役割を果たすと考えられる。

注

- i ここでは、「ウチ」を、「かかわりの関係」(牧野 1996)として捉え、ネットワーク空間上でお互いが関わりを持つと認識する領域とする。
- ii 庄司昌彦,「地域 SNS サイトの実態把握, 地域活性化の可能性」, 情報通信政策研究プログラム研究成果論文, 2008 年 3 月。
- iii 掲示板 2 ちゃんねるのウェブサイト <http://www.2ch.net/>
- iv 実名を明かさずに、仮の名前(ハンドルネーム)を名乗る

ことを仮名的な匿名性、個人の特定する情報を全く明かさ
ないことを無名的な匿名性と呼ぶ。

- v 松村真宏，三浦麻子，柴内康文，大澤幸生，石塚 満，「2
ちゃんねるが盛り上がるダイナミズム」情報処理学会論文
誌，2004.
- vi ここでは，インフォーマルコミュニケーションを「あらか
じめ定義されておらず，具体的な議題や決定すべき目標，
式次第などが存在しない，偶発的に発生するコミュニケー
ション」(西本 2006)として定義している。
- vii 臼杵正郎，西本一志，杉山公造，「サイバー囲炉裏を導入
した共有インフォーマル空間の観察実験の結果と考察」，
日本創造学会論文誌，Vol.8, p 36-48, 2004.
- viii ここでいうネットワーク効果とはネットワーク外部性によ
る効果 :Network Effects を指す。ネットワークに加入した
者は，より多くの他者がそのネットワークに参加すること
で，便益が増加する。
- ix エンターテイメントデザインは，アニメやゲームだけに限
らず，楽しさをきっかけとして，豊かな生活を生み出すた
めの，さまざまなモノやコト，スペースにおける企画・ク
リエーションの方法を指す。東海大学教養学部芸術学科デ
ザイン学課程の中の一つのコースであるエンターテイン
トデザインコースにおいて，研究・実践がされている。

公共コミュニケーションにおける地域協働の可能性

河井孝仁 東海大学文学部広報メディア学科教授

[プロジェクト報告]

The Possibility of Local Collaboration in Public Communication

Takayoshi KAWAI

Professor, Department of Media Studies, School of Letters Tokai University

Diffusion of the sense of belonging to the community, reform in central/local government relations and the resulting change in public finances, rapid progress of municipal mergers, as well as low birthrates and the growing longevity of residents, are the major issues surrounding local areas. The latest global economic crisis makes it increasingly difficult to properly respond to these issues. In such a situation, many local governments are attempting what can be called branding of city and local regional images. We label what represents these actions with the words "city promotion". We define a city promotion as "Soliciting the charm of the area effectively the inside of the area, and outside the area, and enabling practical use of resources, such as a person, a thing, gold, and information, inside the area by it, in order to develop the area continuously." By investigating this phenomenon, we examine the possibilities of sustainable development of local areas.

Accepted, Dec. 2, 2010

I 地域協働を基礎にしたシティプロモーション

地域が置かれている現状として、地方分権に関わる三位一体の改革、それによる財政的な課題、平成の大合併、さらに趨勢としての少子高齢化、ハイブリッド・コミュニティに基づく市民の地域への帰属意識の拡散がある。最近の世界的な経済危機はこうした課題への対応をさらに困難にしている。

そのようななかで、多様な自治体がシティセールス、地域イメージのブランド化に取り組んでいる。神奈川県川崎市などではシティセールス戦略プランが策定され、静岡県浜松市ではシティプロモーション事業の推進が掲げられている。政令指定都市以外にも長野県塩尻市では地域イメージのブランド化戦略が動きだしている。

本論では、これらの動きをシティプロモーションという言葉で代表させ「地域を持続的に発展させるために、地域の魅力を地域内外に効果的に訴求し、それにより、人材、物財、資金、情報などの資源を地域内部で活用可能としていくこと」と定義しつつ考えていく。

三重県鈴鹿市の事例を提示する。鈴鹿市は第2次行財政経営計画において「シティセールスに関する事業」を戦略的事業の一つとして位置付けている。

この事業展開の基礎には、2005年11月に市役所内に立ち上げられたワーキンググループがある。ここでの議論をもとに提示された、鈴鹿市シティセールス戦略「すずかブランドと・き・め・き戦略」は、パブリックコメントの実施、市議会への報告を経て2007年7月にまとめられた。

鈴鹿市はなぜ、シティセールスに取り組むことになったのだろう。それは全国各地で多様に展開されているシティセールス、シティプロモーションが必要とされる理由と共通している。

では、鈴鹿市はどのような取り組みを行うことで「地域の魅力を地域内外に効果的に訴求し、それにより、人材、物財、資金、情報などの資源を活用可能」しようとしているのか。

鈴鹿市では市長によるトップセールスをはじめとした多彩な活動を展開している。そのなかで「SUZUKA と・き・め・きファン倶楽部」（以下「ファン倶楽部」）に注目する。ファン倶楽部は、2008年7月17日に設立された。市が事務局を務める「鈴鹿市が好きで、自主的に鈴鹿の魅力をPRする個人が集まった鈴鹿市のサポーターズクラブ」である。ファン倶楽部は目的に賛同する個人が誰でも登録でき、既に約350人以上が参加している。

さらに2009年1月にはウェブページも作られた。これによって「規約」に定められた「会員の役割」の冒頭にある「鈴鹿市の魅力を伝えるホームページでの情報発信」のツールが用意されたことになる。鈴鹿市のシティプロモーションにおいて、

このファンクラブが重視されていることは、会員数が鈴鹿市のシティプロモーションの成果指標となっていることから明らかである。2008 年度に 100 人の登録人数を目標数値としていたことを考えれば、十分な成果を挙げていることになる。

一方で、目標を大きく上回る登録者に比較して「鈴鹿市の魅力を伝えるホームページでの情報発信」は必ずしも進捗していない状況もある。もちろん、インターネットでの情報発信がすべてではなく、紙媒体『と・き・め・き通信』による情報提供や、顔をあわせた口コミ情報の発信が期待されることもあるだろう。しかし、インターネットという場が活発であることは、新しい資源の発見や、その流通、共有にとって小さくない意味を持っている。その意味ではファンクラブには超えていくべき課題が残されている。

多くの市民は特派員として登録したとしても、常に地域について考えているわけではない。より日常的な思いが発信可能な仕組みを検討する必要があるだろう。

II 地域メディアが果たす地域協働

そのような仕掛けを用意しているものとして、和歌山県田辺市を主な販売地域とし、3 万 8000 部を日刊で発行している地方新聞紀伊民報の取り組みがある。生活情報サイト KiiLife と地域 SNS みかんを連携させ、さらにみかんに「子育て支援事業」や子育て応援サイト「あがらキッズタウン」、オープンサイトとしての和歌山スポーツを連動させている。

こうした連携はウェブサイトには止まらない。SNS みかん内で年末年始時期に飲食店などの期間限定コミュニティを構築し、そこから出された情報をフリーペーパー「キーライフ・プラス」に反映させている。このような期間限定コミュニティだけではなく、コミュニティのトピックや写真を公開サイトに掲載することで、閉じられた SNS から開かれたサイト、フリーペーパーへの流路を持っていることが特徴である。これによって、地域の魅力を発信する特派員としての意欲を常に持たなくても、日常の書き込みが地域の魅力構築のモジュールとなる仕組みが構成されている。さらに、紀伊民報のこうした取り組みは、地域商店にとっては広告としての意義を持ち、地域内外との経済的循環が果たされていることにも注目すべきだろう。

紀伊民報が地域協働を基礎にして果たしている地域魅力の訴求についてあらためて考察する。

紀伊民報の一連の取り組みは、ウェブを利用した消費者による情報発信を基礎とする。そのうえで、新聞社が持っている編集力及び取材力、それに培われた信頼の力によって価値を付与され、他とは差別化された流路、出口を持つことに特徴がある。しかも、この出口が地域商店の広告サイトとなることで、経営的には困難になりがちな SNS やコミュニティサイトを収益的に持続させる仕組みになっていることが注目される。

地方紙は多様なメディアの簇生のなかで、必ずしも容易な状況にはない。そうしたなかで、地方紙は単に記事の配送者にとどまっていたは新しい展開は望めないだろう。紀伊民報は個別記事のデリバリーを行うにとどまらず、記事を自らの資源として生まれた読者・市民とのやりとりを見える化している。この見える化が、地域の資源の豊富化につながる。

ここでの記事を自らの資源とするとは、記事をデータベース化するという意味ではない。紀伊民報が充実した記事配信を行うことで信頼感や地域性を持つこと。そのこと自身が資源となる。これによって、記事や紙面は地域における信頼感を創るための素材となる。その信頼感や地域性が財産となって、市民による多様な情報発信を呼び込むことになる。

紀伊民報の信頼感をテコに地域 SNS みかんに参加したメンバーは、あらためての地域特派員という発想は持たないまま、日常的な情報発信を行う。そこに蓄積されていくライフログが重要な意味を持つことになる。地域 SNS を経営的に成功させるためには的確な広告モデルが必要になる。ライフログは新たな広告モデルにとって必要なパーソナルターゲティングの重要なツールとなり、どのような推奨を行うべきかを明らかにする。また、多様な情報発信を行う市民にとって、彼が過去にどのような記事を書いたのかがライフログによって明らかとなることは、いわば発信者にとっての「身元保証」にもなる。彼らの情報をどのように読めばいいかの羅針盤の役目も果たすことになる。

紀伊民報が地域 SNS みかんのコミュニティを基礎としつつ、他からの情報を組合せた子育て支援情報サイトを運用していることにも、地域魅力の発信の視点から着目できる。子育て支援が十分でない自治体は住みやすいまちではない。また、そのことが十分に伝達されていなければならない。しかし、十分な子育て支援情報を集積できる NPO が存在しない地域もある。その際に地方紙のもっている取材力や編集力、

地域性などは重要な支援になる。

これらを踏まえるなら、紀伊民報での取材において語られた「利用者は自分たちのサイトを作っているつもりで、いつのまにか紀伊民報が持つサイトのコンテンツを豊富化している」という点はきわめて重要である。地域を、暮らしやすい、魅力ある場所にするための編集素材の集積が地域メディアとしての地方紙で行われていることに注目できる。

こうした地方紙の取り組みの他事例として、河北新報が展開する地域 SNS ふらっとがある。信頼資源を持つ地方新聞社が SNS を運営することを利点としている。可能であれば、地域 SNS と河北新報の記事データベースを資源として、多様な情報編集が行われることが期待される。その結果として、多様な編集主体が存在すること、それらを並列させ見える化することができれば、自身にも可能であるとの印象をつくりだし、さらに新たな参加を誘発することが可能になるだろう。

従来、市民や消費者による情報発信は CGM = コンシューマー・ジェネレイテッド・メディアとして一括されてきた。しかし、CGM は、市民が構築したプラットフォーム (CGP) に集積された、市民が生み出したコンテンツ (CGC) を、市民が編集 (CGE = コンシューマー・ジェネレイテッド・エディション) したものとして考えることができる。

また、この CGP (プラットフォーム構築)、CGC (コンテンツ形成)、CGE (編集) は常に一括して行われる必要はない。実際にも、現在、CGM と呼ばれるものの多くは企業や行政が用意したプラットフォームに、市民がコンテンツを掲載するものに止まっている。

紀伊民報や河北新報の発想を一步進めることができるならば、既存の記事データベースと多様に発信された CGC (コンテンツ) を基礎に、市民が編集を行う CGE の試みが誘発され、地域の魅力発信につながっていくことが期待される。

市民がフルタイムジェネレーターにはなれないことを前提としたとき、地方新聞社という媒体はフルタイムに働けることを大きな価値として訴求できる。地方新聞が、多様な知を掘り出し、市民による編集を促すことで、連携して新たな集合知を作る溶鉱炉になる可能性も具体的な形で検討されるべきではないか。

Ⅲ 地域イメージのブランド化と編集

長野県塩尻市の事例を提示する。塩尻には世界的に注目

を集めることのできる素材がある。市内桔梗ヶ原で生産される葡萄を用いたワイン「桔梗ヶ原メルロー」は 1989 年のリュブリアーナ国際ワインコンクール大金賞受賞を嚆矢として数多くのワインコンクールで継続して高い評価を得ている。

また、文部科学省が選定した重要伝統的建造物群保存地区である奈良井宿も、塩尻市が 2005 年に当時の桧川村と合併したことで市内の重要な観光地となった。さらにその桧川村及び周辺でつくられている伝統工芸品の木曾漆器も存在する。その他にもレタスなどの高原野菜の安定的生産、美味でありながら栽培が困難なため希少価値のある野生果実「さるなし」の自生、今後の IT 産業を支える組み込みソフトウェアのインキュベーション施設「SIP」の存在など、塩尻市は注目すべき素材を豊富に持っている地域である。

しかし、その塩尻市の地域イメージが強いものとならず、地域内外への訴求に成功していないのはなぜか。

本論では、その理由を「編集」が十分に行われていなかったという点に求める。桔梗ヶ原、奈良井宿、木曾という地域、ワイン、漆器、レタス、さるなしという産品、組み込みソフトという技術がそれぞれに存在し、「塩尻」という結晶に結びついていなかったのではないか。

ワインや漆器がそれぞれ売上を伸ばし、奈良井宿への観光客が増えればそれでいい、ということではない。「編集」によって塩尻という地域イメージの強化が求められる理由は「地域経営」という言葉にあると考える。

地域は市民を主権者とし、行政や企業、非営利団体を代理人とし、それぞれの主体の連携、協働、相互評価によって経営されることが必要である。それがなければ、市としての資源をどのように各素材に投入するのか、考え得るリスクに対してどのように備えるのか、市民としての納得が得られない。訪れたいまち、住みたいまち、住み続けたいまちとなるためには、市民としての納得が必要だと考える。

塩尻市では、自らの地域イメージの弱さという課題を調査によって確認し、地域としての魅力を訴求するためのコンセプト形成を図って 2007 年に塩尻地域ブランド戦略を策定した。さらに、2008 年 4 月には具体的な「編集」作業を実現する組織として経済事業部ブランド推進室を立ち上げている。

塩尻市地域ブランド戦略を確認しつつ、具体的な編集活動を確認していく。

地域についてのブランド化については、地域産品のブラン

ド化の試みがある。2006年に行われた商標登録制度の改正によって地域名称＋産品という登録が簡易にできるようになった。これを受けて多くの地域で産品の登録が「地域団体商標」として実施された。関あじ、関さば、松阪牛など多くの商標が登録されている。木曾漆器も登録された地域団体商標の一つである。

しかし、塩尻市地域ブランド戦略では地域産品のブランド化を軸に据えることはなかった。塩尻市は地域イメージのブランド化を選択している。多様な資源を持つ塩尻市を一つの産品で代表させるのではなく、資源を連携させ、編集することによって産み出される地域イメージを築こうとした。それによって、塩尻市を訪れたい地域、住みたい地域にしようという戦略である。

地域はさまざまなステークホルダーによって成立している。有名な産品があったとしても、それとは関わりなく生活している人も少なくない。主権者である市民の納得を得なければ地域をいきいきと成長させていくことはできないであろう。塩尻市の選択は市民の思いを地域の将来につなげていくために重要な意義を持つと考える。

戦略は目標を必要とする。塩尻市は目標を定住人口の増加に置いた。塩尻市地域ブランド戦略はその道筋を地域イメージのブランド化を動因として明確に提示しようとしている。

ただし、本論としては別の考え方も提示できる。趨勢としての少子化が進む日本において定住人口の増加は容易な道ではない。もうひとつの「人口」を目標とすることも有効だと考える。交流人口という選択である。訪問者だけではなく、比較的生活に余裕のある、つまり地域での消費が期待できる人口において、シーズンによる二地域居住という動きも生まれている。これらも視野に置いた戦略が期待される。

塩尻市は、地域イメージのブランド化、さらにそれを動因とした定住人口の増加に二つのルートから到達しようとする。

塩尻市地域ブランド戦略の用語に従えば「ブランド化戦略」と「コミュニケーション戦略」である。ここで挙げた「ブランド化戦略」とは地域の多様な基盤、資源、個々の産品やサービスの品質向上を目指すものとなっている。しかし、全体戦略の名称である塩尻市地域ブランド戦略との重複がわかりにくい印象を与える。またブランド化とは単に高品質のものを生産、提供するのではなく、他の産品との差別化を含むはずである。差別化のためには、他との違いを理解してもらう

ためのコミュニケーションが必須である。

本論では、品質向上とコミュニケーションの連携が地域イメージのブランド化を生むと理解する。そのうえでコミュニケーション戦略に注目する。

コミュニケーション戦略は内部向けコミュニケーションと外部向けコミュニケーションの両者から考えられている。ブランド化を志向する際、時に外部向けコミュニケーションが偏重されることがある。しかし、内部コミュニケーションと外部コミュニケーションは表裏の関係にある。同じ企画をどのように伝えれば内部向けとして有効か、切り口をどう変えれば外部向けとして有効か、考えることが必要になる。時には内部向けの情報をあえて外部に溢れさせることが有効な場合もありうる。

本論では特に、戦略では内部向けコミュニケーションの一つとされている「塩尻キュージーヌ」に注目する。塩尻キュージーヌは塩尻産の食材で調理されたフランス料理である。塩尻のワインが添えられることでさらに味が引き立てられる。器には木曾漆器が効果的に用いられることもある。

ここでは、料理という形で塩尻の多様な資源が編集されている。塩尻洗馬産のレタス、美味だが栽培に適さないため野生から採取される果実「さるなし」、そうしたものが使われることもある。塩尻市内にある長野県畜産試験場で開発された信州黄金シャモ、それらに、信州ジビエ（狩猟による鳥獣肉を使う料理）を組み合わせることも可能となる。

塩尻キュージーヌには、信州大学や、東京から長野県に移り住んだシェフの支援がある。しかし、シェフの創作によるものだけではない、市民からのレシピがあることに注目できる。

地域の資源を多様に編集可能であることは、市民の参加を可能にする。納得を得、さらに自ら編集したものの集積は市民にプライドを分与する。あわせて、塩尻キュージーヌという枠組み、応募と選定というフレームが、ブランドイメージの拡散を抑える。2007年10月には市内で塩尻キュージーヌの披露が行われた。2009年2月には長野駅構内での紹介もあった。塩尻ワインビストロと名付けられた長野駅構内での企画には興味深いものがある。塩尻市の地域イメージのブランド化を図るために、塩尻市内ではなく長野駅で紹介が行われたこと。それによって、内部コミュニケーションとして地域資源の編集を行った塩尻キュージーヌを外部に溢れさせていくこと。新幹線が停車することで露出の多い長野駅で紹

介し、そこで興味を持った人々を塩尻市に引き込むこと。地域イメージのブランド化に係る展開が意図を持って行われていると考える。

塩尻キュイジーヌは、個々には決定的な魅力までは持てていない多様な素材を組み合わせることで、差別的優位性をつくりだしている。そのうえで、この組み合わせる力、編集する力を、創造性・クリエイティビティとして読み直すことが可能になる。

その読み直しによって、塩尻キュイジーヌの訴求するものは、地域産品の魅力だけではない、地域の持つ創造力であるということができる。地域の持つ創造力が形にしたものが、魅力ある塩尻キュイジーヌであるということもできるだろう。地域の魅力をつくりだし、訴求するには創造性がきわめて重要となる。地域に多彩に存在する、そうした創造性、クリエイティビティを発掘し、気づかせること。それが地域の力を創りあげる。地域イメージが重複するとしても、そこから現れる表現形は多様である。それらをどのように編集し、差別的優位性を与えることができるのか。地域の創造性の発掘に基づく、次のステップが地域イメージのブランド化を可能とすると考える。

参考文献

- 遊橋裕泰・河井孝仁（2007）『ハイブリッド・コミュニティ
情報と社会と関係をケータイする時代に』日本経済評論社
河井孝仁（2009）『シティプロモーション 地域の魅力を創る
しごと』東京法令出版

現代日本の若者の「心理的变化」について

—— 日系人との比較から ——

角川雅樹 東海大学外国語教育センター第二類教授

[プロジェクト報告]

“Psychological Change” of the Youth in Contemporary Japan Compared with Nikkei Young People in Latin America

Masaki TSUNOKAWA

Professor, Foreign Language Center, Tokai University

The author has investigated especially Mexican Nikkei people (Mexicans with Japanese ancestry) through interviews focusing on university students. He did a similar survey on Argentine Nikkei youth some years ago. The Japanese emigration to Latin America started in 1898, which was pushed forward first to Mexico by Takeaki Enomoto, a prominent nationalist of the Meiji Era. Later, Japanese went to Brazil and Argentina, as well as other Latin American countries, beginning in 1908.

The Meiji Era was an “Era of Anxiety” in a sense. The anxiety spread throughout Japan beginning when the American “Black Ships” entered Uraga demanding that the country open. The Japanese who encountered European and American people and cultures felt shocked by the great differences, mainly concerning the technological differences. Corresponding with this period, Japanese emigration to Hawaii and Latin America started. Today, the Nikkei are descendants of the Meiji Era Japanese emigrants from Japan.

Generally, this research indicates that Nikkei people have high aspirations; study hard in their schools, work industriously, and achieve good results and social positions in their societies. The author sees a parallel relation between individual success and country success because during the past 100 years both the Japanese and Japan have succeeded in establishing themselves economically with broad influence internationally. However, the author believes this achievement is backed up by the social trait of psychological energy caused by “anxiety”.

However, recently, especially entering the current Heisei Era, it seems that the Japanese have achieved a kind of social establishment. We may say that Japan has a sufficient society experiencing the sense of having everything, which means that today’s Japanese no longer have a sense of anxiety, or psychological energy, to motivate them toward higher achievements. Possibly, the low aspirations of youth in contemporary Japan are closely related with the national success of Japan.

Accepted, May. 6, 2010

1. はじめに

文明研究所の援助による、メキシコ日系人大学生に対する、主に面接調査の結果に基づき、また、これまでに実施してきた、アルゼンチン日系大学生の調査結果等と総合しつつ、以下に、現代日本の若者における、とくに「心理的变化」について論じてみることにしたい。

メキシコ在住で、日本メキシコ学院の心理学専門家、共同研究者の Eri Kato Fukaya 氏の協力により、メキシコの日系大学生に面接を主体とした調査を実施し、所定の成果を収めることができた。メキシコは他の南米諸国と比較した場合、アメリカに接している点で、アメリカの影響が大きく、スペイン語などについても英語の影響がある程度みられ、他のラテ

ンアメリカ諸国とは、やや趣きを異にする面がある。

一方で、日系人としての視点からすれば、例えば、アルゼンチンの日系人との共通項も少なくない。本論では、とくにアルゼンチン日系大学生と類似の点に焦点をあてて、検討していくことにしたい。

2. メキシコ日系大学生の面接調査

メキシコの場合は日系人は比較的少なく、1-4 世までを含め約 10,000 人とされているが、1 世はすでにごく少ない状況にある。アルゼンチンはおおまかに言って 30,000 人、ペルーは 70,000 人、パラグアイ 5,000 人等となっており、ブラジルは破格に多く約 150 万人とされている。その他、カリブ海地域のドミニカ共和国やキューバ、南アメリカの他の諸国にも、ある程度居住している。

メキシコは日本にもっとも近いのと、直行便があることもあ

原稿受理日：2010 年 5 月 6 日

り、来日経験のある日系人が多く、その子女の大学生についても、日本に来たことがあるという人が少なくない。メキシコの特徴として、まず、メキシコ日系人の総人口が、他の諸国と比べ、それほど多くないことがある。また、メキシコは日本と比べると大学数が格段に少なく、日本のように、短大も含め 1,000 校近くあり、同年齢人口の半数以上が大学に進学する国とは、大学生数においてとても比較にはならない。

一方で、メキシコ日系人は経済的に成功している人が比較的多く、親の教育水準も高いことから、子女の高学歴志向が強く、大学卒業という履歴を目指す家庭が一般的となっている。したがって、日系人口が少ないにもかかわらず、日系大学生を見つけることはそれほど難しくない。なお、大学生の年齢は日本とほぼ同じ年齢層となっている。

以上のような背景を持つ、メキシコ日系大学生に対して今回面接調査を実施したので、その結果について概略を述べることにしたい。プライバシーの関係があるため、個別の面接内容について触れることはせず、全面接を一括しての内容提示とする。

こども時代の思い出について語る場合、涙ながらに話す場面に遭遇することもあったが、明らかに語らなくとも、日系人としての「つらい」体験を抱えている人は多い、という印象を持たざるをえない。

日墨修好 400 周年を今迎えているほど、日本とメキシコの関係は長く、深いため、対日関係はきわめて良好な国のひとつである。一方、対人関係が不和になった場合、「中国人」などと呼ばれ、からかわれることもある。こどもの頃の「いじめ」のような体験を話す人もいるが、日本のいじめとは少し異なり、それほど陰湿なものではないようである。

顔かたちが日本的な人は、自分の目の形を変えようと、鏡の前であれこれ工夫をした、などという体験を話す人もいる。また、いじめに対抗するために空手を習うようになったという男性もいた。

これは、メキシコ日系人に限ったことではないが、日系人は現地では「日本人」と呼ばれている。Nikkei という言葉は日系人の間でも用いられ、良い意味でも悪い意味でもなく、中立的な言葉として好んで使われる。

しかし、Nikkei と言っても一般のメキシコ人には言葉の意味が分からず、日系人は要するに日本人だ、という感覚で周囲の人々は日系人に接している。したがって、日本語につい

ても、2-4 世は日本語の読み書きが十分でない場合が少なくないが、一般のメキシコ人は、日系人は日本語がふつうにできるものと考えている。

今回の面接でも、日本語がほとんどできず、スペイン語だけで面接した人もいたが、意識的に日本語を勉強した人でないと、3-4 世では日本語のできない人も多く、また、顔かたちも日本人の風貌をほとんど持たない人もいる。

日本人の風貌を持つ人の場合は、小中学校などで、授業中に日本のことが話題になると、皆いっせいに自分の方を振り向くといった体験をしながら、日系のこどもは成長していく。

しかしながら、そのようにして育った日系子女が、メキシコの場合地理的に近いこともあって、日本に観光旅行でやってきたり、あるいは、留学してきた場合など、問題が露呈することになる。なお、ブラジルやペルーなどのように、1990 年の入国管理法改正後、日本に就労目的で来ているという、メキシコ日系人はむしろ少ない。

3. アイデンティティの葛藤と不安

メキシコの日系人は、来日後しばらくして、「自分は日本人ではないという感覚を持った」と述べる人が多い。日本語だけの問題ではなく、メキシコとは習慣や生活様式が違うという点に違和感を抱くことになる。日本語が相当でき、読み書きにほとんど問題がないという場合でも、生活様式やものの考え方は、一朝一夕に身につくものではなく、ましてや、日本語が十分でない場合は、周囲の日本人が本人を日本人とみなさないため、必然的に「自分は日本人ではない」という感覚を持つに至る。

一方で、メキシコの日系人は、日本のパスポートを子どもの頃から持っている人も多く、アメリカ入国などの場合も日本人として扱われ、日本への入国も日本人の帰国として処理されるため、その点で日本人であることは間違いない。しかし、同時にメキシコ国籍も持っており、メキシコ人でもあるということで、この国籍に関わるアイデンティティの問題は、他のラテンアメリカ諸国の日系人も同様であるが、かなり複雑な面がある。

また、すでに述べたように、子どもの頃から現地では日本人として扱われてきたにもかかわらず、日本へ来て「自分は日本人でない」と感じることは、私たちには想像もつかないような、強烈な心理的ショックを与えることになる。

ある日系大学生は、「私たちは、日本人からみたらメキシコ人だし、メキシコ人からみたら日本人なんです」と述べたが、これは本人の置かれた状況をよく表現している。小さい頃に親と日本にきたことがあるという人もいたが、年齢が低い時点で来日した場合の方が、本人に与える衝撃は大きいと思われる。現地の学校で日本人とみなされていたのが、日本ではメキシコ人として扱われ、しばらくして、現地へ戻るのだから、その心理的落差には大きなものがある。

また、親自身が2-3世であるから、上記の体験をすでに持っているわけで、親もアイデンティティの葛藤を抱いており、それにまつわる不安は、容易に消えることがない。その親の不安は、当然、子に反映され、子ども時代から日系子女は家庭の中で、日本在住の日本人には無縁の不安を抱えて成長することになる。それはまた将来についての不安ともなっていく。

このことは、移民の子孫にはある程度共通してみられるともいえるが、日系人の場合は、風貌が日本人であることが多いことから、問題がもっと先鋭化しがちである。ヨーロッパ系の移民の場合は、聞かなければ、どの国の出身なのか分からないことが多く、また、移民ということすら分からない。その点で大きな利点になる面がある。

しかしながら、筆者の視点はむしろこの、日系人にみられるアイデンティティの葛藤や不安が、むしろプラスに働くという点に重心がある。アルゼンチン日系人の調査では、日系人の子どもは学校の成績が良くなければいけない、というプレッシャーを持ちながら通学し、また、そのことがプラスに働いて、実際に良い成績をあげることが多い。また、大人になってからも、アルゼンチン社会のいわば模範生として、同地の日系人は生活していることについて、すでに現地調査に基づいて報告している。

同様の傾向は、メキシコ日系人に面接していると、メキシコでもみられる。すなわち、現地社会での「良い子」志向、言い換えれば、上昇志向が強いということである。これは不安に裏打ちされたものであるため、マイナス方向に向かえば、神経症的になる一方で、プラス方向に働けば、社会的成功に結びつく。アルゼンチンでもメキシコでも、すでに触れたように、日系人は他国出身の人々に比較して、社会経済的成功を収めている人が少なくなく、日系人全体についても、他諸国の移民からそのイメージでみられている。

4. 明治の時代精神とラテンアメリカ移民

筆者はかつて、「季刊人類学」という雑誌に、「メキシコと日本の知識人の対欧米態度」として執筆したことがある（1981年）。その論文では、メキシコと日本の知識人の、とくに心理的に不安定な面に焦点をあて、なぜ不安定なのかという点を論じた。それは、端的に言えば、不安と葛藤が強いということにほかならない。日本人の対外関係の歴史を通じて上記のことを明らかにし、とくに、明治期の日本の知識人についてあてはまる、という点を詳しく検討した。

ブラジルとアルゼンチンは、2008年に移民100周年を祝ったが、メキシコの場合はラテンアメリカ移民としては、もっとも早く、榎本武揚が推進した、いわゆる榎本移民により、1898年に開始された。ちなみに、ハワイ移民は明治元年に開始している。つまり、移民は明治時代の幕開けとともにスタートしたものであり、その結果、現代において、移民110周年とか100周年等の祝賀行事が、世界各地で催されているわけである。

一般的に言って、移民の場合は「後がない」というか、そもそも、「故郷に錦を飾る」という＜志＞を持って現地入りした面があり、これは上昇志向の一環といえよう。成功へのモチベーションが強いということになる。とくに、明治期に日本を出た人々は明治の時代精神を体現した人たちということもあり、二重の意味でこの傾向があると考えられる。

黒船の出現から始まった幕末の社会不安は、明治時代に突入し、欧米列強との邂逅により、当時の日本人に絶大な彼我の差の認識を余儀なくさせた。ベルツはその日記の中で、以下のように述べている。「現代の日本人は、自分自身の過去については、もう何も知りたくはないのです。それどころか、教養のある人たちは、それを恥じてさえいます。『いや、何もかもすっかり野蛮なものでした』とわたしに言明したものがあるかと思うと、また、あるものは、わたしが日本の歴史について質問したとき、きっぱりと『われわれには歴史はありません。われわれの歴史は今からやっと始まるのです』と断言しました...これら新日本の人々にとっては常に、自己の古い文化の真に合理的なものよりも、どんなに不合理でも新しい制度をほめてもらう方が、はるかに大きい関心事なのです。」

西洋文化による衝撃の余韻もまだ醒めやらぬ、明治初年のベストセラーに、福沢諭吉の「西洋事情」と中村正直の「西

国立志編」がある。とくに、「西国立志編」は前後 100 万部に達する、当時としては、大ベストセラーであった。この書物は、イギリスのサミュエル・スマイルズの「セルフヘルプ」(自助論)の翻訳であり、明治 3 年にその初版が出て以来、じつに数十種の異版が出され、数ある明治の翻訳本のうちでも、ロングセラーの随一のものでされている。この事実はきわめて興味深いものであり、明治日本の一般大衆がいずれも西洋について語ったこの 2 冊の書物に、尋常以上の情熱を傾けたのは、現代日本人にとっても、けっして理解できないことではない。

とくに、「西国立志編」は一種の成功物語であり、当時の日本人の、「西洋志向」的側面とともに、「成功志向」傾向の存在をよく示している。この社会現象は明らかに当時の時代精神と密接に結びついたものであり、ラテンアメリカへ移民として向かったその頃の日本人にも、同じ傾向があったことは容易に伺い知ることができる。

1867 年、まさに維新前夜ともいえる時期に、前島密は將軍徳川慶喜に対して、「漢字御廃止の儀」という申し立てを行っている。これはその後根強く存在することになった、漢字廃止論の先駆とも呼ぶべきものであった。明治 5 年、初代文部大臣森有礼は、日本の国語として英語を採用したいという、有名な国語英語化論を唱えることになる。また、明治 18 年には、物理学者田中館愛橘らのローマ字化運動が始まり、羅馬字会が設立されるに至る。そして、明治 20 年 11 月 12 日の読売報知新聞は「漢字を廃止せよ」と題する社説で以下のように述べている。

「漢字を廃止する時、われわれの脳中に存する封建意識の掃討が促進され、あのてきぱきとしたアメリカ式の能率にはじめて追随しうるのである。文化国家の建護も、民主政治の確立も、漢字の廃止と簡単な音標文字(ローマ字)の採用に基く、国民知的水準の昂揚によって促進されねばならぬ。」

5. 不安の時代と神経質症状の蔓延

明治期における、以上のような、諸「発想」の背後に、「劣等感」に関わる「不安」があることを上記論文で指摘したのであるが、この「不安」は明らかに、西洋列強との邂逅をきっかけとして出現したものである。

このいわば「社会不安」と、森田療法を創始した森田正馬の時代、すなわち明治時代に社会的に蔓延し、森田以外の

精神医学、心理学の専門家らも強い関心を寄せ、治療法がひろく検討された、当時の人々の「神経衰弱」の問題、また、森田の概念化した「神経質」傾向とは、密接に関係していると考えられる。

筆者はそれについて、アルゼンチン日系人調査との関連で論じ、明治の「時代精神」と、森田が神経質の根本原因だとする「生の欲望」、すなわち、神経質者の過大な上昇志向との関連について論じた。

すなわち、明治期の「社会不安」と当時の神経質傾向やその症状とは密接に関係し、同時に、当時の日本を出てラテンアメリカなどへ移民として渡った、日本人 1 世のパーソナリティと心理的傾向は、やはり、明治の「時代精神」を反映していると考えられる。

森田の考え方の概略を述べるならば、神経質傾向やその症状は、上記の「生の欲望」が神経質者では過大であり、それは、ヒポコンドリー性基調と森田の呼ぶ、すなわち、「不安」と直結している。ちなみに、森田の高弟の高良武久は、それを「適応不安」と呼んでいる。

この不安に基づく「生の欲望」は、健康でありたい、より良く生きたい、成果をあげたい、成功したい、といった諸々の傾向、とくに上昇志向を促す。これはもちろんプラスの傾向であるから、その人が学校で良い成績を取ったり、社会で成功することにつながる。しかし、一方で、異常でありたくない、病気になりたくない、軽蔑されたくない、失敗したくない、といった方向への関心が、本人の中でとくに強く意識されると、マイナス方向へ「注意」が向くことになる。

その結果、ささいな身体面の違和感を気にし、病気ではないか、異常ではないか、といったことが脳裏を離れなくなったり、対人恐怖のような「強迫観念」の方向に注意が向くことにより、社会生活に支障をきたすに至るという、森田の言う「神経質」傾向や症状へと発展していくことになる。明治期にはこういった病理が現代の日本より多くみられ、「神経衰弱」とも呼ばれ、当時の専門家や一般大衆にとって、大きな関心事であった。

6. 現代日本の心理的状況

それでは、現代日本における心理的状況とは、どのようなものであろうか？ 神経質についていえば、森田療学会でしばしば指摘され、問題となっている、神経質症状の変化と

いうことがある。すなわち、古典的な意味における「神経質」が現代ではむしろ少なくなり、森田療法適用の対象となる、神経質の典型例が減ってきていることが、多くの専門家により指摘されるに至ってから、すでに久しい。

筆者は、ラテンアメリカの心理学／精神医学の専門家や、また、現地の日系人を対象として、森田療法についての講演やセミナーをスペイン語で実施する機会が、これまで頻繁にあった。そういう場合、とくに日系人の参加者が多く、また、森田療法についてのスペイン語の書籍をアルゼンチンで出版したところ、その反響には大きなものがあり、セミナーには継続して参加する人が少なくなかった。また、質疑応答などを通じて、日系人が森田療法やその考え方に興味を示し、自分の性格や心理状態について、強い関心を抱いていることが伺われた。

日系移民は、他の現地の人々との交流はもちろんあるものの、日系移民どうしの密な人間関係を保持した生活形態にあり、1世から2-4世へと、世代から世代へ日本語をはじめとして、日本の生活習慣やものの考え方などが伝えられる傾向が強い。関係が緊密であるため、日系コミュニティにおける社会通念や理念が、後の世代にそのまま伝達されやすい環境にある。

例えば、明治期の日本語の言語表現などで、現代の日本で用いられないものが、今なお現地で使われているとことが、ハワイの日系人について報じられ、例えば、現代の日本では「アイロンをかける」というが、ハワイでは、「アイロンをあてる」と言っている等の指摘があった。このような例はアルゼンチンでもみられ、現地邦字紙を見ればいくつもの事例を発見することができる。

同様の意味において、現地日系人の心理の中に、「神経質傾向」を見出すことができると筆者は感じ、また、報告している。すなわち、日系人は世代から世代へと、そのパーソナリティについても、明治期から連綿として伝えてきている、と考えることが可能である。

一方、現代の日本では「アイロンをあてる」と言わないように、時代はすでに「変化」してきている。森田療法学会でも、神経質の典型例が減ってきていることに関して、「現代の時代精神」との関連に焦点をあてた、シンポジウムなども持たれている。このままでは、森田療法を適用する「対象」がいなくなってしまうのではないかと、といった危機感さえ表明される

現状である。

7. 不安の希薄な現代日本と若者の意欲の低下

筆者の考えを結論的に述べれば、現代の日本では「不安」がむしろ希薄な面がたぶんにあるということにほかならない。ヨーロッパやアメリカ、あるいは、ラテンアメリカを訪れる機会がよくあるが、現代の日本はスペインなどと似た面があり、一種の成熟社会といった様相を呈しているように見える。

「不足がない」というか、「ないものがない」のが現代日本であると言うことも可能であろう。言い換えれば、「不安」がないのである。明治時代はそれとは対照的に、すでに述べたように、「不安の時代」とも呼べる時期であった。しかし、現代日本、とくに平成に入ってから、「不安のない時代」に突入しているかのようである。

明治時代における「社会不安」が、当時の人々の心理的傾向やパーソナリティ形成に影響していたと考えられること、そして、当時の社会で問題になっていた、精神病理としての「神経衰弱」や、「強迫観念」を主とした、「神経質」性格にまつわる諸症状、これらのいわば「社会病理」としての「精神病理」は、「社会不安」と密接に関係している。

そして、移民として当時日本を出た人々、すなわち、明治期の人々が上記の傾向をいわば体現していたと考えられるとともに、その子孫としての日系2-4世らが、それぞれの親のパーソナリティや養育態度、家庭環境を通じて、ちょうど、当時の日本語が日系移民の生活の中で、現代に伝えられてきているように、やはり日系人の中に伝えられてきているとみることが可能である。

それは、「不安」と密接に関係したパーソナリティとしての「神経質」傾向が、日系人を通じて、現代に伝えられてきているということにほかならない。森田の言うように、神経質の根本原因としての「生の欲望」、言い換えれば、強い上昇志向、あるいは、高い＜志＞を抱く傾向が、日系人の中に存在するということである。

一方で、現代の日本はいえ、明治から100年経過した今日、すでに時代は変化しており、明治期のつねに欧米を意識した、例えば、明治10年代の、鹿鳴館に象徴されるような強烈的な欧米志向、さらに、その反動としての明治20年代における、「欧米に学ぶものなし」といった国粹主義的傾向、これらの欧米を強く意識した姿勢は、その後の、「追いつき追

い越せ」といった風潮や立身出世主義等の、日本人の対外態度に基づく、いわば〈志〉のある姿勢や生活態度として、存続していたと考えられる。

しかるに、昭和から平成に入る頃より、日本人の対外姿勢や心理的傾向は大きく変化してきているように思われる。日本青少年研究所による「高校生の意欲に関する調査」（2007年）では、日本の高校生は、「偉くなりたい」と思っている生徒がわずか8%で、韓国、中国、アメリカに比較して、実にその3分の1にすぎないという。

また、2008年に実施された、同研究所による中高校生についての、やはり、上記の3ヶ国との比較調査では、「自分はダメな人間だと思う」率が、日本はずば抜けて高く、高校生で66%弱、中学生で56%との報告である。また、「よく疲れていると感じる」については、高校生が83%ほど、中学生が76%という結果であった。

OECD／経済協力開発機構による「国際学習到達度調査」（2007年発表）では、成績の低下傾向に歯止めがかかっておらず、日本は6位に転落、とくに「科学への関心」が日本は最低で、朝日新聞の報道では日本人の「意欲」も課題だとしている。

近年、若者の体力の低下などについての諸報告や、「引きこもり」「うつ傾向」「自殺の問題」、こういった話題が多いのは、誰しも気になるところである。最近出版された、精神科医、古荘純一氏による書籍のタイトルは「日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか」である。これは、児童精神科の現場からの報告ということであるが、筆者自身は、大学でスペイン語や心理学の授業を行ないつつ、学生相談室でカウンセリングに携わっており、つまり、一般の学生と相談学生と両方のグループに日常的に接しているが、やはり、意欲的な学生に出会うことが比較的少なくなっている、という印象を持っている。

上記の諸報告や、心理学／精神医学の専門家による指摘、また、筆者が外国の学生と接触してきた経験に照らしてみると、やはり、現代日本の若者においては、全体として見た場合、相対的に「意欲」が低いという印象を持たざるをえない。そして、この「意欲」の低さ、言い換えれば、〈志〉の希薄さは、すでに本論で述べてきた、「不安のない時代」ということと密接に関係しているように思われる。

参考文献

- アルゼンチン移民史編纂委員会編：アルゼンチン移民史（第1巻戦前編）、在亜日系団体連合会、2002。
色川大吉：明治の精神、岩波書店、2007。
上野久：メキシコ榎本殖民、中央公論社、1994。
中村敬：今日の対人恐怖症の臨床特徴に関する研究、メンタルヘルス岡本記念財団報告集、第9号、1997。
日本青少年研究所：高校生の意欲に関する調査報告書、2007。
古荘純一：日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか、光文社、2009。
森田正馬：神経質の本態と療法、白揚社、1960。
角川雅樹：メキシコと日本の知識人の対欧米態度、季刊人類学第12巻第2号、p.168-221、講談社、1981。
角川雅樹：〈志〉からみた日系人の心理と神経質—アルゼンチン日系大学生の調査から、日本森田療法学会雑誌、第18巻第2号、p.151-159、2007。
角川雅樹：森田療法における心的エネルギーと〈志〉—精神分析との比較から、日本森田療法学会雑誌、第20巻第2号、p.125-139、2009。

山間地社会の再生と大学の地域連携

——「対話と共生」関係創生のフィールドワークから何が見えてきたか——

鈴木康夫*¹, 田中靖久*²

(^{*1} 東海大学総合教育センター・熊本教養教育センター教授, ^{*2} 東海大学総合経営学部マネジメント学科専任講師)

[プロジェクト報告]

Reclamation of Mountainous Society in Cooperation with the University: What did we find through fieldwork to create a philosophy of dialogue and symbiotic relationship?

Yasuo SUZUKI ^{*1} and Yasuhisa TANAKA ^{*2}

^{*1} Professor, Liberal Arts Education Center, Kumamoto, Tokai University

^{*2} Junior Associate Professor, School of Information Business Studies, Department of Management, Tokai University

This paper presents the results of the fieldwork on creation of a philosophy of dialogue and symbiotic relationship, aimed at the reclamation of mountain society through cooperation between the university and communities. The fieldwork especially focuses on how we dialogue with residents, and how the community inhabitants and university personnel create a symbiotic relationship. At the same time, we analyzed cooperation and reclamation methods specific to mountain societies. The results are as follows:

1. We have gotten good results through fieldwork with the philosophy of participation and coproduction.
2. It is very difficult to create a philosophy of dialogue and symbiotic relationship without a clear goal.
3. We cannot have productive dialogue with good opinions to solve regional problems without mutual understanding as means to knowing various and valuable pieces of information.
4. We could build symbiotic relationships after achieving mutual conditions of dialogue and coproduction.
5. Cooperation between the university and the community does promote the reclamation of mountain society through the creation of a philosophy of dialogue and symbiotic relationship.

Accepted, Dec. 2, 2010

はじめに（都市から見えない山間地社会の現実）

都市・農村交流が盛んになっている。この交流が展開される背景は同じとしても、目的には大別して二つの側面をもつ。疲弊する地方の農山漁村の活性化を人的交流によって図ろうとする側面と、都市部の税収で地方財政の不足分に充てることを都市住民に理解してもらうという側面である。

この表裏一体の二つの側面は、現実の都市・農村交流によって、果たして達成されているのであろうか。前者においては、都市では体験することのできない農山漁村の恵まれた自然に身を置き、そこに暮らす人々との対話をとおして「癒されて」都市に帰っていくケースに至れば目的はほぼ達成されたといえよう。ただ、そこまで交流が成熟しているかが問題視される。後者では前者を踏まえて、少子高齢化が進み生産年齢人口が少なく、人材的にも財政的にも自立が困難な地方の農山漁村の実態を都市住民に知ってもらうことを前提

にしているが、こちらについては方法論においても実際の交流活動においても目的が達成されているかという大きな疑問が残る。

そこで、筆者ら（以下、鈴木と共同研究者である田中の両名を意味する）が本稿において取り上げたのが、「対話と共生」関係の創生という観点である。交流によって「対話」はなされるが、目的達成のための対話が交わされるプログラムを交流の現場でどう構築すべきであろうか。同じ日本という国のなかでともに生き暮らしているという「共生」意識を創生する交流・対話のプログラムについても同様である。また、「対話と共生」関係の創生から、山間地社会の再生にどのようにつなげていくべきなのか、検証のための課題は多い。

大学の教職員や学生たちは、地方都市に暮らす民であり、その都市の周辺地域に位置する山間地社会が疲弊しているのであるから無関心ではいられまい。むしろ地方大学の存立基盤を強める意味において、大都市に立地する大学よりも、積極的に地域にかかわり地域の課題に共に取り組む姿勢が重要視されてくる。実際に地域に入りフィールドワークをお

こなわないと地域の課題は把握できないだろうし、都市から見えない山村社会の現実があると推定される。「知」の集団としての大学が、同じ地方にあって疲弊する条件不利地域に大学がどのように連携・貢献する形態が望ましいのかについても、同時に検証することにした。

1. 山間自治体と大学の連携によるムラづくり

筆者（以下、鈴木を意味する）の専門とする地理学は、フィールドワークによるデータ収集が報告書や論文の質を左右する学問である。農山村を研究対象とする筆者の場合、耕地の後退現象や人工林の荒廃を食い止め、過疎化・高齢化によって疲弊するムラをどのように再生させるかを研究テーマとしている。再生の手段は、大きくは営農支援を基軸とする生業再生型、都市農村交流による農山村空間の観光資源化・地域活性化型の二つに大別される。場合によっては、耕作放棄地の再自然化による撤退型（林・斉藤 2010、一ノ瀬 2010）も再生の手段として取り扱われるケースもある。しかしながら、このような三つの型が再生の手段として実施されても、日本の農山村再生の現実は厳しさを増すばかりで、一向に衰退に歯止めがかからない状況にある（五十嵐 2008）。

地域再生に課題をもつのは都市も同じであるが、新しい潮流として日本国内各地で、大学の地域貢献、大学と地域との連携が展開されるようになった。大学は学術的な「知」的財産と、それを構築する教員と学生の集団としての「人」的財産を備えもつ。自治体の財政難から、これまでコンサルタント業界が請け負うことが多かった仕事を、業界に人材を供給する大学が代わって請け負うことが増え、この新しい潮流は加速した。それが次第に、大学が生き残るための戦略という意味合いが強くなってきた。同時に、大学が存在する地域に対する大学の存在意義を示すことにより、具体的に地域と互恵的・創造的関係を構築し、地域づくりに大学が積極的にかかわり貢献することが重要な使命として認識されるようになった（小林 2008、山村・上野 2010、小野・上野 2006）。

農山漁村で定住する条件は、生業の不成立・崩壊という観点において現実的にはハンディキャップが大きい。農林漁業だけでなく、田舎で生活するための雇用を生み出していた公共事業も極度の不振である。国・県・市町村の財政難もある。広域合併で「周辺地域化」（岡橋 2007）が進み、見放され置き去りにされる町村や行政区も出てきた。このような

背景のもとに、自治体と大学が連携することによって、地域再生を手探りで模索しているのが現実である。しかしながら、徐々にではあるが大学と自治体がさまざまな協定を結び、マチづくり、ムラづくりに関する連携体制が整ってきている。自治体は大学との連携によって、都市経営、都市計画、特産品の開発、技術指導、人材の育成などさまざまな分野で間口の広い取り組みを開始している。共通するのは身近な課題について自治体と大学が情報を共有し、ともに解決に動き出していることである。連携関係が強まったり、ステップアップしたりもするケースがある一方で、連携関係を築いたものの協働には程遠いケースもある。連携の在り方を検証するには多元性・多様性・多層性・階層性など複雑な関係性の把握がつきまとう。

2. 「対話と共生」関係の構築を前提にしたフィールドワーク

「対話と共生による新しい社会の構築」という本学文明研究所の個別研究に採択されて、筆者らはこの三年間に三つの地域で事例研究を実施し、いくつかの学会発表（鈴木 2009、鈴木 2010c）、論文（鈴木・田中 2009、田中・鈴木・生方 2009、鈴木・田中・永木 2010）、著書（鈴木 2010a, 2010b）を成果として報告している。筆者らは三つの地域での調査に入るとき、研究課題に関する情報を入手しやすいように、地域住民と対話がスムーズにいくようなそれぞれ別個のスタイルでフィールドワークを実施してきた。

熊本県高森町での事例研究では、筆者自らが家族で居住し、実際に山間地集落の住民となって、1999 年から調査をおこなっている。家族ぐるみの山間地定住実験事業的な試みであった。1999 年から 5 年間の居住後も筆者は現在も当該集落到住民票を置き、集落構成員のままである。国土交通省が提案している二地域居住の効用と在り方について実証を試みている。本事例は、住民との対話と共生関係を定住というスタイルで図ったケースである。山間地集落の耕地利用の後退と地域資源の維持管理問題について、「土地・人間・生活」を包括した形で現実の課題が把握できた。定住することで集落を維持する構成員になったために、対話が外来者レベルの表面的なものではなく本音での対話が可能になった。また、集落の祭、寄り合い、共同作業などに参加し、集落の将来をともに考えねばならない当事者となったために、

必然的に「共生」関係が構築されたケースでもある。

熊本県球磨村での事例研究は、村から大学への専門家派遣の要請に応える形で2009年に筆者が村の農業振興アドバイザー会議に参加したのを契機としている。村からの要請は会議の構成員（学識経験者）としてだけではなく、会議の取りまとめ役（会長職と答申書原案作成）もあった。単なるアドバイザー業務なら自らの意見を述べれば済むのであるが、取りまとめとしての参加は、会議を構成する役場スタッフや委員との密度の濃い「対話」がもとめられる。答申書作成のプロセスにおいて、さまざまな観点からの情報収集と聞き取り調査が必要になった。会議だけでなく集落座談会にも出席し、対話による情報収集に当たった。答申書の取りまとめに際しては、委員全員の意見の一致や賛同を求められるから、村と村農業の将来をともに考える姿勢が必然的にもとめられ、「共生」意識が筆者の内面に醸成されていくことになった。役場産業振興課スタッフや委員との間に強い「共生」関係が築かれたかどうかについての客観的判断はできないが、答申後に間を置くことなく再び「球磨村山村振興アドバイザー」の委員委嘱を受け、現在も繋がりがあ

宮崎県五ヶ瀬町での事例研究は、町役場地域振興課からの依頼を受けて、2009年9月に開催された「大学リーグ」に参加することから始まった。ゼミ単位で大学から学生と教員を招き、二泊三日の合宿形式でフィールドワークを実施し、地域づくりの提案をしてもらうことを目的としていた。当初の考えは東京の大手コンサルタントの提案で、東京農業大学が提案・実施している「源流大学」の九州バージョンとして、五ヶ瀬川源流に位置する五ヶ瀬町に声がかかった。源流大学構想は、大学生のフィールドワークを主体とするゼミ・研究室の教育研究合宿の場を源流地域にもとめ、林学、農学、農村社会学、農村地理学などの研究室が一斉に集い、地域で学生たちがフィールドワークを実施するものである。当初の2007・2008年の二年間は宮崎大学と長崎県立大学によるフィールドワーク型ゼミ合宿が行われたが、「大学リーグ」と名称を変え、地域づくり提案をコンペ形式でプレゼンしてもらうとなると、少なくとも三大学が望ましいとして筆者らに声がかかった。学生たちは見知らぬ地に入り、短期間であるが個々のグループ単位でテーマを設定し地域調査を実施する。役場職員や地域住民から案内、説明を受ける形で「対話」が始まり、地域の実態や課題を把握することになる。課

題解決のための解決手段や地域づくり提案を、案内役とともに模索することで「共生」関係を構築しようとする仕組みになっている。学生たちの最終的な提案が未熟なものであっても、真剣に考えて提案してくれたことで、案内役は感動すら覚えることになった。都市から山村にやってきた学生たちが一生懸命調べて、ともに考えてこの地のために提案してくれているからである。短期間という制約、地域の実情をよく知らないというハンディを受け入れ側の関係者は熟知している。

3. 「参加と協働」を基軸としたフィールドワークと対話の成立

「参加と協働」論（荒木1990、日高2004、中嶋2007）にもとづく市民参加の地域づくりの取り組み（西川・伊佐・松尾2005、松尾・西川・伊佐2005）が、国内や世界各地で展開されるようになっていく。その研究の間口が広がっているのは、多様な主体による参加と協働がみられるようになったためである。本報告のような、これまで地域との関係が希薄だった大学が地域と連携し、大学の存在価値を示す形態をとりながら地域に貢献する取り組みも増えてきた。「参加と協働」研究の奥行きもまた深まっている。人の繋がりが備えもつパワーまたは資源をソーシャルキャピタルとして評価し、その形態と資質の在り様が、地域づくりの成果を左右するという研究がそれにあたる。

本報告における「対話と共生」論の実践ならびに検証に際しても、「参加と協働」論研究と以下のような関係性を持ち行っている。第一には、参加が対話を可能にし、参画の在り様が協働の成果を決定づけるという点である。第二には、協働の形態と対話の在り様をとおして共生意識の創生につながるという点である。「参加と協働」論と「対話と共生」論を本研究では表裏一体の「対」の論理として位置づけている。

ここでは、さきの第一の関係性に着目し、「参加と協働」を基軸とした地理学的フィールドワーク手法（梶田・仁平・加藤2007）を実践することによって、対話の成立とその在り様を探ることにしたい。熊本県高森町での事例は、筆者が家族とともに定住することによって集落の一員となり、集落組織内にすでに存在する「参加と協働」の枠に飛び込んだ後、限界集落の実態と課題を探るフィールドワーク実践である。熊本県球磨村の事例は、筆者が村の会議に学識経験者として参加を要請され、村長から与えられた諮問に対する答申書

を完成させるためのフィールドワーク実践である。宮崎県五ヶ瀬町の事例は、町から学生とともに「大学リーグ」という地域づくりセミナーを兼ねたコンペに参加を要請され、数日滞在しながらそれぞれの大学が異なった地区（行政区）に入り、地域の課題にもとづく地域づくり提案をするためのフィールドワーク実践である。

熊本県高森町でのフィールドワーク実践では、すでに来訪者ではなくなり、そこでの対話は希薄な段階から濃密な段階まで、参加（定住）直後から求められた。共同体の一員としての「濃密な関係」により必然的に生じる対話であり、本音を語る対話のケースもあれば、私的生活レベルの対話のケースがある。定住によるフィールドワークは、対話と体験という手法でなされ、素朴な質問もすんなり受け入れてもらえた。来訪者の聞き取り調査の対話とは異なり、日常の暮らしの営みのなかで対話が、貴重な情報の蓄積に結びついた。意図的に聞き取り調査をするのではなく、日常生活のなかでの日々のあいさつづいでの立ち話が偶然思わぬ貴重な情報の入手につながった。体験も同様で、集落の生活者になることによって集落を支える各種共同作業を体験することによって、さまざまな過疎地域の実態や課題にかかわること情報を入手することになった。

土地利用の変遷を探るフィールドワークでは、そこに暮らしてきた集落の人々の過去から現在までの営みを探ることになるが、来訪者では探ることができないレベルまで幅広く、深く実態が把握できた。土地利用図の作成は過去から最近までの地形図から判読できる。現在の土地利用図も現地踏査によって作成できる。しかし、過去の旧版地形図の土地利用記号がすべて正しいとは限らないから、それを確かめる聞き取り調査を意図的に行った。畑から森林に変わったのは誰の土地でいつごろ変わったか、畑では何が作られていたか、草地がスギ林に変わってため池の水が不足するようになったこと、地図には記されていない谷が「みみず谷」という固有名称があるなど多岐にわたって教えてもらった。通常の来訪者としての聞き取り調査では容易に知りえない情報が短期間に入手できた。それを可能にしたのは、同じ土地に暮らす生活者同士としての「対話」が成立していたことによる。

熊本県球磨村でのフィールドワーク実践は、役場担当者と二人で行うケースと、球磨村棚田保存会や球磨村グリーンツーリズム研究会の会員との現地視察のケースがあった。限ら

れた少数の「参加と協働」を基軸としたフィールドワークが、濃密な対話を可能にした。フィールドワークでの対話は、会議や集落座談会などでの対話とは違った意味で対話そのものの価値を有する。現場主義で将来この地をどうしていくかをともに考える会話が成立するからである。村内各地に出向きながら、それぞれの地区・集落の光景を目視観察しながら、現地住民との対話によって課題が確認できた。

球磨村でのフィールドワークは、山間農業地域としての条件不利性や地域農業が抱える課題を、集落・行政区単位で抽出するために行われた、猪や鹿などによる農作物被害が高齢化した零細農家に大きなダメージを与えていること、零細な区画の棚田が多くトラクターやコンバインが使えない、車が田んぼのそばまで行けない、耕作放棄地が多く発生し再生の見とおしが立てられないなどについて、現地を歩きまわることによって地域を具体的に理解できた。地域ごとの課題や具体的問題が明らかにならないと、課題を解決する方法や政策的支援の方向性を提案できない。住民や委員との対話によって明らかになった夢を実現させる農業振興のビジョンや地域振興策も打ち出せない。球磨村でのフィールドワークの成果は答申書のなかで、「行政区や集落の個性を見極めた維持・再生」という答申内容に活かされた。そこでは、広い空間のなかで特定の「場所」や「土地柄」を考慮した政策立案を求めている。

宮崎県五ヶ瀬町でのフィールドワーク実践は、学生の教育という観点に重きをおいている。「大学リーグ」という取り組みのなかで、短期間であるが学生たちに山村を歩いて見てもらい、山村の実態と課題を知ってもらうことに大きな目的があった。観察の結果、学生ならではの視点、都市に暮らす人間としての視点で問題解決の手法・取り組みを提案することになった。ここでのフィールドワークは役場職員や地域住民の案内のもとにおこなわれ、「対話」は現場でいろいろなものを見ながら、紹介・解説をうけながら交わされた。最終日に地域づくりの具体的提案をプレゼンするという目的のはっきりしていたため、学生たちは名所見物するようなお客様の参加するのではなく、積極的に質疑応答する意義ある対話が交わされた。

樹齢四百年ものひのきの巨木がある「消えた集落」を案内されたときには、学生たちは感動を隠せず、巨木の通称が「神の手」であることを含めて、この場所に「物語性」がある

ことに気づき、それを世の中に発信することを考えた。日本
棚田百選の^{ひぞえ}日蔭棚田で4mもの高さの土の壁（棚田の土は）
に立ったときも学生たちは感動した。遠くの湧水の水源地か
ら江戸時代から明治時代にかけて用水路が掘られて成り立っ
ている文化的景観がこの棚田であることを「対話」によって
確認した。四億年前の化石がでて「九州島発祥の地」という
この地には、場所のもつ物語性が多く存在することから、学
生たちは「鞍岡四億年の雫・野外ミュージアム構想」として、
野外の展示物とエコツアーを組み合わせた地域づくり案を
提案した。役場職員や地域住民がただの木、普通の田んぼ、
普通の農業用水で当たり前のものとしかとらえていなかった
存在を、価値ある地域資源として証明し、展示し、ツアーで
案内する。このような地元を知る・学ぶ「地元学」的な仕組
みや仕掛けは、山村空間の市場化戦略になり得る可能性が
あり、生業の衰退を食い止め、地域づくりに生きがいを創生
する契機にもなる（下平尾 2006, 結城 2009, 住岡・梅田・
神部 2009, 総合観光学会 2010）。本事例は、フィールドワ
ークをとおした対話の成立を見事に証明するケースと思われ
る。

4. 対話によるムラづくり提案と共生意識の創生

ここでは、さきの章で指摘した「参加と協働」論との第二
の関係性に着目し、フィールドワークによる対話の結果とし
て、もしくは成果としてのムラづくり提案そのものやそれを生
み出すプロセスによって、共生意識の創生にどのようにつな
がるかを探ることにしたい。提案の形態がそれぞれの実践対
象地域によって異なるので、以下、三つの事例ごとに述べる
ことにする。

なお、前述したように、「対話→共生」という単純な図式は
現実にはありえず、「新しい山間地社会の構築」を目指す本プ
ロジェクトを事例検証する場合、「参加と協働」論を組み入れ
た参加→対話→協働→共生という四つのプロセスを踏まえ
た検証が必要と思われる。また、その前提として、共有化さ
れたどのような目標・目的を達成するための「参加と協働」な
のか、「対話と共生」関係の創生に大きく影響すると仮説化
した。

4-1 高森町の事例（ケースA）

高森町の山間集落に家族ぐるみで移り住んで以来、研究

者という客観的視野を維持せねばならない側面と、当事者と
して主観が研究成果に反映することのメリット・デメリットを
見極めねばならないという側面を強く意識した。ここでの提
案は、学会発表と論文の執筆という形態と、集落の寄り合い
等の機会において意見交換という形態でなされた。学術的成
果を世に出すにあたっては、地域住民と自らの暮らしを客観
視して、読者に伝えるように努めた。このことが自身や家族、
集落の人々の生き方や、集落の将来を見つめなおす契機と
もなった。

当該研究対象集落は限界集落であり、今後、現在の状態
からさらに集落の衰退が進むことが予想された。フィールド
ワークの結果として、集落の土地利用変遷と耕地利用の後
退現象、地域資源管理上の問題点などが把握できた。論文
の最後で考察として指摘した提案は、限界集落の維持・再
生と政策の在り方についてである。具体的には、①集落のコ
ミュニティ機能はまだ機能不全には陥っていないし、住民の
生活の質（QOL）も高いので、集落機能の維持と活性化をソ
フト面で政策的に支援する必要がある、②若い住民にとっ
て住みづらい地域にしないことがとりわけ重要であり、小・
中学校の統廃合問題や教育・児童福祉サービスの縮小が子
を持つ親の離農・離村につながらない政策的配慮が必要で
ある、③現在の地域振興事業や補助金交付について、都市
住民の同意を得続けられるよう一定の成果を示すことと、今
後の支援システムの構築にも都市住民の同意を得られるよ
うにする。

山間地の定住政策の必要性は、国土政策としても重要で
ある（上野 2004）。山間地集落の多くが消滅するときに、山
間地に「社会的空白地域」（岡橋 2007）をつくりだす。これま
で集落に人々が暮しながら担ってきた国土管理・地域資源
管理能力を代わって発揮してくれるのは誰であろうか（作野
2006）。現在において管理者であり担い手でもある人々が暮
らす集落が消滅したとき、広大な面積の森林、延長の長い市
町村道、河川、文化財などを維持するために、莫大な国家予
算の投入を余儀なくされ、かえって国民の負担を増すプロセ
スをたどることになる。

提案は地域住民の生活に深くかかわる地域政策と地域づ
くりの課題に対して、生活者としての意識の問題を踏まえて
なされている。定住という対話を成立させる参加形態が、協
働関係というフィルターをとおして可能になった提案である。

定住によって共生意識だけでなく、より強固な共生関係が必然的に創生された。なお、本事例における提案と共生意識の創生の関係は、定住という参加形態をとおして強化されている点において、特殊性がある。

4-2 球磨村の事例(ケースB)

球磨村での提案は、農業振興アドバイザー会議において原案が提示され、会議のなかで意見交換され、修正が加えられ承認されるというプロセスでなされている。最終的には答申書という文書で村長に提案がなされている。最初に諮問という形で、具体的な検討事項が村長から提示され、会議での議論・検討が開始されている。最終的な提案を導き出すためには、会議のなかでの対話だけではすまなかった。むしろ、会議での議論・検討という対話の形態よりも、会議以外での有意義な対話があって、答申というゴールにたどりついたともいえる。

筆者は会議の会長として、答申書の原案作成ととりまとめ役を果たさねばならなかった。そのため、以下の四つの対話による情報収集に取り組んだ。①会議の開催前には、事務局の役場担当者や副会長との間で、会議で提示する資料の検討、会議の進行の仕方などについて対話する機会を得た。②会議終了後に数名の委員がその場に残り、雑談という形で対話をし、互いに議事に関する感想を述べ合った。③筆者と役場担当者で、村内のすべての行政区・集落を見て回りながら、対話した。④村内各地で集落座談会を開催し、住民との対話の機会を設けた。

③の対話では、村を行政区という大きな単位でどう将来設計するか、集落という小さな単位ではどうしていくのかを、それぞれの「場所」がもつ個性と課題を、事前に基礎的情報として共有することに取り組んだ。村全体を見渡せないとりまとめ役はこなせないと判断して、筆者から担当者にし実施できた。④の対話を成立させるためには、記入式のアンケート用紙を事前に作成し、その場で出席者に記入していただきながら進めた。重要な質問事項については、口頭で趣旨を説明し、出席者から意見を引き出すという形で対話がなされた。座談会では進め方の工夫がないと、出席者から何も聞き出せないで終わることがあるので、ワークショップかアンケート方式による情報収集が望ましい。今回は集落座談会であり、出席者が少ないことを予想して、アンケート方式を取

り入れた。

ところで、これらの対話は、村長からの諮問に答えるためになされたことはさきに述べたが、村長からの諮問は以下の三つである。①村民の夢を把握し、新しい農業ビジョンを描く、②村の恵まれた地域資源を活用する村づくりの在り方を探る、③既存の各種補助事業・補助金を見直し、農業支援の方向性を導く、がそれである。①に対しては、個別具体的な「夢」を委員や村民から提示してもらうことと、夢の実現のためにどんなプロセスが必要なのか、夢の実現のために障害になることは何かなどを把握する対話があった。②に対しては、村の宝探しを目的に、アンケートと口答で回答していただいた。村が衰退するなかで、消失してはならない文化財的な価値をもつ資源の発掘と保全という観点で対話がなされた。③に対しては、①と②を踏まえて、夢の実現のための新規事業の提案と既成事業の見直しという観点で対話がなされた。既成事業の廃止は補助金の削減がともなうので、利害関係が発生することから、会議での検討は都合三度を要した。

合計七回の会議と村内各地での九回の座談会を実施し、その対話の成果として答申書がまとめられた。①の対話で夢を議論の俎上に載せ、③の対話でお金が絡む利害関係の調整を図られたこと、答申書の文面を何度も会議で読み合わせて修正を図ったことなどにおいて、対話が皆の共生意識を創生するまでに醸成されていった。村長に答申書を提出した当日の夜に開催された反省会兼懇親会は、お互いに感想・意見が飛び交い盛会に終わった。

4-3 五ヶ瀬町の事例(ケースC)

大学リーグで、三大学の学生たちが最終日に、パワーポイントファイルを作成し実施したプレゼンテーションでは、さまざまな地域づくりのための提案がなされた。長崎県立大学は町の中心部にある赤谷商店街の再生のための取り組み提案、宮崎大学は三ヶ所地区の地域の宝さがし・地域資源マップの作成、本学九州キャンパスは鞍岡地区の野外ミュージアム構想とスキー場の活性化策である。

ここでは、本学の学生による地域づくり提案と共生意識の創生について、具体的に述べてみたい。鞍岡地区の四億年の雫・野外ミュージアム構想は、三人の学生のフィールドワークにより、鞍岡地区が四億年ほど前の石灰岩の地層からサングの化石が産出されることから、エコミュージアム構想を

軸に提案している。化石資源だけでなく、地区の巨木、棚田、用水路、神社などの地域資源、郷土史家、森のインストラクター、自然食料理家、自然学校のエコツアーガイドなどの人的資源を展示物として、山里そのものをまるごと博物館にする提案である。一年をとおして、都市住民に山里を訪れていただき、散策しながら案内人と会話するエコツーリズム・山村ツーリズムの拠点づくりを目指す。

構想では、大学生である彼らが卒業時に取得する学芸員や教員の資格を活かす、案内板や看板の設置、パンフレットの作成、ツアーコースの開発、公民館に新しい展示室を設ける、小・中・高校生のための教育プログラムを開発する、インターネットでのホームページを開設し管理の手伝いをするなどの具体的提案をしている。現有の地域の宝を野外ミュージアムの展示物として利活用でき、冬場のスキー客のための宿泊施設に春・夏・秋にも宿泊客入れ込み増加をもうけている。都市から年間を通じて山里にきてもらうツーリズムを核とする地域活性化戦略である。野外ミュージアムはツーリズムという手段・手法によって来訪者に地域の風土を反映する自然的・文化的資源を伝え、地域住民とともにそれらを保全していこうとする試みであり、地域全体をまるごと博物館にする意義もこの点にある(梶原 2010, 吉兼 2005)。

自然的・文化的地域資源の発掘、価値の証明、展示物化、ツアーの開発のためには、フィールドワークに積極的に取り組む必要が生じる。その一端を、今回、本学の学生たちが担ったわけである。参加体験型の博物館ゆえに、初めての来訪者もリピーターもそれぞれの目的をもったフィールドワークを実施することができる。「まずはできるところから、ともに始めましょう」という学生たちの提案は、最終発表会や地区住民対象の報告会でなされたが、地域住民に高く評価された。フィールドワークはこれまでのハコ物として閉じられた博物館では事業の本流となりえず、博物館が存在する地域住民との関係性も希薄だった。参加体験型の博物館は実際にこの地で暮らしている地域住民の暮らしが展示されることにもなるから、地域住民の生活や意識と直接かわり、過去において先人達が地域をどう創ってきたか、この地を将来的にどのように創っていくのか、学生たちが提案した構想の大きな意義はまさにこの点にあった。提案によって地域の課題をともに考え、未来に向けてどうしていくのかをともに考えていくという学生たちの姿勢から、学生たちと地域住民との共生意識

の創生につながった。

おわりに(山間地社会で生きる人々は何を望んでいるのか)

筆者らは、大学を拠点として活動できる範囲のなかで、三つの山村を対象として具体的プログラムの検証を試みてきた。本報告の出だして、「都市から見えない山村社会の現実」について述べた。ここでは稿を締めくくるにあたって、「対話と共生」関係創生のフィールドワークから見えてきた「山村社会再生」について、「山村社会で生きる人々は何を望んでいるのか」の観点で考察してみたい。

本稿では「対話と共生」関係の構築を三つのプログラム、具体的には住民として暮らし対話するケース A (熊本県高森町の山間集落)、学識経験者として現地の会議に招かれ対話するケース B (熊本県球磨村)、大学の地域貢献の一環として地域づくりプロジェクトに参加し対話するケース C (宮崎県五ヶ瀬町) でそれぞれ検証してきた。

ケース A では、集落の戸数と定住人口が減少し、高齢化率が 50% を超える限界集落のケーススタディである。筆者が家族ぐるみで五年間の定住実験を試み「対話と共生」関係の構築を試みたことに最大の特色をもつ。筆者と家族が山村社会に暮らす当事者となって、身をもって山村社会再生の困難さを定住条件の厳しさという観点で新たな知見を見出すことができた。集落に暮らす人々は集落再生・地域再生に対する具体的問題について解決を望むことよりも、日々の生業や安定した暮らしが平穏無事に今後も継続されることを望む指向が強かった。集落の衰退を自ら食い止めようとする意識をもつことはほとんどなく、流れにまかせて生きる傾向が強かった。衰退を回避しようのない自然の流れと悟り、この地で生きられるかぎりこの地を離れまいとする強い意思も見受けられた。子どもたちは彼らの就職と結婚を契機としてマチに送り出した。自らの意思として子どもたちに集落を離れることを勧めたか、子どもたちの意思を是とした結果として、現実の集落の衰退があることを高齢の定住者は自ら認識している。

集落の一員として家族ぐるみで暮らすことと、集落の祭、寄り合い、道草切りなどへの参加を通じて対話が可能になり、共生関係も同時に創生された。ともにその場に暮らして対話によって山間地の暮らしの現実が認識できた。人口減少と高齢化によって畑が放棄されたり林地に変わる耕地利用の後

退現象が顕在化し、農業用水路・神社・薬師堂などの地域資源の管理が困難になっている。農地、森林、用水路、お堂、仏像など地域資源が今後どう管理されていくのか懸念される場所である。これら地域資源は都市住民を含めたコモンズ（共有資産）として保全されてもいいはずである。棚田、農業用水路、ため池、野草の草原などは、自然の物理的・生態的メカニズムと人間社会の歴史的営為の所産としてコモンズは位置づけられる（宮内 2006, 井上・宮内 2001）。集落の衰退・消滅によって、それら価値あるコモンズまで失われることのないよう保護・保全される仕組みの必要性を「対話と共生」関係の創生から学んだ。

ケース B では、過疎化と農林業振興が課題となる典型的山村である熊本県球磨村を対象に、農業振興アドバイザー会議の一員（学識経験者）として参加し、会議のまとめ役・答申書原案作成担当者として、協働作業にあたったケーススタディである。既存の「参加と協働」論に、会議運営と答申書作成のプロセスに参加→対話→協働→共生の流れを汲み入れ、「対話と共生」関係の創生を目指したところに特色がある。

会議と集落座談会で、筆者は多くの人たちと対話する機会を得た。その結果として、提案された多くの夢を収束させる形で答申書に盛り込むことができた。村農業ビジョンの策定、棚田活用の地域づくり案、補助事業の見直しについても同様であった。重要な情報が交わされる対話とは、会議や座談会の開催前や終了後の雑談、懇親会の席上の会話、現地視察の際の会話のやりとりなどのときが多かった。ともに村全体、村民、生業としての農業を真剣に考え、歩むべきプロセスをともに見い出そうとする対話の姿勢、つまりは目標の共有化が、会議メンバー間や集落座談会出席者との間で「共生」関係の創生に結びついたとも考えられる。

条件不利地域として位置づけられる山間地社会の再生は、現実にはかなり大きな障害があることが対話によって確認できた。答申書では、二大条件不利性の克服することなしに夢の実現と農業の再生はあり得ないとして、「鳥獣被害の抜本的対策について」と「耕作放棄地対策と農道・農地の整備問題について」を政策的に解決に取り組むよう指摘している。本ケースにおける対話は、会議や座談会参加者が何を望んでいるかを把握することに成功した事例といえよう。具体的な村民の夢、夢の実現のために現実に抱える障害や課題、

政策的取組みの在り方などに関する多くの情報が対話をとおしてつみあげられ、対話のなかでこれら多くの情報が整理・分類され、最終的に答申のなかにまとめられ収束し成果を出すに至った。

ケース C では、宮崎県五ヶ瀬町の地域づくり企画である「大学リーグ」に、筆者ら教員と学生が参加した。参加する大学は三校で、それぞれの調査地域に分かれて二泊三日のフィールドワークを実施し、地域づくり提案のプレゼンを学生主体で最終日に行う企画である。学生たちは調査地域で住民に聞き取り調査を行ったり、住民に現地を案内してもらうことによって「対話」の機会を得て、地域の現況や課題を知ることになる。そこから、学生たちの地域づくりのためのさまざまな提案が生まれてくることになり、創造性に富んだ教育・研究が対話を軸に展開される。引率する筆者ら教員は学生の指導はするが、あくまで彼らの自主性を重視する。教員に対して、町役場担当者は学生とは別に、現状の政策的取り組みに対するアドバイスやコメントをもとめてくる。それらに対して、教員サイドも口頭による回答、メールや文書による回答、簡易な報告書の提出で対応している。対話は引率指導の教員と地域住民・役場担当者との間でも学生とは別次元で展開されるわけである。

町行政サイドが大学リーグを町単独事業や国・県の補助事業として実施する目的は前述の点以外にも存在する。地域づくり事業やハコ物をつくるハード事業を国・県に対して申請するときに、これまでの先導的なソフト事業の実績が認可の鍵を握ることが前提にある。大学としても、教育・研究の場と機会を町が提供してくれ、参加費の一部を補助してくれるわけであるから戦略的互惠関係が生じている。学生の提案は未熟であっても、教育の場の提供という町の目的は達成されているし、滞在中に村民と友好関係が生まれ、何よりも村民の地域づくりに対する行き詰まり感や孤立感が解消される点において効能を発揮している。

大学リーグの特色は、大学から離れた山村というフィールドで、参加する三大学の学生・教員どうしの対話がなされることである。懇親会の席では、お互いの調査手法に対する意見交換、プレゼンファイル作成に苦労したこと、最終的な成果としてのプレゼン出来ばえなどについて、さまざまな対話がなされた。同時に、彼ら学生間でも、地域の情報を共有化し、課題解決のための提案をするプロセスにおいて、同じ日

本という国のなかでともに生き暮らしているという「共生」概念を獲得することになる。参加し交流する、協働の取り組みから対話、対話から地域再生の提案、対話と共生へのプログラム開発のモデル構築は、大学リーグのような取り組みのなかから可能になる。地域と大学が目標を共有して、具体的なムラづくりの実践がなされ、そこで対話と共生関係が構築されるというストーリー性をもってこそ、地域と大学が連携してムラづくりを行う意義が見えてくる。

最後になるが、山間地社会でフィールドワークを行い実態は把握したが、それで終わってはならない。それ以降の以下の三つのプロセスの大切さに気づかされる。①は、実態つまりは現実の姿を客観視してどう認識するのか（事実の認知）についてである。②は、認知された事実をどう捉えるのか（事実に対しての解釈）についてである。③は、現実の課題の克服・再生のためのプランニング（解決方法の模索）についてである。これらのプロセスは、自らが暮らす地域の理想像をどう描くか、そしてどのような方法で変えていくのかという目標・目的の共有化を前提にしている。参加・共同論や対話・共生論に基づく地域づくりは、共通の目標を掲げ成し遂げることを前提にしなければ、新しい山間地社会の構築を実現するには至らない。

参考文献

- 荒木昭次郎（1990）『参加と協働—新しい市民・行政関係の創造—』ぎょうせい
- 五十嵐勉（2008）「棚田の復田と農村の再生—棚田百選から大学との協働による重要文化的景観へ—」小林英嗣＋地域大学連携まちづくり研究会編『地域と大学の共創まちづくり』学芸出版社 pp. 51-55
- 井上真・宮内泰介（2001）『コモンズの社会学—森・川・海の資源共同管理を考える—』シリーズ環境社会学二，新曜社
- 上野真也（2004）「条件不利地域の再生」山下勉編『地域を創る』成文堂 pp. 37-67
- 岡橋秀典（2007）「グローバル化時代における中山間地域農業の特性と振興への課題」経済地理学年報 53-1 26-40
- 小野友道・上野真也（2006）『大学と地域形成—大学政策シンクタンクの挑戦—地域公共圏の構想Ⅱ』九州大学出版会
- 梶田真・仁平尊明・加藤政洋編（2007）『地域調査ことはじめ—あるく・みる・かく—』ナカニシヤ出版
- 梶原宏之（2010）「地理学とエコミュージアム」地理 55-10 pp.33-38
- 小林英嗣＋地域大学連携まちづくり研究会編（2008）『地域と大学の共創まちづくり』学芸出版社
- 作野広和（2006）「中山間地域における地域問題と集落の対応」経済地理学年報 52-4 pp.46-64
- 下平尾勲（2006）『地元学のすすめ—地域再生の王道は足元に

あり—』新評論

- 鈴木康夫・田中靖久（2009）「中山間地域における土地利用変化と限界集落対策—阿蘇郡高森町山東地域を例として—」東海大学総合教育センター紀要 第 29 号 pp. 115-132
- 鈴木康夫・田中靖久・永木 藍（2010）「山間地域における農業振興のあり方と政策的支援の方向性—熊本県球磨村農業振興アドバイザー会議の取り組みを事例として—」東海大学総合教育センター紀要 第 30 号 pp. 107-128
- 鈴木康夫（2010）「山村の農業振興政策」山中進・上野真也編『山間地政策を学ぶ』成文堂 pp.157-188
- 鈴木康夫（2010）「土地利用の変遷」山中進・上野真也編『山間地政策を学ぶ』成文堂 pp. 213-237
- 鈴木康夫（2009）「山間地集落における農業的土地用の後退プロセスと限界集落対策」経済地理学会西南支部 2009 年三月例会発表要旨 経済地理学年報 55-2 p. 187
- 鈴木康夫（2010）「山間農業地域の維持・再生のあり方と政策的支援の方向性—熊本県球磨村を事例として—」東北地理学会 2009 年度秋季学術大会発表要旨 季刊地理学 62-1 p. 52
- 住岡英毅・梅田修・神部純一著（2009）『地域で創る学びのシステム—淡海生産カレッジの挑戦—』ミネルヴァ書房
- 総合観光学会編（2010）『観光まちづくりと地域資源活用』同文館出版
- 田中靖久・鈴木康夫・生方 謙（2009）「農山村地域住民の Health Related QOL — SA-36 による測定—」東海大学総合経営学部紀要 第 1 号 pp. 35-43
- 中嶋信（2007）『新しい「公共」をつくる—参加型地域づくりの可能性—』自治体研究社
- 西川芳昭・伊佐淳・松尾匡（2005）『市民参加のまちづくり・事例編 — NPO・市民・自治体の取り組みから—』創成社
- 日高昭夫（2004）『地域のメタ・ガバナンスと基礎自治体の使命—自治基本条例・まちづくり基本条例の読み方—』自治体議会政策学会叢書 イマジン出版
- 松尾匡・西川芳昭・伊佐淳（2005）『市民参加のまちづくり・戦略編—参加とリーダーシップ，自立とパートナーシップ—』創成社
- 宮内泰介（2006）『コモンズをささえるしくみ—レジティマシィの環境社会学—』新曜社
- 山村研一・上野真也編（2010）『地域を創る大学の挑戦』熊本大学政創研叢書 7 成文堂
- 結城登美雄（2009）『地元学からの出発』シリーズ地域の再生 1 農文協
- 吉兼秀夫（2005）「自文化を自分化するエコミュージアム」地理 50-12 pp. 17-23

本誌への投稿について

1. どなたでも自由に投稿できます。
2. 原稿は本誌の目的「『文明』創刊にあたって（創刊号に掲載）」をご参照下さい）に沿った論文または研究ノートなどで、未発表のものにかぎりません。
3. 原稿の体裁
 - ① 邦文の場合：20,000 字以内（研究ノートは 16,000 字以内）、原則として図表は刊行の際のスペースを本文の字数相当に算入してください。他に英文サマリー 300 ワード。
 - ② 英文の場合：8,000 ワード以内（研究ノートは 6,400 ワード以内）、原則として図表は刊行の際のスペースを本文のワード数相当に算入してください。他に邦文サマリー 500 字。いずれ、本誌の「執筆要項」に沿った形でご提出下さい。
4. 投稿原稿の採否は、編集委員会の委嘱する査読委員の審査に基づき編集委員会が決定します。原稿は採否にかかわらずお返しいたしません。
5. 発行：年 2 回 原稿は随時受け付けます。
6. 投稿ご希望の方には「執筆要項」をお送りいたしますので、所属機関名、役職（または学年）および連絡先（住所、電話番号、メールアドレス等）を付記して下記までご連絡ください。

東海大学文明研究所

神奈川県平塚市北金目 4-1-1 〒259-1292

連絡先：湘南校舎 15 号館 4F 文明研究所

電 話：0463-58-1211 (EXT 4900, 4902)

F A X：0463-50-2050

E-mail：bunmei@tsc.u-tokai.ac.jp



No.15 2010

編集	委員長	川野辺裕幸
	委員	浅野清彦
		池上佳助
		加藤 泰
		中川久嗣
		松本俊吉
		松本亮三
		林 葉子

発行日	2011年3月31日
発行者	川野辺裕幸
発行所	東海大学文明研究所 神奈川県平塚市北金目4-1-1 〒259-1292 Telephone: 0463-58-1211 (EXT 4900, 4902) Facsimile: 0463-50-2050 E-mail: bunmei@tsc.u-tokai.ac.jp

製作・発売	東海大学出版会 神奈川県秦野市南矢名3-10-35 〒257-0003 東海大学同窓会館内 Telephone: 0463-79-3921 Facsimile: 0463-69-5087
-------	---

印刷・製本所	港北出版印刷株式会社
--------	------------

※本誌からの無断転載を禁じます。